

序章

栗原貞子は、行動する詩人として知られている。貞子はどのようにして詩人であることと平和運動とを両立させることができたのか。また、詩人としての営為において彼女の社会性、思想性はどのように開示されていたのか。管見によれば、従来の研究においては、この点について詳細に論証したものは見当たらない。それゆえ、本稿においては、詩を解釈すると同時に貞子が何を言わんとしているのか、そこに隠された社会性、思想性を明確化することを目的として考察していきたい。

貞子は、一九一三（大正二）年三月四日、現在の広島市安佐北区可部町上町屋の農家の次女として誕生した。父は土居小六、母はタケヨである。広島県立可部高等女学校を卒業した翌年である一九三二年、アナキストである栗原唯一と結婚をした。二〇〇五年三月六日、九二歳で自宅にて死去している。

貞子がアナキストの唯一と結婚したことは、その後の人生に大いに影響を与えることから先ず、アナーキズムについて考察する必要がある。アナーキズムについて『新社会学辞典』から引用する。

無政府主義と訳されるが、元来アナーキとは、古代ギリシャ語で「権力ないし政府の存在しない事態」を意味している。（中略）現実中存在する政府やその他の諸権力・権威に対して反抗する運動につながる。それゆえこの思想が、特定の秩序や体制を支配の正当的根拠として掲げる政府権力によって、危険極まりない存在と映り、増悪・弾圧の対象となっても、何ら不思議ではない。そのため、政治権力とそれを補佐する宗教権力は、民衆を奴隷状態に置くことを批判する「支配秩序の否定」を、「秩序一般の破壊」にすり替え、アナーキを「秩序破壊」ないし「無秩序」、さらにはテロリズムの同義語とさえ規定するイデオロギー操作を行った。そしてこの規定を拠り所に支配権力は、危険分子であるアナーキズムに対し徹底した迫害を加え、抹殺した。今日、民衆の間にさえアナーキズムを秩序破壊の危険思想と見なす通念があるのは、このような事情からであり、重大な誤解である。（中略）トルストイのような宗教的アナーキズムも存在する（注1）。

このことから考えるならば、アナーキズムは「無政府主義」であるが、一般的には「暴力的な反国家運動」だと理解されている。彼らは国家のない社会、無政府状態の社会を推進する思想を持つが、無秩序主義者ではない。また宗教的アナーキズムも存在する。日本において、アナキストの幸徳秋水は、大逆事件で死刑となり、大杉栄は、関東大震災後の混乱の中、殺害されたという歴史的事実がある。

唯一は、関東大震災の時、朝鮮人や社会主義者が虐殺されることに怒り、旧制中学校を中退し、上京して社会主義結社である平民社の運動に参加した。当時の情勢では、唯一は、

特別高等検察から甲号特高要視察人として尾行される身となり、準禁治産者とされた。そのような事から貞子の結婚は、両親に反対され出奔してのものであった。

貞子の文学者としての始動は、一九三〇（昭和五）年女学校を卒業した頃「処女林」（のち改題「真樹」）の同人となったことからである。「農業を手伝わずトイレに隠れて本を読むような文学少女だった」（注2）。トイレに隠れて本を読むほどの読書家であったことが、後の詩人としての土壌を育んだ。初期は、短歌、詩を詠んでいたが、戦後においては短歌から、詩へと向かうようになった。このことについては、貞子自身「私は戦後、桑原武夫氏の「第二芸術論」の影響もあって、歌との別れを行った」（注3）と書き留めている。更に、その理由を次のようにも示している。

短歌はその性格上、どのような目を弊う人間悲惨も、驚天動地の事件も、三十一文字に破綻なくまとめ、諦念の微光をほどこしても手工業的完成をしめす宿命と伝統の方法であるところから、三千万度の熱に焼かれた人間悲惨をまともにとりあげてうたうことは不可能のようである（注4）。

すなわち、被爆の惨状を三十一文字に表現するのは不可能であると考え短歌と別れ、詩作へと方向転換したことがわかる。ここに原爆のことを詠む詩人としての出発点がある。

『中国新聞』一九三〇年九月二十二日「文芸」面の「中国歌壇」欄に土居貞子の名で掲載された短歌（鉄道の修繕工夫のうちあげしつるばしのははみなく光る」といった労働の歌がある。女学校卒業したばかりのうら若い少女が労働を短歌に託すこと自体、留意すべきことであるが、それに加えて貞子の目は社会にむけて開かれていくようになる。これに関しての記述があるので、次に引用する。

・昭和初期、中国新聞の月曜日付には、一丸（一）こと使った文芸面があった。そこに「どい・さだこ」という常連の名が見える。栗原（旧姓土居）貞子であった。（中略）新聞に登場し始めた昭和五年は、県立可部高女を卒業したばかりの十七歳だった。「女学校時代、国文の前田倭文雄（しずお）先生が私の文学の目を開いて下さった。まだ大正リベラリズムが尾をひいていたところで、先生は関東大震災の時に日本人が朝鮮人に対し何をしたか、といった話や、石川啄木の思想について語ってくれた。私にとって大事な出会いでした」と貞子は言う（注5）。

・無教会派キリスト者矢内原忠雄に心酔していた林子は、明確な反戦の思いを持っていたと推定される。（中略）十三年のノートに以下のような短歌を書き付けていた。（地の上は騒然として暗くあり然るに夜々に清き星光）（高すめる星に御神を覚えとや地はいくさごと激しかるとも）文学少女だった貞子に、林子は思想的な影響を与えたと違いない（注6）。

前に述べたように貞子の文学者としての始動は女学校を卒業したばかりの十七歳である。新聞の文芸面に常連のように掲載されたことは、歌人・詩人の素養があったことに加え、恩師前田倭文先生及び反戦思想を持っていたと思われる林子の影響があり、社会の矛盾をうがっ批評性が貞子において育ち始めたことが関係していると推測できる。――

貞子は女学校を卒業すると、的場の姉の家に身を寄せており、そこで、将来大いに影響を受けた人との出会いがあった。まず、的場に隣接する段原町には『処女林』の編者、発行所である山本康夫宅が在り、そこでの集まりに参加するため、しばしば訪問していた。次に、キリスト者の四歳年上の大原林子が近くに住んでいた。貞子は林子と共に日本の妻である「紀代子夫人をかこんで、リベラルな青春をうたった」（注7）。このような環境が、『中国新聞』への短歌や詩の投稿が掲載されるまでの文学面での成長を促していたものと考えられる。林子は、その後結核で一九三九年に三十歳の若さで死去している。

林子の死後、兄で英文学者の大原三八雄氏の手によって『聖手に委ねて』（一九四三年）と題した林子の日記が、自費出版されている。日記において「昭和七年一月二日（前略）午前中、思ひがけなく土居貞子さん来る。彼女性の思ひ切った処置は驚かざるを得ない。アナキストとの結婚。……」（注8）と記述されている。また、「二月六日 今日午後四時にブラジルへの移民船が出ると新聞に出てゐた。三の宮から（土居）貞子さんの手紙を受け取つたのは二十三日前だった。「海へ飛びこ込むかもしれない」と書いてあつた。（中略）土居さんのフィアンセは手紙を見るとわななく慄えながら神戸にゆきますと言つてゐらした」（注9）という記述がある。貞子の結婚については、『問われるヒロシマ』（注10）に本人による詳細な表白があり、その記述によつて知ることができる。

唯一との結婚の経緯について前述した文章と重複するが、要約すると次のようになる。

「女学校を卒業した翌年の一九三一年の暮れ、私は十九歳で非合法な結婚をしました。」貞子が唯一を恰好良い青年と思つた理由は、「関東大震災の時、朝鮮人や社会主義者が虐殺されることを怒り、上京して平民社の運動に参加した。彼は、やがて特高から甲号特別要視察人として尾行巡査をつけられて郷里にかえり、徴兵検査うけるわけですが、その時、尾行を困らせた話など、ヒロイックで格好のよいことに思つていました」。そして、「われわれの前途は茨の道だ。それが承知出来るならついでにい」と彼にいわれた十九歳の私は、その殺し文句的効果に決心して松山へ同行することになったのでした。彼は二十六歳でした。」その後、貞子の家から警察に保護願いが出され、貞子は、保護され、両親のもとに帰った。「当時は社会主義者といえれば非国民で国賊で一族が社会から白眼視されつまはじきにされていきました。半月以上も監視されて私はたえられなくなり、父にいいました。「このままの状態ではどうしようもないので、私はいっそブラジルへでも行つて新しい生活を始めたい」それは、未知の人との、仮約束の結婚、入籍だった。貞子は、神戸の移民収容所でブラジル行きの船を待った。その時、貞子宛に電報が届いた。「サンノミヤエキニ六ジ デ ムカエタノム リンコ」に、友人の林子からであった。「私は神戸でも父に監視されて一銭のお金も持たされませんでした。」貞子は、「同室の人に電報を見せて電車

賃を五〇銭借り三ノ宮駅へ行きました」。そこで待っていたのは唯一であった。その後、唯一と貞子は、松山（宮本武吉と中野徹という若いアナキストがいた）へ向かうが、所持金を使い果たし、収入もないため唯一の郷里（可部町）に帰るため「宇品に上陸した私たちは林子の家にたちよりました」とある。（なお、十九歳は数え年と思われる）。

これらのことから林子の兄三八雄氏は、貞子が終戦直後詩作した「生ましめんかな」を最初に英訳した。貞子は、第七回原水禁世界大会においてソ連の核実験を容認するか否かの論争があった時に異を唱えたことから数年間孤立へと追いやられることになる。その間貞子の内奥を詩にした六編が、三八雄氏の発行している詩誌『ふれるうど』に掲載されている。このことから、貞子が四面楚歌状態に陥った時に、三八雄氏は亡き妹の親友であった貞子に手を差しのべ続けたことが確認できる。

一九四五年十二月、細田民樹氏と畑耕一氏を顧問に「中国文化連盟」を結成した（注11）山本康夫・紀代子夫妻、栗原唯一・貞子夫婦は、共に「中国文化連盟発起人となっている。このことから「中国文化連盟」の結成には、的場での交流があった山本康夫・紀代子夫妻の協力があったことが確認できる。更に、翌年三月に発刊した雑誌『中国文化』（創刊号）に山本氏は原爆体験記「幻」、短歌、詩を投稿している（注12）。以上のことを踏まえると、居住していた場合は貞子の文学の展開を促した地であり、唯一との結婚へと導いた地でもある。林子の友情がなければ、唯一との結婚には至っていない。貞子は的場のことをその後語っていないが、貞子の詩人としての礎が築かれた重要な地であったということが出来る。

貞子は『黒い卵』（一九四六年発行）の一〇八頁において「挽歌―大原林子さまに送る」と題し、短歌五首を詠んでいる。（十六）と記されていることから昭和十六（一九四一）年詩作であると推測できる。その中には、〈山たずね河をたずねてとめ行かな大原林子が奥津城どころ〉と言う一首が記されている。林子が亡くなった頃貞子は、反社会的と受けとめられた思想を持つがゆえに、社会的な抑圧のある状況のもとで生活は困窮し、困難を極めていた。そのため、林子の死を知ったのは、その二年後であった。この短歌から林子への変わることはない慕情が窺える。

貞子が女学校を卒業した翌年から満州事変が始まり、日本は、日中戦争、太平洋戦争へと突き進んだ。貞子が願望する自由とは乖離し、暗黒の時代へと加速して行った。戦時下での体制批判の思想を持つ貞子は、抑圧される者の苦悩、思想差別を体験することによって、差別する者への鋭い洞察力と批判精神を持った。貧困ゆえに長男（一九三四年）を死に追いやったことよって、経済力がないことは、人の命を奪うことであることを経験した。この体験は、将来弱者への共感を持つことに繋がった。また、爆心地から四軒の地点で被爆し、原爆投下三日後、隣の家の娘の遺体を引き取りに市内を歩き、原爆の極限状態、阿鼻叫喚の惨状を実体験した。このことは、被爆死した人たちの平和への祈り、生かされた者の責務としての「反戦・反核・平和」へと希求する原動力となり新たな方向性へと進ませ平和を希求する詩人を誕生させた。

ベトナム戦争反対運動に参加することによって、「原爆被爆者も加害者である」と明言し、日本から、アメリカへと、更には、世界の大国の政治や権力者に対し鋭く批判するようになって行った。また、一九七三年、山口県岩国米軍基地に「核」が存在し、核部隊が配置されていることが判明したことをきっかけに、政府に対し、危機感を持ち「書くことから語ることへ」、即ち行動することへ向かう事になった。このことは、貞子の根底に、常に生産的、かつ創造的な発想が据えられ、方向付けされた証左であるといえる。

そのことを結実した顕著な例は、一九九一年十月三十日、広島県呉港でのPKO反対デモへの参加である。「夕方家に帰ると待っていたように、低ごもった男の声で「死ね!」「殺すぞ」という脅迫電話がかかり、十一月四日には血盟団を名乗る者から血判と血液を散らした脅迫状が届いた。翌五日、私は行動委員会の人たちと一緒に記者会見をしました」(注13) という事実があったことを貞子は述べている。

貞子は、生涯「反戦・反核・平和」を一貫して全身全霊を投げ打った。「革命的ヒューマニストの立場」を尊重する貞子は、問題を表層的からだけでなく深層的視点から、また、多角的視野からも問い、そして、詩人としての鋭い感性と感覚でもって対峙し、咀嚼することによって「傍観者」としてではなく、抗議の渦中へ精神だけでなく肉体までも投じた。その姿勢は、戦争、原爆の悲惨さを体験し、二度とあってはならないと「反戦・反核・平和」へと身体の動く限り、詩人として、活動家として一線を駆け抜けた。それは、貞子の生き方そのものであった。その原動力は貞子の根底に「平和への信念」と「強靱な執念」があったからこそである。徹頭徹尾「革命的ヒューマニストの立場」である心情と反核の精神は死に至るまで失われなかった。

本稿では、そのような貞子の有り様について考察していきたいと考える。更に付け加えていえば、二〇一一年の福島原発事故後に、あらためて「原爆・原発・放射能」が人々の関心と呼ぶようになった。このことを踏まえて、今日において、「反核」のために生涯を詩人として運動家として闘った先駆者としての栗原貞子に焦点を当て、その姿勢から学ぶことには意義があるという見通しのもと考察していきたいと考える。

注

- 1 『新社会学辞典』 有斐閣 一九九三年二月 一五頁。
- 2 森田裕美 「戦後70年志の軌跡 第5部栗原貞子①」 『中国新聞』 二〇一五年十月二日一六日。
- 3 栗原貞子 『黒い卵(完全版)』 人文書院 一九八三年七月 一二四頁。
- 4 栗原貞子 「回想 ―敗戦・「中国文化」・短歌―」 『火幻』第十卷三七号 火幻の会 一九六七年一〇月 五六頁。
- 5 安藤欣賢 「ヒロシマ表現の軌跡 第一部栗原貞子の周辺 1」 『中国新聞』 一九八七年七月七日。

- 6 安藤欣賢 「栗原貞子に影響を与えた人々」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 四九頁。
- 7 栗原貞子 「帛紗」「生命賛歌」「三つの珠」によせて 『真樹』第四〇巻第一号 真樹社 一九六九年一月 三四頁。
- 8 大原林子 『聖手に委ねて』 大原三八雄 一九四三年三月 四〇頁。
- 9 注8に同じ。 四五頁。
- 10 栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月 一五三〜一五八頁。
注3に同じ。 一一八頁。
- 12 『中国文化』復刻版 中国文化復刻刊行委員会 一九八一年五月 一六五頁。
- 13 注10に同じ。 二六頁。

第一章 詩歌集『黒い卵』と詩「黒い卵」論

―時代に翻弄された『黒い卵』と戦時下で詠まれた「黒い卵」―

はじめに

詩歌集『黒い卵』は、一九四六年八月、私家版によって発刊された。当時は、アメリカの占領軍によってプレス・コード（検閲）が敷かれ、三編の詩と十一首の短歌が削除された。貞子たちは、この五ヶ月前に機関誌『中国文化』（原子爆弾特集号）（注1）を発刊するため事前検閲を受けたのに、事後検閲においてチェックが入り、難航した。その経緯から貞子は、事後検閲を恐れ、自ら「原子爆弾投下当日」の終わりの五首と「降伏」の四首の短歌を削除し、詩二十九編、短歌二百五十首を収めて『黒い卵』を発刊した。その後、貞子は一九八三年七月、検閲で削除された作品と自ら削除した短歌九首を加え、『黒い卵（完全版）』として人文書院から刊行した。『黒い卵（完全版）』の「まえがき」において「本書は、一九四〇年から四五年にかけて、太平洋戦争前から敗戦初期にわたる時期に私がつくった詩と短歌をあつめた詩歌集『黒い卵』の完全版です」（注2）との貞子の記述がある。なお、『黒い卵』の詩と短歌は、前半が「詩編」、後半は「短歌編」として構成されている。

『黒い卵（完全版）』の発刊に関しては、一九七五年、占領時代のことを研究していた袖井林二郎氏が、メリーランド大学マッケルデン図書館に収められた膨大な量の検閲押収文書の中から『黒い卵』のゲラ刷りを発見し、八二年に堀場清子氏（広島出身）が、そのコピーを取り同年十月に貞子に渡した。貞子は、『黒い卵』の原型を三十六年ぶりに目にし、検閲で削除された作品と自ら削除した短歌を加え、完全版として刊行した。

詩「黒い卵」の詩作は、一九四二年十一月である。初出は、一九四六年三月に発刊された『中国文化』（原子爆弾特集号）創刊号であり、同年八月に発刊された詩歌集『黒い卵』に収録されている。このことから「黒い卵」が執筆された時期及び、『中国文化』（原子爆弾特集号）の創刊号、詩歌集『黒い卵』が、出版された時期、時代背景を射程に入れ、発刊されたことについての意味を留意すべきであると考えられる。

詩「黒い卵」の先行研究において吉田欣一氏は、この詩が戦時下で詩作されたことから「ひとりの女性が夢見ることによって自らの生を支えて来た黒い卵、黒い思想、そこに秘められているロマンチズム、自らを励まして戦争中に、はばたけ、はばたけと心の中で叫んでいる。（中略）この詩の予感の正しさと、そこにこめられている人間の心の歯がみする思いが伝わってくる」（注3）と見解を示している。また、伊藤眞理子氏は、「戦時下栗原夫妻の最も精神的に苦悩を深くした時代の作品である。（中略）詩と思想を明確にした心象の作品である」（注4）と指摘している。

本章では、検閲という外圧の中で『黒い卵』が発刊されたことと、完全版としての『黒い卵』発刊への詳細な経緯について考察した上で、戦時下という非人間的な、環境の中から、貞子の内奥に迫ると共に詩歌集『黒い卵』が発刊された意義についても考察していく。

第一節 詩「黒い卵」の時代背景

まず、詩「黒い卵」の時代背景について具体的に見ていく。

詩「黒い卵」が詩作された一九四二年といえ、太平洋戦争が勃発した翌年である。日本の世情は、一九二五年に制定された治安維持法が更に厳しく徹底され、政治、経済から言論、信教とあらゆる分野において戦争遂行への確立がなされた。更に、天皇や戦争への批判は一切許されず、個人生活は極度に制限されていた。貞子が、アナキストの栗原唯一と結婚したことは、「序章」で述べた。アナキズムの思想である「人間の尊厳を重視する立場」の貞子にとつては、思想ゆえに抑圧され、日常生活は、なお更、息の詰まるような、厳しいものであったと考えられる。その様な環境であっても「私はこの戦争の目的ややり方に疑問をもち、戦争を批判する詩や短歌をおりをみては書いていた」(注5)と自己の心意を述べている。

当時、峠三吉の兄であり、共産党員である一夫が逮捕され、その現場に直面した記述があるので引用する。

- ・官憲の襲撃を察知した一夫は(中略)整理しかけた書類を便所につき落として棄てた。しかしついに逮捕され、足腰たたぬまで踏みつけられ蹴とばされた(注6)。
- ・長兄一夫も治安維持法違反の容疑で裁判にかかり一番では八年控訴審で七年の刑が言いわたされ(後略)(注7)。

太平洋戦争に突入してからは、戦争を批判する文章を記述したり、口外したり、禁断の書を所持することは、憲兵や特別高等警察に見つかれば、連行され、非国民、国賊として、下獄を余儀なくさせられるという状況があった。そのような時代に戦争を批判する詩や短歌を書きためること自体危険極まりない行為であったが、貞子は、「私が、反戦詩の詩を書いても大丈夫だったのは、私が、まだ無名で、誰も私が、そのような詩を書いていると知らなかったからです」(注8)と記している。貞子は、平和を希求してやまなかった当時のことを、「私たちは少数の友人と不自由な食物の入手など助けあいながら、心中ひそかに軍国主義に抵抗し、戦局を語りあってまぬかれ得ぬ敗戦の日を待った。(中略)そんな私にとつて八月十五日はついに来るべき日が来たわけだった。天皇の放送を聞いたとき、「やっど戦争が終わった」と言う感慨の涙がこぼれたが、虚脱も号泣もなかった」(注9)と記述している。

また、『黒い卵(完全版)』の「はしがき」に「私は戦争中も私の思想―自由と愛と平和の社会、非権力社会へのあくがれを純全に歌った。人々が戦争の讚美歌に夢中になっていく時、私は片隅で戦いなき世界を熱望した。そして今、戦いは終り世界は新しく結ばれる日が来た」(注10)との記述がある。昭和二十一年三月十八日と記されていることから初版

に記述されたものであろう。以上のことから「黒い卵」には戦時下での抑圧と圧制という特異的な背景があり、難局の中で詩作されたことが確認できる。

では、他の詩人たちは戦時下においてどうであったかについて、貞子は次のように述べているので引用する。

詩人たちは、日本詩人協会（一九四〇）、全日本女詩人協会（一九四一）、日本青年詩人連盟（一九四二）を結成し、「大東亜決戦詩集」「現代愛国詩集」「少年海洋詩集」「興亜詩集」「辻詩集」と相ついでアンソロジーを出版し、「愛国詩の夕」が開催され、詩の朗読がさかに行われた（注11）。

このことから当時の多くの詩人たちは、時代の流れに沿い戦争を謳歌する方向へ向けられたことが確認できる。

これまで述べたことから、貞子は、戦争中権力の抑圧から解放される日を待ちわびていたことが窺える。更に、青春時代から「反戦平和の思想を胸深く抱いて、戦争に向かう日本と世界を正面から凝視し、批判していた」（注12）と伊藤成彦氏が指摘しており、反戦の意志は、唯一と結婚する以前からあった。そして、貞子は、アナキストである唯一と結婚したことによって、社会、戦争に関してなお一層思索する姿勢へと方向付けされたといえる。

ここで留意すべきは、「黒い卵」が詩作された一九四二年である。貞子は、一九三一年出奔した上で結婚したことは、「序章」において述べた。

一九三九年、貞子は次女の純子を出産している。この時、貞子の母が訪れて実家の出入りが許されている。十八歳で家を出て以来八年振りである。その間一九三二年、長男哲也が誕生するが、二歳の時、消化不良のため死亡し、翌年、長女眞理子が誕生している。その頃は、軍国主義に抵抗していた故、困窮を強いられ、子育てに翻弄されていたと考えられる。三人目の子の誕生で喜びに満たされたことと、実家の出入りが許された安堵感からか短歌「純子生まれぬ」は詠まれているが、長男「哲也生まれぬ」、「哲也の死」、長女「眞理子生まれぬ」は詠まれていない。「哲也の死」に関して孫の内藤みどり氏は、「かつて息子が亡くなったことは伯母から聞き知っていましたが、それについて祖母が語ることは無く、語れないほどの悲しみ、苦しみだったと思います」（注13）と記述している。それ故か、「哲也の死」は、「愛と死」（詩誌『ぶれるうど』一九六五年七月号）との題で、哲也の死の三十一年後に詠まれている。また、伊藤成彦氏に宛てた書簡の中に「長男、哲也の事を書いた手記」がある。手記は、「可愛い坊や」から始まる。既に亡くなってから五十九年が経過しているが、今、そこに我が子が実在し、語りかけているように書かれている（注14）。このことから貞子は、五十九年経っても哲也の死を容認できないほどつらく、悲しいものであったと窺える。

前述したように、実家の出入りが許され、精神的にも経済的にも余裕ができた環境の中で「黒い卵」は詩作されたと考えられる。

第二節 『中国文化』（原子爆弾特集）の創刊号と詩歌集『黒い卵』の刊行

まず、『中国文化』（原子爆弾特集）の創刊号の発行について次に述べる。

細田民樹氏は、一九四五年三月十日の東京空襲に先立って広島県山県郡壬生町（現・千代田町）に疎開した。その年の五月に友人の弁護士須磨の葬式において栗原夫妻との出会いがあった。その時、細田氏の感想は、『黒い卵』の「序」の中において「さすがに夫婦で、長い間の思想的苦練を経てきただけに、あのとう／＼たる帝国主義的侵略戦争の間にも、女性ながら、よく堪え忍んで、じつと自分の感情と思想を操守してきたということであった」（注15）と述べている。更に、「政治、社会、思想など多方面に、しっかりと話のできる人であった。私は―失礼ながら―田舎にも、こんな夫婦がいるのかと、ちょっと驚いたくらいだった」（注16）と敬服している。この敬服故、細田氏は、原爆投下の翌々日、牛田町に住んでいた義弟一家の安否が気に掛り、入市したその夜、栗原宅を訪問し、栗原夫妻と一晩中語り明かしている。その時の状況は「もう戦争も長くない。戦争が終わったら文化運動を始めよう。こんなひどい無謀な戦争を起こしたのも、国民に自由な文化がなかったからだ。抵抗がなかったからだ。」と話しあった。（注17）との記述からわかる。この発言は、「敗戦の翌年三月、疎開作家の細田民樹氏、畑耕一氏を中心に私たちは文芸総合誌『中国文化』を創刊した」（注18）との記述があるように実現している。貞子夫妻と同じ思想を持っていた細田氏との邂逅が戦後、雑誌『中国文化』（原子爆弾特集号）の創刊と『黒い卵』の発刊へと繋がった。ここに思想と言う内在的なものが現実化したのである。

唯一は、『中国文化』（原子爆弾特集号）の冒頭に「新しい日が来た。平和が来た。ここではかつてのほしいま、なる権力は、今や木の葉の小判のやうに他愛なくなり、裁いてゐた者が裁かれ、不当の圧迫の下に呻吟してゐたかつての国家の敵は今や正しく配置されやうとしてゐる」（注19）（傍線論者。以下同様。）と記している。貞子たちは、厳しい弾圧の時代を乗り切ったがゆえ喜びもひとしおであったと窺える。貞子の詩「木の葉の小判」（一九四二、八）は、詩「黒い卵」と同年に詩作されている。その中に「狐がくれた木の葉の小判のやうに」という詩句がある。唯一は、その一節を『中国文化』（原子爆弾特集号）の冒頭に引用したと考えられる。戦時下の権力は、戦争が終わった今や狐がくれた木の葉の小判のやうに何の価値もない。人に踏まれゴミとして捨てられるただの木の葉だと風刺している。しかし、彼らは新たな検閲という占領軍の絶対性に脅かされ、困難に遭遇する事になる。

次に『中国文化』（原子爆弾特集号）と『黒い卵』におけるの検閲について明らかにしていく。

まず、『中国文化』（原子爆弾特集号）について記述する。

一九四五年九月十九日から一九五二年四月二十八日サンフランシスコ講和条約発効までアメリカの占領軍は、言論の自由と民主主義を掲げながらも、検閲を発令してアメリカの

原爆犯罪を隠蔽すると共に連合軍や占領軍について不利な報道を制限した。貞子たちは、機関誌『中国文化』の発行を決め、創刊号を原子爆弾特集号とすることにした。貞子は、検閲が発令されたことを知らなかった。「畑耕一氏から「太田さんが書いた原爆の作品が、検閲のため出版できない。原爆については慎重に対処するように」」（注20）との記述がある。それ故、貞子は、次のように行動をしている。

私は当時、向洋の東洋工業へ被災のため仮移転していた広島県庁の交渉課に行き、雑誌発行の意を伝え、検閲についてたずねた。係りの人は、「原爆だけはやめときなさい」（中略）と心配してくれた。しかし、原爆をさけて戦後の出発はあり得ないので、私たちは計画を変えなかった（注21）。

貞子は、戦時中、弾圧によって自由を奪われ、耐えに耐えた。戦争の脅威、思想の弾圧、更に、原爆の惨劇を目撃し、体験した被爆者として二度と繰り返してはならぬという信念と、生き残った者の責務ゆえ、試行錯誤し、困難を克服しての『中国文化』を発行した。原爆の焼け跡からの寒さと飢えのどん底の中での発刊は、相当なエネルギーが必要であったと窺える。当時は、食糧事情も悪く、福岡行きの手入れすることも困難な時代であった。発行人の唯一は、福岡の検閲局に行き、事前検閲を受けて帰った。『中国文化』の原稿は、部分的な削除はあったが、大した削除はされなかった。しかし、『中国文化』の発行人唯一は、検閲を受けたのに、呉吉浦の民間情報部（CIC）に呼び出された。このことについて次のような唯一の証言がある。

「中国文化」創刊号は指示通り事前検閲を受け指示通り事後検閲を求めたのに、CICのジョン・E・ケルトン砲兵大尉は机を叩いて怒った。プレス・コードの三項の「連合国に対し、虚偽もしくは破壊的な批判をしてはならない」、四項の「連合国に対し、破壊的な批判を加え怨情を招来する如き事項を掲載してはならない」と言う事項を知っているのかと言うのであった。軍法会議、沖縄送りと言う言葉があった後で唯一は「私は、アメリカをデモクラシーの国であると信頼している。デモクラシーの国が検閲制度を設け、検閲を受けた出版物に、再度文句をつけるのは、日本の検閲制度よりもっとひどい、それではアメリカデモ・クラシーへの信頼を根本的にくつがえすものだ」と言っようやく許されてかえった。その時今後の注意として、「原爆の惨禍が、原爆以後もなお続いていると言ふ表現は如何なる意味でも書いてはならない」と厳重に言い渡されたのだった（注22）。

この記述から当時の検閲の厳しさと共に、『中国文化』創刊に対して、検閲の三項と四項は、回避されたことがわかる。戦時下においても、唯一は、権力への隷属と直結しなかったからこそ、CICのジョン・E・ケルトン砲兵大尉を相手取って臆することなく、反論

したと窺える。また、推測すれば、唯一は、雄弁であったと解せる。そのことを証明する文章があるので次に引用する。

五五年に県議会議員に立候補、その後入党し、三期、県会議員を務めた。栗原の演説は、非常に人の心をひきつける魅力があり、それは天才的ともいえた。彼はいつも党内で選挙や演説の指導をしており、栗原の信奉者たちはそれを「栗原学校」と呼んでいた（注23）。

唯一は、天才的な演説を、相手が、占領軍の大尉に対してであっても胸を張り、裁かれる者でなく、堂々と対等な立場で反論し、啖呵を切ったと理解できる。――次に『黒い卵』である。

貞子は、『中国文化』（創刊号）発刊の三ヶ月後、『黒い卵』の刊行に着手した。占領下において『黒い卵』の出版に至るまでの手続きを記した文章があるので次に引用する。

七月二十日付で検閲願書を添えて、ゲラ刷り二部を福岡県地区検閲局の「刊行部・映画・放送課」に輸送し、間もなく削除する部分を赤線で引いたゲラ刷りに「許可」のスタンプを押して一部が返送されてきた。それにもとづいて、私は『黒い卵』を自費出版した（注24）。

この記述からも分かるように占領軍の検閲から許可を得るための煩雑さが解せる。次に、『黒い卵』が、完全版として発刊に至るまでの経緯について貞子の記述があるので引用する。

八二年十月、私は三十六年ぶりに『黒い卵』の原型を目にすることができました。私はそのゲラ刷りを読み、これらの作品を書いた戦争中のころや、自費出版するまでのいきさつを思い出しました。そしてその経過を書き入れ、削除部分を復活した完全版を出版したいと思うようになりました（注25）。

このことから、貞子は『黒い卵』の原型を再び目にした事によって、忘れていた戦時下の、思想弾圧の中、秘かに書いた当時の状況を想起し、『黒い卵』を完全版として出版したいと念願し、刊行したことがわかる。

このことに関して堀場氏は、次のように述べている。

私にとっても大きな喜びであった。権力によって歪められた言論は、“された側”が回復すべきだと、私は考える（中略）朝鮮戦争の時と、検閲のはじめが一番恐ろしかったと、栗原さんはいわれる。それでノートは二度焼かれたらしい（注26）。

このことから、貞子が、二度も戦時下で書き溜めたノートを焼却したほどの検閲の厳しさが確認できる。次の記述からも検閲の厳しさが理解できるため引用する。

原爆についてのGHQの検閲は徹底していた。日本人の医師や研究者は原爆の人体への影響に関して発表しようとしてもできなかったし、論文や研究の資料はすべて没収された。個人の被爆体験や原爆について書かれた詩や新聞記事も「公共の安寧を乱す可能性がある」ことを理由に出版されなかった（注27）。

以上のことから『黒い卵』は、検閲の影響を受け、歴史に翻弄されたことが窺える。また、袖井氏と堀場氏の助力が無ければ、刊行に至っていないことが理解できる。

第三節 詩歌集『黒い卵』において検閲で削除された作品と自ら削除した作品

詩歌集『黒い卵』に収録した三十二の詩と二七〇首の短歌のうち検閲によって三編の詩と十一首の短歌が削除され、貞子は、事後検閲を恐れ、さらに九首の短歌を断念したことは前に述べた。

検閲によって削除された詩三編について記述する。

「戦争に寄せる ―戦場の音の写実放送をきゝて―」（一九四二、八）の削除部分を引用する。

勇ましいラッパ！ 高鳴る軍楽！／神が、りのな調子で戦勝を告げるアナウンサー、
／煽る、煽る戦いの熱情！／ちよつとでも人間の理性をとりもどさないように／次々に現れては巧みに毒の言葉を／ふりまく国家の魔術師達！／完全に国家の魔術になった芸術的表現！／我が軍はすゝむ、すゝむ、敵軍めがけてすゝむ、／軍靴だ、銃声だ、爆音だ、砲声だ。／轟々たる戦車の前身だ。／敵艦轟沈だ。

この詩は、冒頭の十一行が削除され、続く三十行は許可されたものの作品の意味が解らないため、余儀なく全行を削除している。戦場の状況をラジオで聞いて詠んだ詩であることから貞子は、冒頭から聴覚に訴え戦場のあり様を直叙的な断言的な語で詠んでいる。この表現によって、戦争という時局の権勢がなお更わかる。この詩は、芥川龍之介の『桃太郎』において「進め！進め！鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまへ！」の文章を連想させる。戦争とは、国家がありとあらゆる言葉でもって戦意高揚を煽り、号令でもって兵士に、敵軍をめがけすすむのみと洗脳した。兵士は、愛国という麻薬にかかったように、人間としての思考力も理念も所持しない人格形成に追い込まれる。戦争においては日本軍も米軍も同じ類だろうと言うことから削除されたと考えられる。

次に全行削除された「戦争とは何か」（一九四二、一〇）を引用する。

わたしは戦争の残虐を承認しない／わたしはどんなに美しく装われた戦争からも／
にくい悪鬼の意図を見い出す。／そして自分達だけは戦争の埒外にあつて／しきりに
戦争を讚美し、煽る腹黒い／人々をにくむ。／聖戦といい正義の戦いというところで／
行われているのは何か、／殺人。放火。強姦。強盗。／逃げおくれた女達は敵兵の前
に／スカートを除いて手を合わせるというではないか。／高粱が秋風にザワ／と鳴
っている高粱畑では／女に渴いた兵士達が女達を追い込んで／百鬼夜行の様を演じる
のだ。／故国にあれば、よい父、よい兄、よい子が／戦場という地獄の世界では／人
間性を失ってしまつて／猛獣のように荒れ狂うのだ。

この詩の付記に「夫の唯一は、一九四〇年七月に徴用で病院船に軍属として乗り、上海
に上陸した時、日本軍人の残虐行爲を目撃し、それを私から聞いたのだった」『戦争
とは何か』には夫から聞いた話が生かされている」と記述している。このことから夫の話
を詩に詠んだものである。詩の冒頭から「わたしは戦争の残虐を承認しない」と強靱な意
志でもつて詠んでいる。大義名分と呼ばれる聖戦であつても戦争は、悪鬼が考えているこ
とだ。それなのに、戦争を勃発させた人たちは、実戦に加わらず、傍観者であるゆえに聖
戦と称し、讚美する。しかし、聖戦であるとされる戦場においては、「殺人。放火。強姦。
強盗。」とあるようにこの描写の一語一語は、強烈なイメージの単語である。更に、この単
語の列挙は、言葉の榴弾とも言うべきであろう。それゆえ、非人間性、不条理、残虐性
を意味し、理不尽な行爲が効果的に示されている。その展開は、地獄と化し、平常心を失
い「猛獣のように荒れ狂うのだ」と断定している。戦争の構造においては、人間存在その
ものが理性を失い猛獣のように荒れ狂うとしている。いわゆる戦争とは、人間を非人間に
陥らせると、戦争の本質を鋭く詠んでいると考えられる。

戦争に対する批判や暗喩は、米国に対する批判にもつながることから、占領軍が削除し
たのは当然だと考えられる。

次に戦後詠まれた詩であるが全行削除の「握手」（一九四六、二）を引用する。

ハロー、アメリカの兵隊さん、／昨日まで戦争ごっこに夢中だった／小さな軍国主義
者達は／玩具の武器を捨て、呼びかける。／ハロー、アメリカの兵隊さん、／小さ
な彼等の胸の中に／何かしら未知の民族への／あくがれが湧く。／ハロー、アメリ
カの兵隊さん／昨日まで僕らのお父さん達と戦つたのは／あなた達だったのでしょ
うか。／大人から教えられた鬼畜と云う影は／微塵もなく／大口を開けて明るく笑う
／アメリカの兵隊さん！／僕等あなたの大きな手と／握手したいのです。

この詩の削除の理由を貞子は、「握手」は占領軍批判とは逆の、子どもの立場からアメ
リカの兵士を歓迎した作品であるが、このような占領軍の権威主義が、敗戦国の黄色いジ

ヤップの子どもから握手をもとめられたりするのを拒否したのであろう」(注28)と述べている。しかし、堀場氏と奥泉氏との対談においては、「アメリカ兵に関する記述には、異常なほど神経質で、徹底的に削除処分がなされた」と、うかがいました。(中略) 占領者对被占領者としての秩序が必然的に崩れる」(注29)と指摘している。貞子は、平和思想の立場から、アメリカの兵士を歓迎のつもりで詠んだのであろうが、皮肉と解釈されたものである。詩の内容からも「握手」の題名からも、占領軍のプライドのため削除されたと考える。次に短歌で削除された「巴里陥落・ヒットラー」の十一首を記述する。

〈英国の業の、しりつその国に代わらんとする口はのごえど〉〈個人が侵せし時は罪となり国侵せしはたゝえらるゝも〉〈持たざる国^{ドイツ}独逸が持てる国犯す時人等はなべてうべないにけり〉〈持たぬ国が階級闘争の理論もて持てる国と戦いつゞく〉〈笑止なり防共と云いてつながりし国等が持てる国に挑めり〉〈善にても悪にてもよしすぐれたる縦横迅速の業讃うらし〉〈利益の前にはかつて己れ叫びしを軽々すてぬさもしヒットラー〉〈防共と不可侵協定は矛盾せずとあわれヒットラーの口舌に迷う〉〈先人が残せし珠玉守らんとあわれパリ―はついにくだりぬ〉〈ヒットラーの電撃作戦何ものぞ血に飢えてかくはいどみかゝれり〉〈次々に小国ほうりて勝ちおごるヒットラーに拍手送る人の多きも〉

当時、アメリカは、ヒットラー批判していたチャップリンを「アカ」として追放したことから考えると、ヒットラー批判よりも戦争体制そのものと受け止められたと考えられる。次に自主的に削除した短歌について述べる。

「原子爆弾投下当日」の削除部分を引用する。

〈のがれ来る人のおのゝ火傷して衣は肉に焼きつきており〉〈傷つかで真裸のまゝのがれ来し少女に子らのパンツあたえぬ〉〈散乱せるガラスの上を裸足にてのがれし人ら血まみれなるも〉〈郊外の収容所への道罹災者が延々として列をなせるも〉〈救援のトラックにのり死者傷者火ぶくれて怖ろしき相となりぬ〉

『黒い卵』を発刊する際、県庁の交渉課の職員から「原爆だけはやめときなさい」と言われ、原爆の惨状を直叙的に詠んでいることから削除したと考えられる。

「降伏」を引用する。(詩作時期不明)。

〈誇ることにのみ忙しかりし国人ら今はしずかに思い見るべし〉〈痛みには耐えて起つべし監視機の編隊の下に唇かみぬ〉〈急降下する巨大なる機体まざゝ^{ママ}に米国のしるし正眼には見つ〉〈超低空にとびゆく機体大空ゆどよもしてさと過ぎて行きたり〉

「降伏」と言う題だけに、敗者の心情と勝者の傲慢さを詠んだため削除したのだろう。これらの短歌は、貞子の心の高鳴る感動が直叙され、アメリカ軍の戦闘状況を詠んだことで削除したと考える。それぞれの短歌は、事前検閲で許可されたが、貞子自身が、削除したため『黒い卵』では掲載しなかった。

なお、堀場氏は『禁じられた原爆体験』の著書の中で「私見では、文学作品のうち俳句、詩歌は最も検閲がひどかったとみています」（注30）と述べている。詩と短歌は、小説より短く暗唱しやすいことから検閲で削除されたと窺える。――

第四節 詩歌集『黒い卵』の意義

『黒い卵』の詩の部分では、冒頭に「黒い卵」、最終に「つる草」が掲載されている。このことは、貞子にとって何かの意図があったと考えこのことについても考察していく。

まず、貞子の引用文から『黒い卵』の意義について考察する。

詩歌集『黒い卵』の冒頭の詩「黒い卵」や、「季節はずれ」「手紙」「日向ぼっこをしながら」などの詩は、私の反戦思想の基になっている思想的立場を意味する作品である（注31）。

この記述から貞子の反戦思想の基になっている詩「黒い卵」、「季節はずれ」、「手紙」、「日向ぼっこをしながら」において思想的立場がどのように表現化されているかを考察していく。

まず、「黒い卵」（一九四二、一一、一）を引用する。

私の想念は無精卵のように、／いくらあたたためてもあたたためても／現実の雛とはならないのか、／私の胸底深く秘かにあたためている黒い卵よ、／お前がその羽をはばたかせて／飛ぶ日は来ないのか、／お前がその固い殻を破ってはばたく時／人々はどんなにお前を讃美することだろう／極楽鳥のように幸を約束する鳥よ／はばたけ、はばたけ。

この詩の解釈は後で述べるため、ここでは、反戦思想に照射されている焦点について論述する。反戦思想とされるのは、詩の題名の「黒い卵」であろう。このことに関して伊藤氏は、「自由、自発の意志の尊重を掲げたアナキズムの旗印「黒」を象徴カラーとして」（注32）と指摘している。前述したように吉田氏も黒い卵、黒い思想と示唆している。また、水島裕雅氏は、「栗原の「鳥」は「飛翔＝自由」の象徴として歌われることが多く、またリーダーのいない秩序として鳥族はアナキズムの理想を表しているようである」（注33）と指摘している。アナキズムの信条は、「自由発意と自由合意にもとづく無権力社会」である。

いわゆる権力を持たない思想主義であることは、支配する者のいない、リーダーを持たない、自由、自発の意志を尊重する立場である。戦時下において日本国民は権力の下、戦意高騰のため一色に塗られていた。その中において自由、自発は反権力、戦争批判を意味していると捉えられるのである。貞子は、自由と愛と戦いのない平和の社会を希求していたと窺える。

次に「季節はずれ」は『栗原貞子全詩編』において「二十年十二月六日あたゝかい日農園にて」と記述されている。

わたしは或る日わたしの菜園にそつと種子をまいた。／でもいくら経っても芽は出なかつた。／わたしはとう／まちきれなくなつて／そつと鋤で掘つて見たけれど／種子らしいものさえなかつた。／わたしはあまり不思議なので／老いた農夫にきいて見た。／「それは奥さん無理ですよ、季節はずれですもの」／わたしはこの言葉に何か天の啓示にも似たものを感じながら／わたしの愚かさを寂しく思った。

この詩は、戦後のあたたかい農園にて詩作されたものと確認できる。種を蒔くことは、何を意味するのであろうか。種は、自分の信念とする自由、発意を象徴しているのではなからうか。ここに、時代はどうであらうとも、種を蒔き続けるという積極的な向日性がある。「黒い卵」の「卵」と「季節はずれ」の「種」は殻の中に命があるという共通点がある。「黒い卵」は自由な時代が到来し、命を育んで飛び立つが、「季節はずれ」の「種子」命があつても死んで何の痕跡もない。「黒い卵」と対照的である。「天の啓示」とは、種子をまくのも時があり、時を間違えれば発芽するどころか死んでしまう。全てにおいて時がある。これを「天の啓示」と詠んだのであろう。現在の終戦後でなく戦時下において反戦思想を掲げたことは、タイミングのずれ、「天の啓示」を考慮していなかつたことから、次の語句に「わたしの愚かさを寂しく思った。」と詠んでいる。この語から貞子の真摯な人生態度が透けて見え、更に、人間的成長が窺える。

次に「手紙」である。「―ピーター・クロポトキンに送る―」と副題が付いている。(一九四一、四)

私が書きさえすれば／無為自然の支那の友達へでも／遠い、アフリカの素朴な黒い兄弟へも／北方のグリーンランドへでも／ニューヨークの雑踏する街の中へも／運んで行つてくれる万国郵便法。／人間と人間を結合させずには置くものかと／戦争をしあつている国々へさえ手紙を運んで行く／あ、お前は世界を結ぶ血脈だ。／そしてお前を支配するものは／アメリカの一人でもなければ、／ロシア人の一人でもない／国々が相談しあい、話しあつて／連合した最初の美しい出発だ。／世界の友よ、／縦に横に連合しよう。／お互いに話あい／相談しあつて自由に連合しよう／あ、その時だ、／地上の一切の忌まわしきもの／けがれたるもの／影をひそめるのは。

アナキストの「ピーター、クロポトキンに送る」このことから既に反戦思想を示唆している。詩の冒頭から「私が書きさえすれば」と自由発意を詠んでいる。この詩の主旨は「国々が相談しあい、話しあって」である。この語句の自由発意は、日本国民の戦意高揚を掲げていた時代において、反戦思想である。南はアフリカ、北はグリーンランド、世界中の国々や大都會の雑踏の中へでも郵便は届けられる。万国共通の国際郵便である。微視的に個人対個人の間を見据えるだけでなく、紙切れであっても手紙は、巨視的に国と国との連合を呼びかけ、国を動かすことが出来る偉大な存在であり自由合意として捉えられている。このことから反戦思想と見ることが出来る。

次に「日向ぼっこをしながら」（一九四三、二）を引用する。

ダイオゲネスが皇帝に向かって「そこを除けてくれ蔭になるから」と言った時の／太陽は丁度今日のように／やさしく暖かく輝いていたのかも知れない。／絢爛たる皇帝の服をまとったアレキサンダー。／それにつゞく無駄な長い行列と／ボロ服を着たダイオゲネスを太陽は同じようにやわらかく照らしていた。／だのに一方は太陽に無感覚になり／一方はじかに太陽を感じている。／私はしみじみと初春の太陽を全身に浴びながら／その時の皇帝のみじめさを思った。

ダイオゲネスは、古代ギリシャの哲学者である。詩の冒頭から身分の上下の構造が窺え、更に、ダイオゲネスは皇帝に命令していることから権力を無視している。太陽の恵みは身分の上下に関係なく平等である故に、太陽の尊厳を肯定している。しかし、身分を誇張する絢爛たる服装は、太陽の恵みを受けることが出来ず、一方、哲学者という身分にも関わらずボロ服を纏っているダイオゲネスは、太陽の恵みを溢れるばかり受けている。傲慢と謙虚を対比させていることから権力批判、風刺と読み取れる。

以上これらの詩は、貞子の「反戦思想の基になっている思想的立場を意味する作品」であることが解明できる。

次に、「つる草」を引用する。

支柱さえ強く高ければ／天へもとゞく草です。／かよわくて直立は出来なくても／想いめぐり／想いめぐり／めぐりつゞけて伸びて行くのです。／だが風が激しく吹きまくる晩、／わたしは支柱と一緒に吹き倒れそうでした。／不安な想いで／いちずにすがればすがるほど／支柱はたよりなくて／ついには永い間／めぐりめぐらせていた想いをほぐして／離れようとさえするのです。／けれど、やがて朝が来て／太陽がやさしくほゝえむ時／しみじみと支柱に安住している／幸いを感じるのです。／わたしは弱い蔓草です。でも支柱さえ高く強ければ／天へもとゞく草なのです。

この詩は、冒頭から「支柱さえ強く高ければ／天へもとゞく草です、」と詠み、終結部に再び「わたしは弱い蔓草です。でも支柱さえ高く強ければ／天へもとゞく草なのです。」と詠んでいる。終結部は「草なのです」と断定している。途中「想いめぐり／想いめぐり」二度詠まれていることから、強調されていることがわかる。これはただ単に自分勝手に伸びているのではなく秩序を考え、想いめぐらしながら伸びていることが解る。「太陽がやさしくほゝえむ時」との描写から、日差しの強い太陽の陽でなく、暖かい日差しと言う環境も必然であることが読みとれる。「支柱さえ高く強ければ」の描写は、自分だけではどうにもならない弱さを見据えつつも「しみじみと支柱に安住している／幸いを感じるのでした。」と支柱を全面的に信頼し、安住する幸せを詠んでいる。では、この支柱とは何であろうか。『黒い卵』の意義を考えるならば、思想と読み取れるが、更に強い意志、戦時下においての平和を願う庶民の魂ともいえるだろうか。これらのことから「草なのです」の語句は、先を見据えながら前に向かって行く可能性、生命力を信じながら、自分の方向性を指し示す草といえる。

「黒い卵」は、「はばたけ、はばたけ」と強い願望、未来を詠み、「つる草」は、可能性、生命力の謳歌を詠んでいる。このことから「黒い卵」と「つる草」は、『黒い卵』の「はじめ」と「おわり」に飾る詩として通じ合わせ呼応しているように考えられる。

第五節 詩「黒い卵」を読む

「黒い卵」は経済的にも精神的にも少し余裕ができた頃に詩作した詩であることは、先に述べた。しかし、同時にこの時期において日中は、二人の娘の子育てに翻弄されている時期であると考えられることから、詩作は、夜家族が寝静まってきたものであろう。当時は、灯火管制の敷かれた状況である。国民精神総動員の政策の下「ぜいたくは敵」と言われ暖を取る手だてもない暗く肌寒い十一月である。そうした閉鎖的避難世界、異空間を意識しながら、詩作は、自然に内部世界の深層へと照明を当てることになったと考えられる。

この詩の冒頭に「私の想念は無精卵のよう」と詠まれていることから、貞子の想念であることがわかるが、その想念は「無精卵のよう」とある。「無精卵のよう」の語に着目するならば、この語は、現実には育たないかも分からないという観念が、生への可能性を稀薄化させることへの表現化と考える。

「黒い卵」は、何を意味するのであろうか。先行研究において述べられたようにアナキズムと示唆されていると考えられることから、アナキズムの卵であると捉えることができる。卵は、抑圧の中で、いつ潰れるかも分からないか弱い状態である。また、「現実の雛とはならないのか」、「飛ぶ日は来ないのか、」の語から疑問を投げかけているが、自分自身の葛藤であることが窺える。この詩の主旨は、「極楽鳥のように幸を約束する鳥よ／はばたけ、はばたけ」にある。極楽鳥とは、思想ゆえに抑圧、圧制の中、地獄のような現状で

あることから、苦しみや禍の無い真逆の極楽とし、自由に飛べる極楽鳥と詠んだのである。言い換えれば、自分が理想とする権力のない大空を自由に飛翔する鳥をここでは詠んでいるのである。しかも、「幸を約束する鳥よ」と確実性をもたらしている。この確実性が「暗」から「明」への転換となることが象徴されている。「黒い卵」は、幸いを約束する鳥となり、はばたくのである。「はばたけ、はばたけ」と命令調に、リフレインされていることから、強調されていることが窺える。貞子において如何に「はばたく」ことへの願望があったことがわかる。卵から鳥へと視点を移行し、展開することによって、一種の仕切り直しを示唆している。

戦時下において貞子は、反戦思想に立脚するがゆえ、ともすれば、人間としての弱さの中に落ち込み、出口のない部屋とも感じる環境に置かれていた。そこから脱出し、何処までも自由に飛んで行きたい願望の心情が、自分を鼓舞させたとも受け取れ、貞子の不羈なる叫びとなっている。

貞子の内奥は、未来への希望と解放の希求である。外部から遮断され、不安な色から希望の光へと移行することは、貞子の一途な思いである。希望を持ち自己の解放という可能性、向日性がある。それは、まさに生産的かつ創造的な発想である。

「黒い卵」の論点としては、貞子の権力に屈しない個性があり、政治に翻弄されない自己決定がある。更に言えば、この詩は、貞子の内面における眼差しが研ぎ澄まされた心理を提示し、深層に照明を当て、未来、希望に向かって行こうとする確固たる向日性を表した作品と受け止められる。

第六節 貞子の固有性

第四節において、水島氏、伊藤氏、吉田氏の三氏は貞子をアナキストと示唆していると述べた。しかし、貞子自身自らをアナキストと明言していないことから、検証が必要と考へ考察していく。

一九四六年三月十八日と記している『黒い卵』の「はしがき」には次のような記述がある。

細田先生が「無限の愛を歌うべき詩」と云って下さるのに、私はいつも無限の愛を求めて慟哭している（注34）。

細田氏が言う「無限の愛を歌うべき詩」とは如何なるものか、『黒い卵』の中に表現化された愛の詩の配列順に考察する。

「新春に想う」（一九四三、正月）を引用する。

あゝいつの日か世界はみんな一となり一人のこらさず／新しい年の始めの宴にのぞみ／

愛情こめて「今年も仲よく」と挨拶交わさん。／かゝる日の来るまで太陽も暗し。

戦争中にもかかわらず、「ああいつの日か世界はみんな一人のこらず」と平和の日に向けられた揺るぎない想いと希望を持って詠まれた詩であることがわかる。「愛情こめて「今年も仲よく」と挨拶交わさん。」との語から挨拶一つにしても愛情を込めていることが確認できる。ここに繊細で平和思想の「愛」が詠まれていることが明らかである。

「日々」(一九四一、四)を引用する。

「おーい」私はすべての人達に呼びかけたいような／もりあがって来る愛情を／意識する

全ての人に呼びかけたいような「愛」の思いが、自ずと湧き上がり、貞子自身それを意識していると考えるならばそれは、究極の「愛」があると考えられる。

「愛」(一九四一、五)を引用する。

私の愛の感度は／きりぎりすの触覚のように／せん細に前方に伸びていた、

「わたしの愛の感度は」と詠み、「きりぎりすの触覚」と詠んでいることは、何と敏感で、繊細な「愛」を求めて伸びているのであろうか。安売りの「愛」でなく他の人が気付くことなく見過ごしてしまうような深い「愛」を求めていることが解る。

貞子が言う「私はいつも無限の愛を求めて慟哭している」というあり様を表現化した作品があるので次に引用する。それは「疲労」(一九四六、三、一五)という詩である。

人間の愛情につかれたわたしは／裏畑の菜園に行く、／小さいチシヤの畝はソネットのように愛らしく／みどり明るい菜の色は私の疲れた心を／落ちつかせる。／過剰な感情生活から来る疲労が／誰も彼もに険悪を感じさせているこの頃、／友よ、もう美しいおしゃべりはよしてください。／そしてわたしのハートをかき立てないで下さい、
／わたしは一人でじっとしてたいのです。

この詩は、貞子が愛を称賛、讚美しながらも、日常の煩雑さの中にあって現実には可能とならない「愛」、また、疲れるほどの「愛」について、「私はいつも無限の愛を求めて慟哭している」とのあり様を表現化した作品であると考ええる。

貞子像を複合的、立体的に捉えるならば、アナキズムの信条である「全ての権力を否定し、自由自発、自由合意」を根底に据えそれに加え、切実な願いである「愛」への希求があると提言する。

おわりに

本章において詩「黒い卵」が詩作された時期、詩歌集『黒い卵』が発刊された時期に留意し、その特異的な占領下の支配の時代背景があることを述べてきた。占領軍の支配下での発行であったことから、検閲により、詩一編が部分削除、二編が完全削除、十一首の短歌が削除され、さらに貞子自身によって短歌九首を削除した上での発刊であった。その三十六年後、占領時代のことを研究している袖井氏が『黒い卵』の原型を発掘し、堀場氏は、そのコピーを貞子に渡した。貞子は、削除された作品と自ら削除した作品を加え完全版として復刊されるまでの経緯を明らかにした。

検閲において削除されたそれぞれの作品について検閲された意味を読みとりながら考察した。貞子が詩歌集『黒い卵』の意義は、「反戦思想の基になっている思想的立場」と明言していることから、貞子が述べている作品について解釈した。『黒い卵』は、反戦の立場から平和と自由を求めてやまない貞子の深層が表現化され、詠まれた詩歌集であると結論づけた。

詩「黒い卵」は、「人間の尊厳を重視する立場」でもって自由が到来することを懇願しながら、厳しい思想監視の中、自分の内奥をひっそりと書き、いつの日か発表できる日を夢見て詩作された。その根源は、世情に迎合することなく、権力に屈しない個性があり、自らどう生きるかの問いかけと政治に翻弄されない自己決定があったとした。

先行研究において、貞子は、「黒い卵」がアナーキズムの思想を示唆された心象の作品であると指摘されている。本章においては、アナーキズムの信条である「全ての権力を否定」することと「自由発意、自由合意」の姿勢を根底に据えつつも、それに加えて、切実な「愛」への希求があることを詩歌集『黒い卵』から読み解いた。

結論として、詩「黒い卵」は、抑圧と圧制の辛苦の中で、「未来」を模索したなかで、強靱な思想としなやかな表現によって生みだされた詩であると結論づける。

注

- 1 『中国文化』（原子爆弾特集号） 発行人・栗原唯一 編集・栗原貞子 一九四六年三月。
- 2 栗原貞子 「まえがき」 『黒い卵（完全版）』 人文書院 一九八三年七月 三頁。
- 3 吉田欣一 「栗原貞子の詩行動について」 『日本現代詩文庫 17 栗原貞子詩集』 土曜美術社 一九八四年七月 一四六頁。
- 4 伊藤眞理子 「栗原貞子の作品から一つをあげれば「黒い卵」」 『栗原貞子は語る一度目はあやまちでも』 広島に文学学館を！市民の会 二〇〇六年七月 六〇頁。
- 5 栗原貞子 『黒い卵（完全版）』 人文書院 一九八三年七月 一一五頁。
- 6 増岡敏和 『八月の詩人』 東邦出版社 一九七〇年八月 一三頁。

- 7 岩崎健二 『風のように炎のように 峠三吉』 汐文社 一九九三年六月 三八頁。
- 8 栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月 一三三頁。
- 9 栗原貞子 「光あるうち」 『世界』一九六四年八月号第二二四号 岩波書店 一九六四年八月 一三七〜一三八頁。
注5に同じ。 一三頁。
- 10 栗原貞子 「文学者の戦争責任 ―アジアの文学者ヒロシマ会議を前に」 『月刊社会党』一九八三年八月号第三二七号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八三年八月 一六七頁。
- 12 伊藤成彦 『栗原貞子全詩編』 土曜美術社 二〇〇五年七月 五頁。
- 13 内藤みどり 「行動的な祖母でした」 『人類が滅びぬ前に 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月 一二八頁。
- 14 伊藤成彦 「栗原貞子の世界 ―栗原書簡の背景」 注13に同じ。 四一〜四四頁。
細田民樹 「序」 注2に同じ。 一〇〜一一頁。
- 16 注2に同じ。 一〇頁。
- 17 注5に同じ。 一一七頁。
- 18 注5に同じ。 一一五頁。
- 19 栗原唯一 『『中国文化』 発刊並に原子爆弾特輯について』 『中国文化』原子爆弾特集号復刻並に抜き刷り(二号〜一八号) 編集発行人・栗原貞子 一九八一年五月 一頁。
- 20 注5に同じ。 一一九頁。
注5に同じ。 同頁。
- 21 栗原貞子 『ヒロシマの原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月 二〇八頁。
- 22 細川正 「人物風土記―社会主義者の群像広島―平和と社会主義をひたすら求めつづけて」 『月刊社会党』一九八六年四月号第三二二号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八六年四月 一二八頁。
- 24 注5に同じ。 一二二頁。 なお、当時の検閲は、便宜上日本は三つの地域に区分されていた。第Ⅰ地区は東京、横浜およびそれから北の諸地域におよび北海道を含んでいた。第Ⅱ地域には名古屋、大阪、松山周辺地域と本州の北陸、諸地域であった。第Ⅲ地域は日本の西部と南部、広島および九州であった。
注2に同じ。 四頁。
- 25 堀場清子 『禁じられた原爆体験』 岩波書店 一九九五年六月 四三頁。
繁沢敦子 『原爆と検閲』 中央公論新社 二〇一〇年六月 一三九頁。
注5に同じ。 一三〇頁。
- 28 堀場清子 「占領下の検閲をみる ―栗原貞子詩歌集『黒い卵』をテキストとして―」 『未来』九〇号 未来社 一九八二年九月 一六頁。
注26に同じ。 三九頁。
- 29
- 30

- 34 33 32 31
注5に同じ。 一三二〜一三三頁。
伊藤眞理子 「栗原貞子の詩と思想」 注4に同じ。 六〇頁。
水島裕雅 「栗原貞子論―原民喜との比較を中心として―」 注4に同じ。 二二五頁。
注5に同じ。 一三三頁。

第二章 「生ましめんかな」論

―栗原貞子の原点としての「原爆創生記」を視野に入れて―

はじめに

貞子の文学者としての出発点は、広島県可部高等学校在籍中に遡る。この頃から、文学書を読み短歌・詩を中心に創作活動を始めている。卒業後は、歌詞「処女林」（後「真樹」と改題）の同人となつている。『中国新聞』月曜文壇に短歌・詩を投稿し、「文芸」面に土居貞子の名で掲載されている。僅か十七歳で既に「処女林」の中心人物であつたようだ。このことに関連して、伊藤成彦氏は『栗原貞子全詩編』において貞子による五首をあげた上で、次のように指摘している。

土居貞子の名で『中国新聞』（一九三〇年十二月二十二日）「文芸」面（五面）「中国歌壇」に掲載された。同面に作者・土井貞子は「第六回広島短歌会記」を寄稿して「吾妹広島支社創立以来五ヶ月、機関雑誌『処女林』の発行後二ヶ月にして果然、広島歌壇及び詩壇へまでセンセーションをあたえた正確な新時代精神から出発した私達の歩みに双手をあげて集まつて下さつた方が今回も四十三名（うち女性十名）が相変わらずの盛会でございました」と書いて、作者がこうした活動の中心にいたことを窺わせる（注1）。

地方新聞ではあるが短歌・詩の投稿が掲載されたことは、同人からも評価されたことであり、更に、創作意欲を掻き立てられた出来事であつたことが窺える。既にここに歌人・詩人としての素養があつたことが確認できる。

『詩集 私に広島を証言する』は一九六七年七月、詩集刊行の会から第一版が刊行された。この詩集の第一章において「原爆創生記」と記し次のように述べられているので引用する。

詩集のタイトルである「私は広島を証言する」と言う詩は（中略）「生ましめんかな」の詩とともに数多くの出版物に転載され放送でもしばしば朗読された。「原爆で死んだ幸子さん」と共に三つの詩は私の戦後の原点である。（中略）この集は原爆当時の作品を中心に原爆の悲惨にも崩れぬ人間の愛のかなしさ、美しさを軸に原爆のなかへ立ちあがつて行く人々の姿を原爆創生記とも言うべくこの集にあつめた。なお、「生ましめんかな」と「原爆で死んだ幸子さん」はともに実在の明暗両面のものであるが、「生ましめんかな」の赤ちゃんは今、二十六歳となり愛や結婚について思う年頃徒となつた（傍線論者。以下同様。）（注2）。

貞子が言う「明暗両面」を額面通りに受け取ると「生ましめんかな」の赤ん坊は生きていて、「原爆で死んだ幸子さん」の幸子さんが死んだことは「事実」であると読みとれる。この文章から「明暗両面」は、この場合「明」と「暗」は同じ比重で「生」と「死」に分けられると捉えられる。だが、詩において「明暗両面」の「明」と「暗」は、同等の比重と扱われているといえるだろうか。「生ましめんかな」の赤ちゃんは、生きていたため二十六年経てば美しく成長し、愛や結婚について将来を夢みることができる。更に、生の連鎖にという将来にわたり多くの可能性を携えた希望がある。しかし、幸子さんは死によってこの世から消され、顔を見ることも、声を聴くことも、肌のぬくもりも感じることも無く、ただ思い出の中に生き、生の終止符を打つことになる。「明暗両面」という四文字の言葉の中に凝縮された貞子の思いとはなんだったのか。また、貞子は、「生ましめんかな」の詩について述べた後、「詩集のタイトルである「私は広島を証言する」と言う詩は（中略）「原爆で死んだ幸子さん」と共に三の詩は私の戦後の原点である」と述べている。本章では、貞子が、この三作品を原点としていることから、仮説を立てて、貞子のいう「明暗両面」が、「私は広島を証言する」においても表現されているか考察していく。

なお、前述した三作品の書誌は次の通りである。

「生ましめんかな」（注3）の詩作は、一九四五年八月下旬であり、初出は、『中国文化』創刊号（原子爆弾特集号）に収録され、一九四六年三月発行された。「原爆で死んだ幸子さん」の詩作は、一九五二年五月であり、初出は『原爆詩抄・私は広島を証言する』に収録され、一九五九年八月発行された。「私は広島を証言する」の詩作は、朝鮮戦争の期間であることから年月不明である。初出は、『原子雲の下より』に収録され、一九五二年九月発行された。

第一節 詩人として姿勢が確立された背景

「序章」において貞子は、夫の栗原唯一がアナキストであり、準禁治産者であることから両親に反対されて出奔した上で結婚したと述べた。唯一は、アナキストとして生きて行く運命の過酷さを知っていた。それ故、唯一は、貞子に覚悟を促したが、貞子はそれを自覚して付いて行ったことも述べた。そのため、貞子は、唯一の思想を受け入れていったようだと考えられる。その裏付けとして次のことが挙げられる。

戦争中秘かに書きとめた「手紙」―ピーター・クロポトキンに送る―（一九四一、四）という詩がある。さらに「戦争とは何か」（一九四二、一〇）は、夫婦合作とも言うべき軍国主義に抵抗した反戦詩である。その詩は、唯一が一九四〇年七月徴用で軍属として上海に上陸し、その時日本軍人の残虐行為を目撃したことを纏めたものである。

貞子は、平和を希求して止まなかった当時のことを、「心中ひそかに軍国主義に抵抗し、戦局を語りあつてまぬかれ得ぬ敗戦の日を待っていた」（注4）と記している。この記述が

らは貞子が戦時下においても常に敗戦を機にして軍国主義体制から解放されるその日を待ちわびていたことが窺える。

娘の眞理子氏は、「十八歳で非国民と言われる社会主義者の唯一と結婚し、極貧のどん底を生き抜いてきた母」(注5)と語っている。貞子は、「社会主義思想」ゆえに世からも親からも見捨てられ、辛苦を嘗め尽くし、苛酷な生活を強いられていた。その体験から、世の中の底辺の人々の心情が理解できていた。これは赤貧の中にあっても希望を失わなかった生き様が決して付け焼き場や借り物の言葉でなく、自ずと培われた姿勢であると推察される。貞子は、惨状の中にも人間として、温かみを見据える詩人の感性と批評家の理性との視点で、戦争をより広く捉えていた。貞子は戦争中、戦争賛美という時局下においても、なにもものにも束縛されない自由の精神において世情を觀照し、世間的な価値に迎合せず、戦争へと突き進む日本を見ていたといえる。自分の人生觀や世界觀を通して、社会がどう動いているか常に検証して生きていこうとする精神は、貞子自身の終生、根底から変わることはない一貫したものであったと窺える。

第二節 詩「生ましめんかな」について

「生ましめんかな ―原子爆弾秘話―」(一九四五、一一、二五)を引用する。

こわれたビルディングの地下室の夜であった。／原子爆弾の負傷者達は／くらいローソク一本ない地下室を／うずめていっばいだった。／生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声。／その中から不思議な声がきこえて来た。／「赤ん坊が生まれる」と云うのだ。／この地獄の底のような地下室で今、若い女が産気づいているのだ。／マツチ一本ないくらがりの中でどうしたらいいだろう。／人々は自分の痛みを忘れて気づかかった。／と、「私が産婆です。私が生まれましょう」／と云ったのは、さつきまでうめいていた重傷者だ。／かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。／生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも(注6)

この詩の成立に関して次のような記述があるので引用する。

原爆でこわれたビルの暗い地下室で、八月七日の夜、赤ん坊が生まれたと言う話を近所のおばさんから、聞いたのは八月の下旬だった。(中略)全体が死にとり巻かれた状態だったので、その話を聞いた私は、その場面だけが、宗教画のように明るく輝いているように感じられ、深い感動がからだの中を突きぬけた。家にかえってノートの端にひと息に書きつけたのが「生ましめんかな」の詩であった(注7)。

この詩を貞子自身が「ひと息に書きつけた」と言っているように、構成においても一連で収められていることから、貞子の息吹と感動が看取できる。貞子が偶然聞いた話であったが、貞子の培われた感性を触発し、視座を定め詩作への契機となった。その背景には戦時中、思想ゆえに家族もろとも精神的にも、物理的にも抑圧された苛酷な生活を強いられていた事実があった。そのしがらみから敗戦により解かれ自由になったものの、その一方で原爆の惨禍は、その自由への解放を打ち砕くものでしかなかった。貞子も被爆者であったことで、壊れたビルの地下室で赤ん坊が生まれた実話は、その場面だけが「宗教画」のように明るく輝いているように感動したのであろう。

小松弘愛氏は、このことに関連して次のように述べているので引用する。

・闇の中に一条の光をさしこむようなこの詩は記憶しておきたい一編です。
・かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。この対句仕立ての二行は、生と死の対立をあざやかに示し、(中略) 生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つともというリフレインを含む文語調の、オクターブの高さも、抵抗なく読者の心にしみこんでゆくのである。いか、(中略) ほとんど宗教的と言ってもよい「祈り」の声として、です。

・この産婆さん、三好ウメヨさんという方は、その夜死んだのではなく、戦後二〇数年生きのび、一九七一年、六五歳で亡くなっています。

・詩の中の、血まみれのまま死んだ産婆さん、それは、八月六日のヒロシマ、ひいては八月九日のナガサキで、原爆のために亡くなっていった、おびたらしい死者たちの象徴的存在として受け止める、ということですよ。このほうが、作品をよりふくらませ広がりのあるものと享受できるはずですよ。

・作者が強く訴えたいこと、つまりテーマを鮮烈にうち出すための虚構の導入ということになります。(中略) 作品は事実の単なる記述ではなく、想像力によって真実にせまるものだ、ということになります(注8)。

「生ましめんかな」の産婆は、事実としては生きていた。産婆は血まみれのまま死んだことにしたことへの解釈として小松氏は「想像力によって真実に迫るものです」と述べている。つまり、この詩は、産婆が死んだことで感動がひとお湧き上がるように構築されている。更に、フィクションの要素が組み込まれることで、「死」と「生」について事実よりもさらに詩的感動が生まれたと考えられる。

貞子は「生ましめんかな」を発表した後、この象徴的な事実が、一体何を意味するのであろうかと思考し、結論づけた文章があるので、次に引用する。

・暗い地下室で生まれた赤ん坊とは一体何なのだろう。それはアジア侵略の十五年戦争の暗い時代の末期に原爆が投下され、廃墟の中から生まれた世界平和の希望を意

味するヒロシマであったことに気づかされたのだった。では、血まみれのまま暁を待たず死んだ産婆さんとは一体何を意味するものであろうか。それは八月六日の平和を待たずに死んでいった二十万の被爆者を意味するのではないか。二十万の被爆者が死ぬことよって世界平和の希望であるヒロシマが生まれたのであった(注9)。

・結末の「生ましめんかな」「生ましめんかな」のリフレインは地下室の被爆者たちの合唱であるとともに戦争や原爆のない平和な世界を生まれようというヒロシマの合唱でもある(注10)。

この詩は象徴的であり、素朴なだけに読み手によって様々に解釈される。貞子は、何のための戦争か、戦争がもたらす空しさ、喪失感の中で死んでいった、あまたの死者たちによつて平和は生まれたのだと述べている。更に、「死を無駄にするな」と死者たちからのメッセージを伝え、何としても「戦争のない平和な世界を生まれよう」という恒久平和を実現し維持しなければならぬと訴えている。

この詩は「こわれたビルディングの地下室の夜であった。」と言う一文から始まる。実際に原爆が投下されたのは朝である。しかし、詩は朝ではなく、昼でもなく夜から始まっている。なんとしても夜であることを読者に訴えたかったのであろう。その意図とは、如何なるものであろうか。ここまでの詩句では理解できないが、詩を読み進めると、地下室にいる負傷者は、今はただ、夜が明けるのを痛みや血の臭いの中で耐え、じっと待つしかない状態であった。そのような暗闇の中で、赤ん坊が生まれるという声は、暗闇に光が射したと表現しなかったのであろう。このことから一条の光(赤ん坊が生まれる)を強調する故、夜と設定したと窺える。

「原子爆弾の負傷者達は／くらいローソク一本もない地下室を／うずめていっばいだつた」と言う描写に着目するならば、原子爆弾の負傷者達は、大なり小なり、原爆の熱線で火傷した人だと理解できる。多くの人は、座る気力もなく、横臥していたであろう。「生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声。」この描写においては、貞子は、地下室の現状を感覚に訴えている。嗅覚は血の臭い、死臭、汗くさい、聴覚はうめき声である。更に、視覚においては、ローソク一本もない暗がりである。蒸暑い夏、八月である。臭いは温度と湿度とに比例するという。地獄としかいえない状況である。「その中から不思議な声がかきこえて来た。／「赤ん坊が生まれる」と云うのだ。」この行から、その場に居合わせたほとんどの人は、負傷した傷の痛みのため、失意、虚脱状態である。傷の痛みのうめき声の中に「赤ん坊が生まれる」と発話された言葉は、不思議な声に聞こえ、新しい命の誕生は祝福、生への希望であることが読みとれる。「この地獄の底のような地下室で今、若い女が／産気づいているのだ。／マッチ一本ないくらがりの中でどうしたらいいのだろう。／人々は自分の痛みを忘れて気づかった。」この箇所から、原爆による崩れたビルの地下室でマッチ一本の明かりもない暗い夜、負傷者たちは痛みにあえぎながら、朝が来るのを心待ちにするだけの無気力の雰囲気で充満していたと窺える。「産気づいている」この事

実は、その場の雰囲気が無気力から気力へと一変させる。どうしたらいいのだろうかとお互いが、人を思いはかるうちに、打ちのめされるような傷の痛みの中でも痛みを忘れ、痛みから抜け出したと解せる。人間は、痛みをただ中においても、死の間際においても、絶望の中においても人のことを気遣う気高さがあると読み取れる。「と、「私が産婆です。私が生ませましょう」／と云ったのは、さつきまでうめいていた重傷者だ。」の描写からは、自分の命がいつ果てるとも分からない中で、産婆の、人間の使命感、高潔さが浮き彫りとなっている。「かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。」とは悲惨でこそあるが、一方で「死」と「生」が同時に地獄の底で起きたことを示している。「生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つともは、犠牲の美しさへの讃美、賞賛の眼差しを表している。

この詩は「：た。：だ。：た。」と「た」が五回「だ」が四回と断定的な過去形の語法が末尾にあることは、更に、「：」の語を強調させていると窺える。詩の結文「生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも」という文語体表現は、特異的であると共に、赤子の誕生によって未来への希望を示し、産婆の使命感が読み手を惹き付けており、更に、詩の構造、表現においても存在感と未来への希望を表し、貞子の豊饒な語彙と詩へのこだわりが垣間見える。

詩は、夜から始まり、暁に終わる。終わりの中に始まりが内蔵され、夜から朝に通じたのだ。当然のことであり日常のことであるが、地下室では非日常が起こった。非日常であった事実が詩「生ましめんかな」を誕生させた。貞子は、地獄のような惨状の中での「赤子の誕生」を「宗教画」のように耀きとして定位させた。暗闇だからこそ、闇の中の耀きは「希望」になった。貞子がいうここでの「明暗両面」とは、「明」と「暗」が決して同じ比重であるのではなく、「死」（暗）を乗り越えての「生」（明）であるため「明」が浮き彫りになっている。「明」が強調され希望であったからこそこの詩は、多くの人に称賛された。貞子は「明」こそを強調するため、この詩の冒頭は夜にしなければならぬと解釈できる。

この詩は戦後すぐに作詩された事にも注目したい。戦時中は発表できる日を待ちこがれながら秘かに詩作し、ノートに多くの詩を書きためていた。終戦は、耐えに耐えた詩作への情熱の火を点火させた。この詩は、その熱い思いがほとばしり出たと言えないだろうか。このように作者の精神に「宗教画」のような一条の光がさしたと考えられる。貞子の自由を実感する解放感と、作品を発表したい情熱が原動力になり「生ましめんかな」は『中国文化』の創刊を飾る詩となったのである。また、この詩は、世界各国に翻訳され、作曲され、歌唱され、ドラマ化され、教科書に採用された。このことは、被爆者がその悲惨にも敗けず、人間として立ち上がっていく姿を描き出しているからである。いわゆる、原爆を乗り越えて生きて行く人間の強さ優しさの人間讃歌への詩であるからといえる。「生ましめんかな」は様々な形で受容され、享受され栗原貞子の名を広め、威名となった作品である。

第三節 詩「原爆で死んだ幸子さん」について

「原爆で死んだ幸子さん」を引用する。

硫黄島陥ち／沖繩玉砕し／空っぽの骨箱もかえらず／国中の街々は黒く焼け払われ／
その上に／青い空が森閑としずもる／一九四五年八月六日。／あなたは綿の入った防
空頭巾を／肩にかけ／強制疎開の家屋の破壊作業に動員された／突然／きらめく青
い閃光／ビルが崩れる／炎が燃える／渦巻く煙のなか／たれ下った電線の下をくぐり
ながら／逃げて行く人の群。／あの日から三日目の晩／あなたは死体になってかえ
って来た。／空襲警報に入ったなり／解除されない暗い夜。／闇夜のなかで広島が赤
く燃えている。／日本全土がお通夜のような敗戦の／その前夜。／防空幕で遮閉した
暗い部屋。／仏壇の前にねかされたあなたの顔に／白いハンカチがかけてある。／
たそがれどき／既に発狂した罹災者たちは／獣のようにおらびながら／教室のなかを
馳け廻り／仁王のように火ぶくれた人間が／生きながら死臭を発してうめいていた。
／己斐小学校の収容所の土間、／ぼろ布を並べたような死体のなか／鉄製の認識表で
やっとわかったあなた。／あなたの顔に／誰がかけたのか白いハンカチが／かけてあ
った。／そのハンカチは焼け爛れた顔に／びったりくっついて離れはしない。／女
学校三年生、／今度の戦争の意味さえ知らず／花咲かぬまゝ死んでいった幸子さん。
／あなたのお母さんは／あなたのお母さんに焦げついて／ぼろぼろに焼けた防空服の上に
／真新しい花模様の白い浴衣を／着せかけた。／「縫ったまゝ戦争で一日も着せて／
やる日がなかった」と／あなたを抱いたまゝ崩れて泣いた。

「原爆で死んだ幸子さん」は貞子の実体験をもとに詩作されたものである(注11)。「原爆で死んだ幸子さん」に関連して、貞子自身次のように記述しているので引用する。

- ・ たった一人の子供が八月六日の朝トマトを食べたいとせがんだのに、与えないで学校に出して、それなり原爆で焼き殺されてしまったお母さんの深い嘆き(中略)これは沢山のヒロシマのお母さんの嘆きに通じるものでございます(注12)。
- ・ 死んだわが子の顔を見てやることもできないお母さんの嘆き。私は、幸子さんのことを思うたびに世界中のお母さんに向かって叫びたいと思います。「お母さん、あなたの子どもを、幸子さんのように死なせてもいいですか」と(注13)。
- ・ 生む性を持った女は原爆被爆のただ中でも子どもを生まねばなりません。戦争で最も苦しむのは母と子であります。生む性を持ち、生命を生み育てる女は何よりも平和を要求します。平和なくしては生命を生み育てることができないからです(注14)。

貞子は、戦争で一番被害を受けるのは母と子であり、かけがえの無い我が子に幸子さんのような死を二度とさせてはならないと世界中の母親へ訴えている。訴えは叫びとなり、

こだまとなり、こだまが集まりシユプレヒコールとなることを願っている。

この詩は、幸子さんの遺体を引き取りに行った日から約七年の歳月が流れてから書かれたものである。「生ましめんかな」は、人から聞いた話であることから、想像の中で一気に詩作されたが、「原爆で死んだ幸子さん」は、現状を体験しており幸子さんが、親しい隣家の娘ということから筆が進まず、何度も反芻し、推敲されたものとして考えられる。詩の構成において、一連は、第二次世界大戦の実相、次に、幸子さんの八月六日当日の様子、二連に進むと原爆投下時の状況、三連は、幸子さんを詳細に描写している。四連では、貞子が己斐小学校で見た原爆の悲惨、惨状が詠まれ、五連に進むとまたしても幸子さんの現状が示された上で、母による抱擁と涙が詠まれている。叙事詩のなかにも、母の愛を込められることによつて、抒情詩としても読者に訴えていると理解できるだろう。

この詩は「硫黄島陥ち／沖繩玉砕し／空っぽの骨箱もかえらず」という冒頭の描写において、貞子が戦争という悪の絶対値を体験した言葉が詠まれている。貞子は、「私は、戦争体験をバネにして平和創造について報告したいと思います」(注15)と記述していることから窺える。従つて、戦争に対しての空しさ、憤り、怒りを詠んでいる。「国中の街々は黒く焼け払われ／その上に／青い空が森閑としてしずもる」とはどういう意味なのか。「折づる」(一九六〇、六)という貞子の詩がある。その中に「原爆の子の像の下に／ひっそりしずもり」と記されている。この詩ではひっそり佇んでいると解釈できるが、ここでは「その上に青い空が森閑としてしずもる」とある。青い空と想像すれば、雲一つ無く晴れ渡る空を思い浮かべるが、それに続く言葉は「しずもる」とある。視点を変え、その言葉がどのような光景の下で語られているかを読んでみる。「街々は黒く焼け払われ／その上に」とある。このことから青空であつても白煙がかかっていると考えられる。貞子は杜甫の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」を想起したのでろうか。原爆は無人の野原に落とされたのではない。人間の頭上に炸裂したのである。その下には、つましくとも心和む市井の人たちの家族の暮らしがあつた。幸子さんは母に抱かれたが、今だに遺骨すら家族の元に帰らないものも多い。戦争とは、原爆とは、将来の夢多き女学生の上にも悲劇を容赦なく降りそそぎ、その死は、家族の者を悲嘆へと引きずり込ませる。貞子は、戦争の不条理、無慈悲、残忍性、反人間性への激しい怒りと憤懣をもつて訴えている。しかし、ここで注目する詩句がある。「あなたのお母さんは／真新しい花模様の白い浴衣を／着せかけた。／縫つたまま戦争で一日も着せて／やる日がなかった」と／あなたを抱いたまま崩れて泣いた。」この描写に至るまでの幸子さんの遺体は、「鉄製の認識表でやつとわかつたあなた。」、「そのハンカチは焼け爛れた顔に／びったりくっついて離れはしない。」、「あなたの皮膚に焦げついて／ぼろぼろに焼けた防空服の上に」の詩句から遺体の損傷がひどいことがわかる。ここに原爆の悲惨を詠んでいる。「縫つたまま戦争で一日も着せて／やる日がなかった」と／あなたを抱いたまま崩れて泣いた。」この描写は母の「愛」以外の何ものでもない。「死」は「暗」であると断定する以外ないが、この母の「愛」が「明」ともとれる。ここに「明」を見出すことができる。と提言する。

第四節 「私は広島を証言する」について

「私は広島を証言する」を引用する。

生き残ったわたしは／何よりも人間でありたいと願い／わけてひとりの母として／頬の赤い幼子や／多くの未来の上にかかる青空が／或日突然ひき裂かれ／かずかずの未来が火刑にされようとしている時／それらの死骸にそそぐ涙を／生きているものの上にそそぎ／何よりも戦争に反対します／母がわが子の死を拒絶するそのことが／何かの名前で罰されようと／わたしの網膜にはあの日の／地獄が焼きついているのです／逃げもかくれもいたしません／一九四五年八月六日／太陽が輝き始めて間もない時間／人らが敬虔に一日に入ろうとしている時／突然／街は吹きとばされ／人は火ぶくれ／七つの河は死体でうずまった／地獄をかいま見たものが地獄について語るとき／地獄の魔王が呼びかえすと言う／物語りがあったとしても／わたしは生き残った広島の人として／どこへ行っても証言します／そして「もう戦争はやめよう」と／いのちをこめて歌います。

『詩集 私は広島を証言する』のまえがきに次のような記述があるので引用する。

原爆の作品を書いた人たちは原民喜を始め、峠三吉、川手健、大田洋子、正田篠枝、美濃綾子は、それぞれの容で生涯を閉じました。原民喜、川手健の自殺はいたましく今も、私たちの胸に刺さりますが、正田篠枝、美濃綾子の死は、肉体を放射能に喰い荒され、骨まで浸蝕されながら、最後まで「生きたかりけり」と生の執念を持っていただけに、かなしさもひとしおです（注17）。

原民喜は、被爆後の惨状を『夏の花』に書き、川手健は、広島大学の学生時代、峠三吉と活動を共にし、山代巴と『原爆に生きて』を出版した。峠三吉は『原爆詩集』を書き、さらに叙事詩をとの希望を持ち、健康を得るため手術するが、手術台の上で死亡した。大田洋子は『屍の街』、『夕風の街』その他、原爆を扱った作品を書くが「原爆を売り物にするな」と批判され遂に挫折し、精神を病み東大の精神科へ入院し回復するものの、旅先において心臓麻痺で死亡した。正田篠枝は、検閲の中、死刑になってもいいと短歌集『さんげ』を出版した。美濃綾子は、実姉が一児を残し被爆死し、その子を引きとり洋裁の内職をしながら『広島文学』、『ひろしまの河』などに体験記を投稿した。このように被爆後、様々なジャンルで原爆の作品が残されている。「被爆者」という共通した精神の支柱を置いた仲間、あるいは同志の多くがこの世から去った事は、死によって閉ざされた遺恨を独りだけ生き残った貞子に、託され、重圧となった。それに、原爆文学は当時、原爆物、広島

物と揶揄されていた。原爆文学は、林京子氏の『祭りの場』が一九七五年芥川賞を受賞したことによって、初めて市民権を得たとされている。「私は広島を証言する」は、貞子を取り巻く世相、峻厳な検閲を見据え、孤軍奮闘し、なんとしても原爆の実情を証言しなければという堅固な決意が込められた詩なのである。

「私は広島を証言する」を発表した頃の状況を回想した貞子による記述を次に引用する。

・「私は広島を証言する」は占領と朝鮮戦争が重なってもっともきびしい弾圧下で書いた作品である。峠三吉は一九五〇年八月六日の詩で「走りよってくる。走りよってくる、腰のピストルを押えた警官が走りよってくる」と、朝鮮戦争下の警官包囲の平和集会についてうたっている（注18）。

・朝鮮戦争のきびしい言論弾圧とそれを敢えてする決意がなくても原爆についてふれることのできなかったことを意味する作品である。その頃、総合雑誌「世界」の読者が警察にリストされるといふ、今では信じられない状況があった（注19）。

・占領軍の検閲制度がいったん緩和された後、朝鮮戦争で再び言語統制が強化され、ゲンバクのゲの字も言えないと言った当時の作品で、峠三吉編アンソロジー『原子雲の下より』の詩集に、八島藤子のペンネームで発表した（注20）。

貞子は、「私は広島を証言する」の中において「原爆」という文字が一字もないことを述べている。しかし、「一九四五年八月六日」は原爆が投下された日であり、この詩句を示すことで「原爆」であることが解る。「八島藤子というペンネーム」が気になる。唯一と二人で発刊した『旬刊 生活新聞』（一九五一年）に投稿している詩においてのペンネームは八島藤子である。一九五一年は、唯一が町会議員に当選した時期である。それ故、栗原貞子と発表できず八島藤子としたのであろうと窺える。また、『原子雲の下より』は、一九五二年九月青木書房から発行されていることから、この場合も、実名では発表できず八島藤子としたと考えられる。しかし、発表した心情は、相当な覚悟があつてのことであろう。前述してきた二作品が見据えた「明暗両面」がこの作品にはどのように描写されているのか、更に考察していく。

「生き残ったわたしは／何よりも人間でありたいと願ひ」の描写からは「人間」であることを切望してやまない心情が読み取れる。被爆死した人は、虫けらのように傷つき殺され、人間の尊厳は微塵もなかった。私は虫けらではない。尊厳を持った人間である。人間であるからこそ、この逆境の時代の中で人間存在という視野を獲得すべきであると主張していることが読みとれる。また、権力にも服従しない、正々堂々と権力に対峙する人間存在としての貞子の強い意志があると理解できる。「多くの未来の上にかかる青い空が／或日突然ひき裂かれ」の語からは、青空が原爆投下によって、日常の穏やかさを一瞬の間に失い、暗闇の顕現となるきのこ雲を想起させる。「それらの屍骸にそそぐ涙を／生きているものの上にもそそぎ／何よりも戦争に反対します。／母がわが子の死を拒絶するそのことが」

の描写から無慈悲に殺された死骸を前に流す涙（嘆き）を、そのことと無関係に生きている人たちに、その涙（嘆き）を読む人に知ってもらいたい願望があると窺える。このことを踏まえて「生きているものの上にそそぎ」と詠んだのであろう。「死を拒絶するそのことが」からは次の「何かの名前で罰せられようと」と続いたため、息子を戦死させてはならない。いわゆる戦争を拒否するという意味に取れる。

「わたしの網膜にはあの日の／地獄が焼きついているのです」の語は、『証言は消えない』の中で被爆後二十一年経過しているのに「あの日のことが心の底にこびりついていて、今も忘れられないと思う」（注21）と述べていることから詩的表現としたのであろう。――

貞子は「地獄について語るとき」について、次のように述べているので引用する。

「地獄について語る」というのは、原爆の地獄について語ることを意味しています。

そして、「地獄の魔王が呼びかえす」というのは、原爆の地獄について語るとGHQの検閲官に呼び出されると言うことを意味しています。占領当時は、一編の詩をかくにもそれだけの覚悟をしなければなりません（注22）。

この記述から「私は広島を証言する」は、詩作したものの検閲の厳しさを覚悟しなければ発表できなかったことが解せる。しかし、なんとしても公表しなければならぬ堅固たる意志は、貞子の詩人としての使命感、人間の誠意が湧出する決断であると受け取れる。いわゆる「魂の告白」である。さらに重ねて述べれば、貞子は、検閲の中でも、現状はどうであろうとも原爆の惨事を秘匿、隠蔽しておけなかった。検閲にひっかかるか、ひっかからないか、薄氷を履むが如く、原爆の実相を詩作した。「私は広島を証言する」は、詩の題名からしても「個」が占領軍と言う「公」に対決して屈しないと、正面から叩きつけた挑戦状である。貞子の並々ならぬ覚悟と決意がさらに窺える。「私は広島を証言する」においては、原爆で生き残った者の使命として、貞子自身が広島を証言者であることを宣言している。このような貞子の姿勢に対して、眞壁仁氏は「広島体験、被害者の課題の積極性をとられているものとおもう」（注23）を指摘している。つまり、原爆に対する貞子の姿勢を、消極的でなく、積極的に悲惨の確認、人間の尊厳を証している点で重要であると述べているのである。更に言えば、この積極性こそが貞子の未来を切り開いていったと見做せる。

貞子は自分自身についての詩についての思いを次のように述べているので引用する。

私にとって詩とは他者と断絶した閉鎖的な思考の表現や呪文のような謎ときや、言葉あそびではなく、世界中のすべての人間的な根源に語りかけ核時代に生きる人間として、ともに人間のハートの鼓動を確かめあいたい（注24）。

貞子が述べる「人間のハートの鼓動を確かめあいたい」とは、お互いの心臓の鼓動を確

認するには距離をおいてはできないため抱擁することであろう。つまり、自分と同じ志である平和を願う人であってほしい、願望だけでなく互いが確かめあい、さらに次の段階へと踏み出してほしい、行動してほしいとの願いが貞子の詩には込められている。

では、この詩の中で貞子がいう「明暗両面」とは、どのように表現されているのであるうか、詩全体は「暗」としかいいようがないが、貞子は、詩の最後を「いのちをこめて歌います。」として結んでいる。叫ぶのではなく「歌います」と表現されていることに注目したい。歌には心の響きがあり、不思議な力がある。始めは一人で歌っているかもしれないが、引用文にあるようにお互いのハートの鼓動を感じ「戦争に反対」に賛同してくれる人が集まり大合唱になれば、世の中は変わると希望を見据えることであろう。こういった表現が詩の末尾に記されていることは、将来に向かって限りなく希望を見出した「明」として位置づけることが可能なのではないか。また、厳しい検閲の中で、ペンネームを八島藤子として、広島の証言者として自己を宣言したことも「明」である。

以上のことから貞子が述べる「明暗両面」については、これらの詩において「暗」の中にも将来を見据えての希望的志向性において「明」を表現しようとする姿勢があると結論づける。

おわりに

本章においては、貞子は自らの被爆体験を基に原爆を直叙的に詠んだ作品「生ましめんな」を中心に「原爆で死んだ幸子さん」、「私は広島を証言する」の考察を行った。貞子は「生ましめんな」、「原爆で死んだ幸子さん」、「私は広島を証言する」の三作品は、原爆を詠んだ詩人としての原点であると述べている。更に、「生ましめんな」、「原爆で死んだ幸子さん」はともに実在の「明暗両面」のものである」と明言していることから、これらの三作品について「明暗両面」の観点から分析を行った。「生ましめんな」においては暗い地下室、しかも夜という「暗」としか表現できない状況から「赤子の誕生」は将来に向けての限らない希望である「明」が提示されていると指摘した。「原爆で死んだ幸子さん」においては戦争、原爆の惨状、悲惨な幸子さんの遺体は、「暗」としか言いようがないが、母が、遺体に真新しい花模様の白い浴衣を着せ遺体を抱いたまま泣崩れた行為は、母の「愛」であり「明」となっていることを述べた。また、「私は広島を証言する」においても「ゲンバクのゲの字」すら口外できない検閲の状況は「暗」であるが、そのような中でも「私は生き残った広島の証人としてどこへ行っても証言します／そして「もう戦争はやめよう」と／いのちをこめて歌います。」と広島島の証言者として自己を宣言し詩の結尾に「いのちをこめて歌います」という行為に「明」があると結論づけた。

貞子は、限りなく「暗」の状態であっても微細な光を求めて「明」を見出そうとしている。これは、戦時中、反戦思想ゆえ苛酷な生活を余儀なくされた体験から培われた姿勢である。そのことは、原爆の惨状の目撃体験をもとにした作品において、「暗」の中にも「明」

を見出そうと姿勢へと繋がったといえる。

貞子は、未曾有の原爆の惨劇を目撃体験したことが、貞子を原爆の表現者としての詩人として方向づけた。また、前述した三作品とも叙事詩的内容であるため歴史の語り部ともいえる。事実を淡々と語るが、その反面、貞子は、事実をより深くより美しく想像を膨らませ、読み手の心に分かりやすく語っている。語りかけも、優しい呼びかけであったり、怒りであったり、叫びであったり、祈りであったりする。その思いを明確に刻んだ文章が『ふれりうど』の中に存在するので引用する。

詩人にとって詩は自己の存在証明である。戦争中どのように生きたかと言うことと同じように戦後の責任は重大である(注25)。

ここからは、貞子の詩に対する気構え、時代の証言者として、日々の生活の中にも、万事真摯に受けとめる人間性が読み取れる。そこには、原爆で生き残った者の責任を受け止め、ぼろ布のように焼き捨てられた死者たちの代弁者となることで、死んだ人たちのために事実を書き残し、次なる世代へ、継承しなければならぬとの使命感が根底にある。即ち、何としても平和を守り続けなければという強い思いが、三作品の底辺にある。

貞子は、被爆者として暗い絶望に陥るのではなく人間を信じ、未来に立ち向かおうとする姿勢があり、恒久平和を希求する崇高な精神こそが、貞子の戦後の詩人としての「原点」であると結論づける。

その後、貞子は詩作において「明暗両面」、「二面性」を追究することによって、更に、被害と加害の観点を明確にした「ヒロシマというとき」へと、その問題意識を展開させていく。

注

- 1 伊藤成彦 『栗原貞子全詩編』 土曜美術社 二〇〇五年七月 三七頁。
- 2 栗原貞子 『詩集 私は広島を証言する』 詩集刊行の会 一九六七年八月 六頁。
注1に同じ。 八八頁。 「作者注 私家版では「生ましめん哉」。初出は『中国文化』創刊号(原子爆弾特集号 一九四六・三)。詩の中の地下室は千田町の旧郵便局（マユ）の地下室『広島詩集・日本を流れる炎の河』に収められた時から表題の「哉」が「かな」と仮名書きにされた。」なお、この論文においては「生ましめんかな」と統一する。
- 4 栗原貞子 「光あるうち」 『世界』第二二四号 岩波書店 一九四六年八月 一三七頁。
- 5 栗原眞理子 「思い出すまま」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 九六頁。
- 6 詩の舞台となった貯金局は爆心地から一・五料である。

7 栗原貞子 『どきゆめんと ヒロシマ24年 現代の救済』 社会新報 一九七〇年四月 九頁。

8 小松弘愛 「栗原貞子 生まれめんかな ―原子爆弾秘話―」 『高知学芸高等学校研究報告』第三〇号別冊 一九八一年三月 一一〜一二頁。
なお、小松氏が触れている『女性自身』と『中国新聞』の記事に関して次の通りである。

・『女性自身』 光文社 一九八八年八月一四日号 四六〜五一頁。「シリーズ人間」の中で「本誌がついに見つけた！原爆詩（生まれめんかな）で死んだはずの人 生きていたあの日の助産婦Ⅱ 生れた子、生んだ母、生まれめた人の22年めの対面」と題しての記事が掲載されている。「最後の陣痛がきて、赤ちゃんが生まれたとき、ちやうど空襲警報で、ロウソクがつけられなくて（あかりが外へもれると空襲の目標になるから） 解除になるまでへソの緒をそのまま寝かしておいた。（中略） やつと解除になって木綿糸を五本ほどよりあわせて臍帯をしばって規美子（ウメヨさんの娘当時十二歳）さんが救急袋にいれておいたはさみで切った」と掲載されている。

・『中国新聞』（一九八八、八、二）に「助産婦のヒロシマ6 生まれめんかな 暗い地下室響く産声 自重傷の体で必死の手助け」と題し次のように掲載がある。まず産婆さん（三好ウメノ）は、昭和町（現中区平野町）に住んでいたこと。当時（三九歳）であったことが記載され、「背中と腕に大火傷を負い体温計の水銀が上がりきる高熱、自分が瀕死の重傷なのに、妊婦がいる、産気づいていると聞いたら急に起き上がった：気丈な母だった」と当時中学生で長男の淳夫さんは、記憶している。（中略）貯金局は、避難所になっていて、二、三十人が逃れて来ていた。赤ん坊が生まれると聞いて、比較的元気な女性たちも湯を沸かし、無事だった父や男たちは、焼け跡から金だらいやはさみを探し出してきた。みんなが協力した。（中略）母も介助しながらうめいていた。（中略）母はその後も、様子を見ていないと危険だと言って数日間は付き添っていた」と掲載されている。

9 栗原貞子 『核時代に生きる』 三一書房 一九八二年八月 一〇頁。

10 栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月 九七頁。

11 栗原貞子 『核・天皇・被爆者』 三一書房 一九七八年七月 一三〜二六頁。

幸子さんのあり様が記述されている。要約すると次のようになる。
貞子の隣に住む、幸子さんは、被爆当日、疎開作業に出て行った（爆心地から〇・五軒の土橋）。三日目に己斐小学校の収容所で死体になっていると通知があった。幸子さんの父親は、出征中のため、幸子さんの母親と、幸子さんの叔父と、貞子の三人が、一輪車をひいて遺体を引き取りに行った。貞子は、その道中広島市内の悲惨な状況を見、己斐小学校での惨状を目にする。幸子さんの遺体を一輪車に乗せて帰る途中ゴザに巻いた幸子さんの遺体から体液が出て何とも言えない臭いがした。やっと帰った家の中は、灯火管制のため防空幕で真っ暗であった。座敷は、電灯も遮

- 閉幕で覆われていたが、その下がほんのり明るいただけだった。
- 12 注11に同じ。 一九〇二〇頁。
- 13 注11に同じ。 一二六頁。
- 14 栗原貞子 「平和・被爆者・女性」 『部落解放ひろしま』第四号 部落解放同盟 広島県連合会 一九八六年六月 三一頁。
- 15 栗原貞子 「報告！ 憲法をとりでに平和創造を」 『月刊社会党』一九八一年五月号第二九八 日本社会党中央本部機関紙局 一九八一年五月 一二頁。
- 16 栗原貞子 『核・天皇・被爆者』 三一房書店 一九母八年七月 二五〇二六頁。
注2に同じ。 四頁。
- 17 栗原貞子 『詩と画で語りつく 反核詩画集 ヒロシマ』 詩集刊行の会 一九八五年三月 一五頁。
- 19 栗原貞子 『ヒロシマ原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月 二二二頁。
注2に同じ。 同頁。
- 21 栗原貞子 『証言は消えない―広島記録2』 中国新聞社編 未来社 一九六六年六月 一六六頁
- 22 「反核・平和・文化を考える―栗原貞子氏の講演から― 82・5・7 第2回芸文セミナーにおいて 「芦屋市立潮見中二年との交流関連文献」 栗原貞子平和記念文庫 フォイル45 広島女学院大学 「栗原貞子平和記念文庫」所蔵。
- 23 真壁仁 「怒りの証言」 『詩の中にめざめる日本』 岩波書店 一九六六年一〇月 七一頁。
- 24 栗原貞子 「他者と私を結ぶ詩を」 『詩と絵画 随想集』 詩通信社 一九八二年 一二月 四一頁。
- 25 栗原貞子 「広島のなかの私」 『ぶれるうど』第二五号 大原三八雄 一九六五年 七月 一頁。

第三章 詩集『ヒロシマというとき』と詩「ヒロシマというとき」論

―個人史としての『ヒロシマというとき』と

被爆者も加害者と提唱した「ヒロシマというとき」―

はじめに

詩集『ヒロシマというとき』は、一九七六年三月に三一書房から出版されている。それまで貞子は『詩集 私は広島を証言する』『詩集 ヒロシマ・未来都市』を刊行しているがいずれも私家版である。『ヒロシマというとき』が、三一書房から出版されたことについて貞子は次のように記している。

「ヒロシマというとき」は（中略）七六年に三一書房から出版したものです。この詩集は、哲学者の久野収氏が、六八年に「私は広島を証言する」を、朝日新聞の年度ベスト・ファイブに選んでくださって以来の御厚意によるもので、やっと出版ベースにのせられたのでした（注1）。

『ヒロシマというとき』は、出版社からの刊行が初めてであることから、久野氏の御厚意もさることながら詩人として世間で認められ、貞子の姿が大きくクローズアップされた意味ある詩集といえる。この詩集には序詞、1 原爆創生紀、2 日本を流れる炎の河、3 死の灰、4 失われた夏、5 愛と死、6 ヒロシマというとき、7 同心円、8 旗、9 原潜以後、10 未来の入り口と構成され、一三三編の詩が収められている。この詩集の全体の枠組みを俯瞰してみると、まず、被爆体験があり、日米新安保反対、連続する核実験に反対、ソ連の核を容認せず否と表明したことから孤立へと追いやられた実状、身近な人の死によることで孤立からの回復へと展開している。八五頁の「6 ヒロシマというとき」から貞子は、時代の流れへの眼が先鋭化され「原爆被爆者も加害者である」と提言している。このことによつて、この章が、問題意識を基底に構成した分水嶺となっているといえるべきであろう。この章より以降、ベトナム戦争への批判、核の被害者、ヒロシマ、ナガサキ、核基地の岩国、沖縄へと続き、最終部において「人間の証」（一九七五、一一、二八）は、仏同時核実験に抗議の詩である。

詩「ヒロシマというとき」は、一九七四年三月に発刊された『詩集 ヒロシマ・未来風景』に収録されたのが初出であり、詩作は一九七二年五月である。その後、貞子の詩集『ヒロシマというとき』『詩集 核時代の童話』『詩と画で語りつぐ 反核詩画集 ヒロシマ』やエッセイ集『問われるヒロシマ』などに収載されている。

『ヒロシマというとき』は、初めて出版社からの発行の詩集であることから、多くの人の眼に触れることとなり、多くの先行研究がある。安藤欣賢氏は、「昭和四〇年代のベ平運

動と接触している内に、貞子は日本の加害性に気付いていく(注2)と指摘し、また、川口隆行氏は、この詩を評して「日本の戦争責任、加害の問題を語りえた正典と評される」(注3)「加害と被害、糾弾と謝罪の交換の論理が強く貫かれている」(注4)との見解を示している。他に、南坊義道氏(注5)、杉本春生氏(注6)、高橋夏雄氏(注7)、吉田欣一氏(注8)、日高六郎氏(注9)、長坂哲夫氏(注10)、岩垂弘氏(注11)等が貞子の提言を首肯し、共感と賛同を表示している。これらのことから「原爆被害者も加害者」であることへの貞子の峻厳な認識こそ考察の根底に見据えなければならないと考えられる。

先行研究においても、貞子自身もべ平連によって「原爆被爆者も加害者」であると気づかされたと指摘したが、本章では、その直接的契機について、また、詩作された一九七二年の日本の世情を著目した上で、『ヒロシマというとき』の扉に記載されている「序詞」についても分析し、「ヒロシマというとき」の詩句に改めて注釈を施すことを通して、その輻輳的あり様を射程に考察していく。

第一節 詩「ヒロシマというとき」の課題設定

この詩は、詩人としての原点である「生まれめんかな」から二十七年後に発表されている。「生まれめんかな」は、被爆直後の惨事、原爆体験を直叙的に詠んだ時期のものであるが、「ヒロシマというとき」は、現状の中でヒロシマの意味を問い直す作品であると共に、二十七年間闘い抜いた精神のしたたかさを基に現代社会を痛烈に批判した詩でもあると云えよう。

『ヒロシマというとき』のあとがきに次のような記述があるので引用する。

この詩集は、変換する戦争史の中で、生き残った一人の被爆体験者が、その体験を通してどのようなおもいで生きて来たかという個人史でもあります。詩集のタイトルである、「ヒロシマというとき」は一九六五年に始まったべ平連運動が、「被害者であると同時に加害者である」という、反戦の新しい視点をきりひらいたことにより、原爆被害者もまた、軍都広島島の市民として侵略戦争に協力した加害者としての自身の責任を問う同名の作品名をそのまま用いました(注12)。(傍線論者。以下同様。)

貞子は、この詩集を原爆から生き残り、どう生きて来たかの「個人史」であると明言している。また、『問われるヒロシマ』(一九九二、六)において貞子は、詩「ヒロシマというとき」を次のように述べているので引用する。

この詩は、日本の戦争責任を反省し、戦争放棄の憲法を実行し、核廃絶、軍備の完全撤廃をする以外に世界の人々の友好連帯を得ることはできないということをつたった詩です(注13)。

これらの引用文から『ヒロシマというとき』は貞子の個人史であり、「ヒロシマというとき」について貞子は、「戦争責任を反省し、戦争放棄の憲法を履行し、核廃絶、軍備の完全撤廃をする以外には世界の人々の友好連帯を得ることはできない」と述べている。また、ここまで至った思考の経緯についても、此の詩から読み解かなければならないと考える。「ヒロシマというとき」の存在は、衝撃的であり、影響力は大きいと考え、また、『ヒロシマというとき』を「個人史」と述べていることから、この詩が詠まれた歴史的、社会的背景を視野に入れ留意しなければならぬと考える。

第二節 時代背景としてのベトナム戦争

「はじめ」において述べたが、貞子が触れている通り、この詩の誕生には、ベトナム戦争、ベトナム反戦運動の背景がある。本章における課題を明確化するために、まずは、時代背景となったベトナム戦争について押さえておきたい。

ベトナム戦争は、第二次世界大戦が終了した一九四五年から七五年まで三十年間にわたって続けられたベトナムでの戦争である。なかでもアメリカが本格的に介入した六一年以降のベトナム戦争は、世界を激しくゆさぶった。日本もその例外ではなかった。貞子は、原爆被爆者として戦争反対の立場から、ベトナム戦争反対運動に加わっていた。しかし、唯一の被爆国と公言せず、日本は、日米安保条約により、アメリカに追従しており、加担しなければならず、日本も当事者であり、「加害者」であって、国として戦争反対だと公言できない立場にあると認めざるを得なかった。

貞子は、ベトナム戦争について次のように述べている。

ベトナム戦争は実は海を隔てたベトナムにあるのではなく、内なるベトナムは私たちの生活の中に起きていると言う認識が起ったのであります。沖縄の B 52 の基地、佐世保の原潜の問題、八王子のアメリカ軍の野戦病院の問題、この間は九州大学に米軍機が墜落いたしました。そして広島からつい近くの、江田島の秋月、呉・川上弾薬庫の問題、(中略)ベトナムに大量のナパーム弾を打ちこんだり、毒薬を大量にまいてジャングルを焼き、野生の動物を全部焼きつくしたりする(注14)。

ベトナムは、日本からは、地図上において、遙か遠い国と意識される。しかし、日本の米軍基地から運ばれたナパーム弾、枯葉剤を米空軍は機上から落下させた。ナパーム爆弾は、ジャングルを焼いただけでなく、民衆の体を焼きその皮膚に、原爆のケロイドに似た痕跡をもたらした。枯葉剤は植物だけでなく人体にも影響を与え枯葉剤を浴びた人の二世たちにも影響を与えた。このことが、ベトナム戦争は、被爆者に原爆について思い出すことを余儀なくさせた。被爆者とベトナム人は、共にアメリカの新兵器の実験台とされた犠

犠牲者である。両者達は、同じ運命の基におかれ、体験した人間同士として深い共感を抱き連帯意識を持つに至った。貞子は、被爆者であることの観点から、ベトナム戦争の有り様を冷静にかつ敏感に捉え立体的、複合的に見聞して行くことになった。それゆえ、貞子にとってベトナムは、遠い国ではなく身近な国となり、無関心、無関係ではいらなかった。貞子がベトナム戦争反対の立場をとっていた具体的な例として「ヒロシマというとき」を詩作した同年同月に詠んだ「炎の署名」という詩が挙げられる(注15)。作者注として「岩国基地から核の積載機がベトナムに出撃していることが判明、広島へ平連を中心にした平和グループが緊急署名をあつめてアメリカ大使館に持参した署名簿に添付した作品です」とある。

「炎の署名」(一九七二、五、二二)を引用する。

署名簿のなかから／燃えあがる炎を　ごらん下さい／あの日灼かれたものたちが／
「水、水ヲ下サイ」と／焼けつく思いで／もめた声をきいて下さい／むらがる白い
蛆に／傷口を刺され／血膿にまみれて死んだものたちの／うめきを聞いて下さい／何
日経っても焦土のほとぼりは／さめず／八月の烈日に　照りつけられ／屍をふんで／
親や子や兄弟を／探し求めたものたちが／一滴の水さえ　あたえられぬまま／爛れた
犬のように／死んで行ったものたちを思いながら／「平和ヲ　平和ヲ下サイ」と／ひ
とり　ひとりの／名前を書きつらねたのです／ひとり　ひとりのこえは小さいけれど
／このこえは　日本中にひびき／ベトナムにひびき／アメリカにもとどきます／「ベ
トナムをヒロシマにするな」／「日本の空を」／「日本の海を」／「日本の地を」／
今、すぐかえして下さい／「水、水ヲ下サイ」／死者たちの切ない渴きをこめて／わ
たしたちは／「平和ヲ　平和ヲ下サイ」と／要求します

この詩は被爆を体験した者しか分からない被爆時の状況を具現化し、映像化していること
によって、臨場感があり、緊迫感がある。被爆死者たちは水を求め、平和を求め、人間
の尊厳も無く、のたれ死にした。貞子は、死者たちの命の重み、叫びを詠んでいる。注目
するならば「水、水ヲ下サイ」、「平和ヲ　平和ヲ下サイ」はともにカタカナ表記である。「水
ヲ下サイ」は原民喜の原爆小景の詩「水ヲ下サイ」(注16)を引用したものであると考えら
れる。カタカナ表記は、他の語彙と差異化されていることから、強調してのことであろう。
水は生命の根源である。平和は世界の根源である。ともに喪失したら、行く着くところは
は死である。このことを踏まえて貞子は核兵器が、ベトナム戦争において使用される可能
性が、米軍の戦略にあることを危惧し、ベトナムをヒロシマにしてはならないと詠んでい
る。原爆の投下により、水を求め、平和を求めて死んでいった被爆者たちの一人一人の悲
痛な叫び「このこえは　日本中にひびき／ベトナムにひびき／アメリカにもとどきます」
と詠み、被爆者の悲痛な叫びの波紋は、次々に波及し、やがて、加害を与えた発生源であ
るアメリカまで戻ってくるのである。いわゆる、ブーメランであると断言している。被爆

者一人一人には名前があり、人間の尊厳があつたが、爛れた犬のように死んでいった。この惨事を二度と繰り返してはならない。生き残った者の責任、平和を希求してやまない貞子の真意が根底にある。なんとしても原爆の使用を阻止しなければならぬ。悲痛な貞子の叫びである。この詩の結びには「要求します」とあることから、当時のニクソン大統領にあてた直訴状の体裁をとっている。このことからアメリカ大統領へでも原爆の惨状を訴えているこの行為は、貞子の積極性である。

第三節 「ヒロシマというとき」 詩作の直接的な契機

貞子は「ヒロシマというとき」を詩作した契機を次のように述べている。

「ヒロシマというとき」を私が書いたきっかけは、こうです。吉村さんという人がアメリカの国際YMCAマの会議に行つて、韓国の人たちやら東南アジアの人たちからほんとうに目の前で言われわけなんです。「いまでも、日本にもう一度原爆が落ちればいいんだ、経済戦略の次は軍事戦略だ」と。そのことを聞きましてね、私はほんとうに衝撃を受けました（注17）。

日本にとって原爆は被害の象徴であつてもアジアの人々にとっては日本からの解放を意味していた。貞子は感性豊かな詩人であり、ベトナム戦争反対運動に参加していただけにシヨックであつたと窺える。まさに貞子の意識は百八十度転回した。ベトナム戦争反対運動においては、アメリカの加害性を弾劾していたが、弾劾されるのは日本ではないかという反省のもと、貞子は、日本の加害の実態を探究し、解明し、先の戦争における「被害」と「加害」とに改めて目を向けることになった。当時、沖縄の核付返還が進行し、国会で問題にされているさなか「山口県の米軍岩国基地に核兵器が貯蔵され、核部隊が存在することが判明した」（注18）と『原水禁ニュース』に掲載されている。このことから、本土が沖縄化へと方向づけされると危惧し、非核三原則「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」に反しての政府の対応に不信感、疑惑を抱き、異議申し立てとして「ヒロシマというとき」は詠まれたものであるとも考えられる。

以上の事実から結論づけると、詩「ヒロシマというとき」が生まれた直接的な契機は、吉村氏の体験を通してアジアの人々から日本への批判的な言葉を聞いたことと、米軍岩国基地に核兵器が貯蔵され、核部隊が存在することが判明し、日本政府への不信感、危機感が募つてのことだと確認ができ、ここに、貞子の社会思想、平和思想が窺える。

第四節 「序詞」について

詩集『ヒロシマというとき』には「序詞」が記載されていることを前にも述べた。「序詞」

が付されているということは、『ヒロシマというとき』を読み解く上での方向性が明示されていることになる。先行研究において「序詞」についての言及は、なされていないが、本章では詩の解釈の手掛かりとして考察してみたい。

わたしらは／激しく燃えて光りながら／無数のわたしになり／無数のあなたになって
／際限なく爆発しつらなつて／世界をヒロシマにかえる（注19）。

この「序詞」は、『詩集 私に広島を証言する』（一九六七年七月発行）の扉にも掲載されている。貞子の詩は叙事詩が多いが、この「序詞」は抽象的である。解釈するのは難解であるが、彼女自身の言葉を手掛かりとして明らかにしていく。

「輪」二十三、四号を拝して、ヒロシマでのげしいショックが、「輪」の内部に爆発をおこし、現状変革をうながしているように思われます。ヒロシマによる内部爆発がどのような連鎖反応をおこして行くか興味深く思っています。（中略）ヒロシマは核爆発の方程式を平和の方程式に逆用し、平和を増殖させて行くものを、内臓^{ママ}していると思います（注20）。

詩の冒頭の「わたしらは」の語の中に私も、あなたも含まれる。初め小さい輪の爆発であろうが、爆発の連鎖反応により、どんどん大きい輪となる。一人では、平和にならないが、わたしもあなたもお互いの輪が大きくなれば、「世界をヒロシマにかえる」ことができ。ここでの「ヒロシマ」は「平和」と読み取れる。貞子が述べるように「ヒロシマのげしいショック」すなわち燃えながら、永遠に爆発し続け、増大し、進化すれば世界は必然的に平和へと変わる。この行程は揺るぎない科学が証明する「方程式」なのである。「序詞」が記載されている『ヒロシマというとき』は、読者一人一人が平和を希求し、世界を平和に変えるほど激しく燃え一体化してほしいという懇願の表れの詩集であると窺える。それと共に、詩集に掲載されている「ヒロシマというとき」をはじめ他の一編一編の詩は、貞子の内奥から激しく燃える炎であり、その炎は火の粉となり、さらに烈しく燃え連鎖し、世界平和へと繋がる礎の詩であると解せる。

以上のことから、この「序詞」は、わたしらは一つの共通認識（反戦・反原爆）を持ち、それが世界へ広がって行き一人一人が責任をもって、証言・行動する。読者に共感と一体感を促した平和への希求の詩であり、この「序詞」が指し示す方向性において『ヒロシマというとき』を読み解く必要性があるといえる。

第五節 詩の注釈

本章では、詩の解釈に先立って、詩の世界の奥行きを作り出しているものとして据えら

れている、一つ一つの語に注釈を施していくことから始めたい。次に「ヒロシマというとき」(一九七二、五)の全文を引用する。

〈ヒロシマ〉というとき／へああ ヒロシマと／やさしくこたえてくれるだろうか
／〈ヒロシマ〉といえば〈パール・ハーバー〉／〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉
／〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を／壕のなかにとじこめ／ガソリンをかけて焼いた
マニラの火刑／〈ヒロシマ〉といえば／血と炎のこだまが 返って来るのだ／／〈ヒ
ロシマ〉といえば／へああ ヒロシマと／やさしくは／返ってこない／アジアの国々
の死者たちや無告の民が／いつせいに犯されたものの怒りを／噴き出すのだ／〈ヒロ
シマ〉といえば／へああ ヒロシマと／やさしくかえってくるためには／捨てた筈
の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない／その
日までヒロシマは／残酷と不信のにがい都市だ／私たちは潜在する放射能に／灼かれ
るバリアだ／／〈ヒロシマ〉といえば／へああ ヒロシマと／やさしくこたえがか
えって来るためには ．／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならな
い

詩を解釈するうえで、最初に注目すべき語句がある。タイトルにある片仮名での「ヒロシマ」の意味と、詩の中で詠まれた「パール・ハーバー」、「南京虐殺」、「マニラの火刑」、「バリア」を挙げ、それぞれについて整理していく。

まず、広島が「ヒロシマ」と表記されるようになったその時点について考察する。

最初に表記されたのは、一九四九年四月に発刊された、ジョン・ハーシー著『ヒロシマ』である。『ヒロシマ』のあとがきに「一九四六年五月、作家ジョン・ハーシー氏は従軍記者として広島に来た」(注21)と記され、広島において、原爆の実状を視察し、被爆者との面談を行ない「被爆体験を詳さいに聴き帰国」(注22)とある。ハーシー氏は、帰国後『ニューヨーカー』誌に被爆のルポタージュ『ヒロシマ』を発表した。この記事は大反響をよび一日に三十万部を売り尽くした。各地の大新聞は連日『ヒロシマ』を連載した。ハーシー氏は、「アメリカ国内のみならず、『ヒロシマ』はカナダに、英国に、南米諸国に、そして欧州各国に英語でのみならず十数カ国語に翻訳されて宣伝されるに至った」(注23)と記述している。ニューヨーカー誌での被爆体験記録は、『HIROSHIMA』と表示されたことから、日本語訳での『ヒロシマ』とされたと考えられる。注目すべきは、被爆地ヒロシマの実状は、被爆の翌年において、既に米国だけでなく、欧州、豪州に知れ渡ったことである。

では、広島市、日本においてはどうかであったのか、次の記述から明らかにする。

昭和二十二(一九四七)年二月七日の『中国新聞』において米国雑誌『ヒロシマ』の内容が掲載されている。広島でもこの時点で「ヒロシマ」と認識された。

次に、広島＝平和都市について考察する。当時の広島市長がまとめた『原爆市長』からその状況を知ることができる。広島市議会において「審議会を二月十五日に発足し、復興

計画の樹立に着手した」（注24）。とある。軍がなくなった将来は、「平和都市」にしようという点で、全委員の意見が一致した」（注25）。と記され、そして、「広島平和記念都市建設法」は、二十四年五月十日、衆議院を通過した。（中略）法案は翌日、参議院でも満場一致で可決された」（注26）と記載されていることから広島は平和都市となった。国会においても「広島平和記念都市建設法」が承認されたことで、広島市＝平和都市とされていたことが確認できる。

広島は、ハーシー著『ヒロシマ』によってヒロシマ＝被爆地となり、広島市の取り組みによって広島市＝平和都市となり、年を経て、ヒロシマ＝平和都市となったといえる。しかし、当時はまだ、世界においてヒロシマ＝平和都市とは捉えられていない。日本と世界の認識の差異があったゆえ、その差異を利用する形で、「ヒロシマ」という表記を加害の側面を切り込んでいく手法として用いたものと窺える。

次に、「パール・ハーバー」とは、旧日本軍によるパール・ハーバー（真珠湾）への攻撃を意味し、ハーグ条約（一八九九年締結、一九〇七年改訂、一九一一年日本批准）で取り決められた交戦に関する事前通告義務を怠り開戦に突入し、国際法違反の出来事である。

貞子は、「私はワシントン・ポスト紙の反戦広告に被爆者の立場から短いアピールを書いた。アメリカ人の、反響の中には「黄色いジャップのくせに」「パール・ハーバーをおぼえているか」（注27）との反応から一般的なアメリカ人の「パール・ハーバー」への見解を貞子は知ることになる。このことから「パール・ハーバー」は、日本が太平洋戦争の開戦布告しなかったことへの象徴として用いられていることがわかる。

「南京虐殺」は一九三七年、旧日本軍が支那事変を終結するため南京に侵攻し、十二月十三日南京を占領してから六週間続いた虐殺事件のことを指す。貞子の初期の作品に、一九五二年六月詩作の「旗一」がある。その中に「マニラや南京で生きた女子供にガソリンをまき／火をつけて焼いた二十世紀の大兇悪犯」とある。この記述から「ヒロシマ」というとき」が詩作される二十年前、既に貞子は南京虐殺、マニラの火刑を知得していたことが確認できる。しかし、何処でこれらの情報を知り得たかについては明らかになっていない。「夫の唯一は、一九四〇年七月に徴用で病院船に軍属として乗り、上海に上陸した時、日本軍人の残虐行為を目撃し、それを私は夫から聞いたのだった」（注28）という貞子の記述から、「南京虐殺」事件は、夫の唯一から聞き得たとみるのが自然である。これらのことから「南京虐殺」は、軍人ではない民間人を虐殺したことが国際法違反の行為の象徴として用いられていることがわかる。

次の、「マニラの火刑」については、永井隆著『長崎の鐘』の序文に「昭和二十一年八月脱稿したが、占領軍司令部の発行差止めを受け、原稿はアメリカ国防総省に送られた。日本軍が行った「マニラの悲劇」を付録としてつける条件で、ようやく公刊が許可され（中略）（占領が解けてから「マニラの悲劇」は除いた）」（注29）と記されている。「マニラの悲劇」は、「日本軍兵の日記は一千名以上の市民が生き埋めされた事例を記録している」（注30）と記され、その他、多くの旧日本軍の虐殺行為についてアメリカ人の署名まで記述さ

れている。「マニラの悲劇」という記録により、日本の虐殺行為を強調することで、原爆の惨状を覆い隠そうとするアメリカの意図があったのであろう。当時の人々は、一時的ではあったが、この記録から「マニラの火刑」の全容について知ることができ、貞子もまた同様であったと解せる。これらのことから「マニラの火刑」は、「南京虐殺」と同様、民間人を殺害した国際法違反の象徴として用いられていることがわかる。

「バリア」については、一九六六年十月十日、サルトルとボーヴォワールが広島を訪問している『中国新聞夕刊』一九六六・一〇・一一。新聞の見出しに「訪日最大の感銘 真剣そのものの取材」と掲載されている。両氏は、九月十八日から十月十六日迄日本に滞在しており、その間サルトルとボーヴォワールは有識者と会談している。その会談のなかで、広島について次のように語っている。ボーヴォワールは「心理的にはバリア意識を持って

いるのです」と語り、サルトルはさらに「彼らはバリアだ。実に酷いことだ。」(注31)と述べている。

このことから貞子は両氏が会談した際に用いた言葉に由来して、詩の中で「バリア」の語句を用いたと考えられる。

第六節 「ヒロシマというとき」を読み解く

この詩を解釈するにあたっては、前にも述べたが、吉村氏から旧日本軍がアジアの人々に行った虐待行為を聞かされたことと、この頃岩国基地に核が存在していたことを念頭に置かなければならない。非核三原則を掲げながらそれに反している、日本政府への不信感、危機感が貞子の詩作に繋がったということである。

まず、詩の全体を俯瞰しておく。この詩は、モノローグの中で自問自答するという問答形式をとっている。即ち「やさしくこたえてくれるだろうか」、「返ってこない」と対応させながら問題の核心に迫り本質的な問いかけへと導いている。そして、「やさしいこたえがかえって来るためには／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」と結び平和へのメッセージを詩の中に凝集しているのである。また、詩ならではのテンポの良さがあり、山かっこの使用により、視覚的にも強調され、語句がはっきりと伝わるよう工夫がなされている。そして内容的にこの詩は、大きく三つの要素に分けることができる。三つの要素とは、まず、歴史的事実を示す用語であり、次に加害の具体性であり、最後に加害の責任をとるためにはどうすべきかの提言である。

歴史的事実として、「パール・ハーバー」は開戦布告をせず戦争へと突入したことを意味し、「南京虐殺」、「マニラの火刑」の両事件は、多くの民間人を殺害したことを意味していると先に述べた。三件とも共通することは、国際法違反とされる出来事である。そして、次の加害の具体性については、日本の殺戮行為は、南京虐殺に窺えるように過去を遡ると太平洋戦争に突入する前から、つまり十五年戦争が始まった時から既にあつたことを示している。「南京虐殺」、「マニラの火刑」は旧日本軍が冒した看過することのできない殺戮行

為という不条理であるという見地から、人間としてどうあるべきかを問う突破口として表現されている。これらを踏まえた上で、実態を自らの反省をもとに正しく理解することから、二度と戦争に至ることがないようにと主張しているのである。即ち日本人の良心、倫理面に訴求しつつ、正義に照らし合わせて未来を見据えることを促していると換言できる。だからこそこの三要素は、詩の要諦として欠かせないものであると言える。

また、「ヒロシマというとき」という題名や詩の冒頭に片仮名のヒロシマが使用されていることから貞子が如何に「ヒロシマ」に拘っているかが窺える。

次に、この詩において「ヒロシマ」といえば「一連で四回、二連で二回詠まれていることから、この詩の鍵となっていると窺え、この表現を明らかにすることが、この詩を理解する際に重要であると考えられる。一連の「ヒロシマ」といえば「の後は不条理の数々を挙げている。二連の「ヒロシマ」といえば「の後は一連の不条理を具体的に示し、辛辣な反応があると詠まれている。更に言えば、その反応を読者がどのように受け止めるかという問いかけが示し出されていると考えられる。「ヒロシマ」といえば「は、不条理への糾弾、謝罪、責任を導き出すための表現であると言える。文末の「噴き出すのだ」の「のだ」とは、噴き出す以外は説明も、逃れることもできないという決定的な断定であり、動かしようもない当然の反応であり、強調の意味がある。「ねばならない」と言う強い義務を促す表現が二連では二回、三連にも一回と計三回用いられている。このことから平和へのメッセージが明確に盛り込まれた詩であることが窺える。

これらのことを踏まえて「ヒロシマというとき」を読み解いていく。

〈ヒロシマ〉というとき／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくこたえてくれるだろうか
／〈ヒロシマ〉といえは〈パール・ハーバー〉／〈ヒロシマ〉といえは〈南京虐殺〉
／〈ヒロシマ〉といえは 女や子供を／壕のなかにとじこめ／ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑／〈ヒロシマ〉といえは／血と炎のこだまが 返って来るのだ

「ヒロシマいうとき」と発話したならば応えは、「ああ」という感動詞である。これは何を意味するのであろうか、ここでは応答としての意味であると窺える。次に続く一文は平仮名表記の「やさしくこたえてくれるだろうか」の描写は、疑問詞であるが、否定の意味が含まれていると解する。それ故、二連には「やさしくは／返ってこない」と詠まれている。次に続く語は、「パール・ハーバー」である。前述したように、「パール・ハーバー」は、アメリカ人の対応に、精神的重圧が刻まれていると窺える。また、「パール・ハーバー」は、太平洋戦争の開戦を意味し、「ヒロシマ」は、原爆投下により戦争を終息に向かわせた点で終戦を意味しており、ヒロシマの対句として「パール・ハーバー」が据えられていることが明らかである。次の語句は、「南京虐殺」である。時系列では「南京虐殺」、「パール・ハーバー」と続くが、冒頭に「ヒロシマ」と詠んだことから対置する「パール・ハーバー」、

そして「南京虐殺」、「マニラの火刑」という順に記したと解せる。

ここでの「へヒロシマ」といえば」は、日本には「南京虐殺」、「マニラの火刑」があるではないかと日本への負のイメージを畳み掛けている。ヒロシマは、日本国内において平和都市と認識されているが、アジアの国においてヒロシマは平和都市として偽装されたにすぎず、原爆投下はアジアを解放したとの認識も根強い。一皮むけば日本の本性は、「パール・ハーバー」、「南京虐殺」、「マニラの火刑」で象徴されている。従ってこの詩に、「血と炎のこだまが 返って来るのだ」と詠んでいる。「血と炎のこだまが」と「返って来るのだ」の語句の間に、一字分空けているこれは何を意味するのであろうか。こだまが帰って来る時間差を表現する技巧として一字開けていると考えられる。こだまは、発した言葉がその通りに返ってくるのが自然だが、ここでの「血と炎のこだま」の語彙の裏には、「南京虐殺」、「マニラの火刑」の辛辣な怒りが集約されておりその象徴として配されていると解せる。

へヒロシマ」といえば／へああ ヒロシマ」とやさしくは／返ってこない／アジアの国々の死者たちや無告の民が／いっせいに犯されたものの怒りを／噴き出すのだ／へヒロシマ」といえば／へああ ヒロシマ」と／やさしくかえってくるためには／捨てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない／その日までヒロシマは／残酷と不信のにがい都市だ／私たちは潜在する放射能に／灼かれるバリアだ

文法的に述べると「アジアの国々の死者たちや無告の民が」が主語であり、「噴き出すのだ」が述語である。また、「いっせいに犯されたものの怒りを」が目的語として詠まれている。ゆえに無告の民は「怒りを」噴き出すこととなり、怒りが強調され、必然的に「噴き出すのだ」と解釈される。虐殺されたアジアの国々の多くの死者や告発もできず沈黙せざるを得ない人々の怒り、怨念が強烈であると窥え、当然「へああ ヒロシマ」とやさしくは返ってこない」のである。「やさしくかえってくるためには／捨てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない」というこの箇所は、前に述べたように、岩国米軍基地に核が存在していることが判明したことにより、非核三原則が守られていない現状がある。戦争放棄を謳った新憲法の下、戦力の不保持を掲げながら朝鮮戦争ではマッカーサーの命により警察予備隊を創設され、アメリカの軍事主義に従属する形となった。自衛隊は、武器を装備し命令が下れば、即、戦場へ赴くことの可能な装備をしている。今こそ、憲法を遵守しなければならない。二度と戦争を起こさないためには、武器を完全に捨て、実質には軍隊でしかない自衛隊を解散しなければ、ヒロシマは世界において、平和都市とは信じてもらえない。それどころか、ヒロシマと言うだけで他の国の人たちにとっては「ヒロシマ」は逆に、不快で残酷な都市として印象付けられると訴えている。憲法を遵守し、自衛隊を解散することは現実的には困難であるが、貞子の平和を希求する堅固たる心意がここに示されていると解せる。

「私たちは潜在する放射能に／灼かれるバリアだ」については、文法の視点から見ると「灼かれる」の語は、受動的である。ここでは「私たち」が「潜在する放射能に」よって灼かれることと解せる。放射能を文字どおり捉えるならば、原爆の放射能と捉えることができるが、この詩の流れとして、また、後に続く語彙として考えるならば、象徴的意味を持つと捉えなければならぬ。その意味を引き出す手がかりになる貞子の記述がある。

この間、ある方にお会いしましたら、「これだけひどい目にあったのに、憎しみが湧かなくて困っている」(中略) 人間は非人間的な行為に対して憎しみの反応をもつから人間なのであって、憎しみを持つことができないのは人間性の欠落した状態であると云えます。サルトルが広島に来て、被爆者たちと語り、「バリアの状態」と言ったのは、このことを言っているのだと思います。本当の意味で増悪の無い世界を創るためには、人間が人間でない状態におかれた、そう言う無惨な状態から抜け切らなくてはなりません(注32)。

貞子が述べている「憎しみを持つことができないのは人間性の欠落した状態」とはどのようなことをいっているのでしょうか。ひどい目にあっても憎しみが湧かない状態である。憎しみが湧かないから、自分が相手にひどい目に合わせても平常心でいることができる。そのようなことから、日本人は、自らの戦争責任について理解しようとしなさい。この状態である日本国民の精神状態を「バリア」と表現したと解せる。戦争責任をないがしろにしている現状は、世界の人々からの非難の視線に「灼かれる」というのだと厳しい言葉で詠んでいる。そして、そのような状態から早く抜け出さなくてはならないと述べている。

更に、本当に日本人として衿を正すならば、核廃絶、軍備の完全撤廃をする以外に道はないと断言している。その裏には、過酷な戦争体験、悲惨な被爆体験に基づく、平和を希求してやまない貞子の心意があり、そのためには真理と希望を見据えているのである。ここに貞子の「反戦・反核・平和」の精神が生きづいている。

やさしいこたえがかえって来るためには／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない

「やさしいこたえがかえって来るためには」何をしなければならぬのかと問い「わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」と強い使役をもって詠まれ、
「わたしたちは」については、日本人総ての人を想定していると解せる。具体的には、それぞれ、自分個人の問題として捉えなければならないのであり、一人一人が日本の戦争責任を反省し、戦争放棄の憲法を実践していかなければならないと詠んでいる。さらに踏み込んで言えば、南京、マニラ、東南アジア各地での残虐行為、虐殺によって流された人々の血は、旧日本軍によるものであるが、倫理的には、日本国民一人一人が共犯者に他なら

ない。そのため私たち一人一人が事実と向き合い過去の罪を認識しなければならないと断言している。「わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」とは、真実から顔を背けず謝罪する必然性があると解される。このことが作品の主眼となっているのである。

この詩の鍵となる「ヒロシマ」といえば、自国の戦争責任を放置したままでいくら「ヒロシマ」と言っても世界の人々は優しく言葉を返さないことを明示している。これらことから「ヒロシマというとき」は、日本政府のあり様を厳しく見つめ日本人一人一人が、戦争への責任について凝視し、謝罪しなければならないという主張の上に成り立った詩であるとともに、貞子が自己の人間性から率直に問いかけ読者に共感と一体感を促した希求の詩と推測できる。

おわりに

本章においては、「ヒロシマというとき」が詩作された背景には、何より貞子がベトナム反戦運動に参加することによって平和の意識をより強くした事実があったことをまず、確認した。更に、YWCAの吉村氏から、アメリカでの国際会議においてアジアの代表から、旧日本軍がいかに第二次世界大戦中アジアの人々を虐待したかについて聞かされるなど、アジアの人々の辛辣な反応があったことに着眼した。また、詩作の動機は、山口県の岩国米軍基地に核兵器が貯蔵され、核部隊が存在していることが判明し、貞子の日本政府への不信感、危機感が原動力であったことも明らかにした。更には、日本が、終戦当初は掲げていた「反戦・反核・平和」から、時代と共に少しずつ乖離していったことで、改めて「反戦・反核・平和」の原点に立ち戻らなければならないとの強靱な思いがあつて詩作されたものとしても位置付けた。そして、「序詞」において「正の連鎖の方程式」として平和を希求する方向性を提示した。

貞子は「加害」を探究する中で、次のことを明らかにした。広島は、戦時下において軍都であり、広島の宇品港から多くの軍人を戦地へと赴かせた地である。戦後日本は経済大国になった。その裏で日本は、朝鮮戦争当時、米軍の後方基地となり、特需産業の儲けによって、その後の、経済発展の基礎を作ったという現実があつた。更に、被爆から復興した現在の広島や日本経済の礎には、多くのアジアの犠牲者の血があつた。他国の不条理な戦争により日本の経済は潤い、広島は原爆の廃墟から復興し、平和都市となり得た事実があつた。それ故、十五年戦争の恥部を多層的、輻輳的に捉え「被害」でもあるが「加害」でもあるという実態を見据え、複合的自覚として糾弾と謝罪を投げかけ共感を求めたのである。この詩は、具体的に問答形式を巧みに取り込むことによって、戦争責任をとるには何をしなければならぬか、それは、前述したように「憲法を守り、戦争を放棄し、自衛隊を解散し、米軍基地を撤去、軍備の完全撤廃をする以外には世界の人々の友好連帯を得ることはできない」と主張したのである。これは貞子の人間認識の「核心」であり、その姿勢が「ヒロシマというとき」を生み出したと言える。戦争責任を直視できない日本国民

の精神状態を「バリア」と表現することによって、この状態から抜け出さなければならぬと訴えたのである。

以上のことから「ヒロシマというとき」は旧日本軍が侵略加害をしたことへの反省に立ち、日本が世界にできることとして戦争放棄の憲法の実行、核廃絶や軍備の完全撤廃を挙げ、そこから真の平和実現に向かわなければならぬとの主張が詠まれている作品であることを明らかにした。この詩は日本の現状を批判し、一石を投じたことに重要な役割を果たしたと述べるが、同時に貞子の「魂の告白」とし、日本人の課題をうたいあげている。その点から見るとこの詩は、貞子が述べているように貞子自身の個人史であるが、昭和史への強烈な反省を促し、現状と未来への行動提起と解されると結論づけられる。

注

- 1 栗原貞子 『詩集 未来はここから始まる』 詩集刊行の会 一九七九年四月 一頁。
- 2 安藤欣賢 「ベ平運動から加害性に気付く」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 五二頁。
- 3 川口隆行 『原爆文学という問題領域』 創言社 二〇一一年五月 一七二頁。
注3に同じ。 一九六頁。
- 5 南坊義道 「詩人の眼は、原爆被爆者もまた被害者であると同時にかつては軍都「広島」の市民として侵略戦争に加担した加害者であったことを私たちに指ししめす。ここには愚者の理論や単細胞的被害者意識などとは無縁な確たる文学精神がある。」 『書評 栗原貞子詩集『ヒロシマ未来風景』』 核の存在と文学精神 『新日本文学』 一九七四年十二月第三二八号 一九七四年二月 一一三頁。
- 6 杉本春生 「原爆被害者もまた、軍都広島市民として戦略戦争に協力した加害者としての自身の責任を問う同名の作品名」 「未来への意味を問う ―ヒロシマというとき―」 注1に同じ。 七七頁。
- 7 高橋夏雄 「軍都広島であったからこそ原爆攻撃を受けたのであり、再生した広島も、朝鮮戦争からベトナム戦争への加担の中で急成長した経済大国日本の都市の姿そのものである。」 「栗原貞子の詩」 注1に同じ。 七九頁。
- 8 吉田欣一 「ヒロシマというとき」という詩は（中略）被害意識が運動の中で加害意識と二重写しになって来るのである。広島が広島であるためには、何をせねばならぬかがより鮮やかに一歩進んで確認されて来た」 「栗原貞子論」 『コスモス』 第二六号 コスモス社 一九八二年一月 四六頁。
- 9 日高六郎 「一九六五年のアメリカ軍の北ベトナム爆撃開始のころから、私たちの中には、日本が今やベトナム戦争における加害の立場に立っているという自覚がうまれてくる」 「体験を伝えること」 『高等学校用現代文』 筑摩書房 昭和五八年 一一五八頁。

- 10 長坂啓夫 「彼女は戦争責任の問題、つまり、小田実のいう「被害者」加害者」の「メカニズム」の中での「加害」に果敢に向き合い続けた市民の一人である。」 「わたし」の戦争責任論 『社会学』第一〇号 日本社会文学会 一九九六年 六三頁。
- 11 岩垂弘 「初めて日本の「加害責任」に言及した被爆詩人」 『人類が滅びぬ前に 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月 六二頁。
- 12 栗原貞子 『ヒロシマというとき』 三二書房 一九七五年三月 一九三頁。
- 13 栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月 二五七頁。
- 14 栗原貞子 『ヒロシマの原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月 一七四〜五頁。
- 15 栗原貞子 『栗原貞子全詩篇』 土曜美術社 二〇〇五年七月 三一九頁。
- 16 『定本原民喜全集』 青土社 一九七八年一月 二五頁。
- 17 栗原貞子 「著者は語る 原爆体験を伝えること 「生ましめんかな」「ヒロシマというとき」の周辺」 『国語通信』 一九八三年七月・八月号第二五七号 筑摩書房 一九八三年八月 三二頁。
- 18 「岩国に核貯蔵!」「本土の沖縄化」 『原水禁ニュース』第八〇号 一九七一年二月一日 五頁。
- 19 注12に同じ。 一一頁。
- 20 栗原貞子 「わたしの見た ヒロシマ」 『輪』第二五号 輪の会 一九六八年五月五〇頁。
- 21 谷本清 「あとがき」 ジョン・ハーシー著 谷本清・石川欣一訳 『ヒロシマ』 法政大学出局 一九四九年四月 一四六頁。
- 22 注21に同じ。 一四八頁。
- 23 注21に同じ。 一四九頁。
- 24 浜井信三 「ヒロシマとともに二十年浜井信三」 『原爆市長』 朝日新聞社 一九四七年十二月 五九頁。
- 25 注24に同じ。 六二頁。
- 26 注24に同じ。 一五〇頁。
- 27 注14に同じ。 二五一頁。
- 28 注15に同じ。 六五頁。
- 29 片岡弥吉 「序文」 永井隆 『長崎の鐘』 中央出版社 一九七六年二月 序文口。
- 30 永井隆 「序文」 『日本の原爆記録 ②』 日本図書センター 一九九一年五月 一〇四頁。
- 31 日高六郎 「サルトルとの対談 —知識人・核問題について—」 『広島印象』 『世界』 一九六六年第二五三号 一二月号 岩波書店 一九六六年十二月 六八頁。
- 32 栗原貞子 「八・六の意味するもの5—大田洋子とG・アンデスを軸に」 『ヒロシマの意味』 小黒薫編 日本評論社 一九七三年六月 八三頁。

第四章 『詩集 未来はここから始まる』論

―貞子の苦悩を視野に入れて―

はじめに

文学者としての貞子の時期は、大きく三期に分けることが出来る。まず、一期は戦時下において詩作した時期であり、二期は原爆の惨禍を直叙的に詩作した時期であり、三期は詩「ヒロシマというとき」から反核平和運動の中において詩作した時期である。この四章では三期を視野に入れて、貞子の作品世界を重層的に捉え内実を探りたいと考える。

三期の詩集と言うべき『ヒロシマというとき』は、三章において考察したゆえ四章においては、『詩集 未来はここから始まる』を考察する。この詩集は、一九七九年四月、詩集刊行の会から出版されている。貞子の詩集としては、『黒い卵』（一九四六、八）、『詩集 私』は広島を証言する』（一九六七、七）、『詩集 ヒロシマ 未来風景』（一九七四、三）、『ヒロシマというとき』（一九七六、三）に続く五冊目である。『ヒロシマというとき』は、三一書房から出版されているが、これ以外は詩集刊行の会から発行された私家版である。『詩集 未来はここから始まる』の扉には、「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」というフレーズが記載されている。このフレーズは、その後、貞子の詩に繰り返し提示されることから、重要なものと考えられる。なお、『詩集 未来はここから始まる』は、「未刊詩編」から、「私は広島を証言する」から、「ヒロシマ・未来都市」から、「ヒロシマというとき」から、「詩論」から、「詩人論、作品論」という六章から構成されている。注目すべきは、「私は広島を証言する」からの章に「渚にて」「異形」「空洞」「犯された街」は、第四部から抜いた。原水禁運動分裂当時の孤立と傷心の中で書いた」（注1）と記載されていることである。（傍線論者。以下同様。）この文と類似する文章が貞子の著書『詩集 私』は広島を証言する』『ヒロシマというとき』『詩集 未来はここから始まる』『詩と画で語りつく 反核詩画集 ヒロシマ』の四冊にわたって掲載されている。これらのことから孤立による心痛は、貞子の脳裡に刻み込まれ、忘れようとしても忘れることの出来ない記憶となっていたものと推察する。貞子の多大な心痛が窺え、留意すべき点と考えられる。

本章においては「孤立と傷心」という苦悩の側面について、なぜ貞子がそういった状態に陥ったのか、その背景として孤立の中、苦悩から立ち上がらせた契機は何かについて当面の言説から明らかにしていきたい。また、「詩「未来はここから始まる」は、広島で開催された部落解放同盟全国婦人集会のために書いた」ともとされていることから、この詩を書くに至った経緯について、『詩集 未来はここから始まる』の題名に使用されている「未来」「ここ」の語についても着目し、また、『詩集 未来はここから始まる』の扉に記載されている「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」を考察していく。

なお、「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」というフレーズは以後「フリーズ」と記述する。

第一節 「孤立と傷心」について

前述した「孤立と傷心」へ陥った原因は、貞子の著書によると「原水爆禁止世界大会」と「原水爆禁止広島母の会」からの離脱であったと考えられる。そのことに関して貞子の心意を明確にした記述がある。まず、「原水爆禁止世界大会」からの離脱について挙げる。

・第七回大会後、ソ連の核実験が再開され「如何なる…問題」が起きたが、第八回大会の頃は「統一と団結のため」と称して問題はタナ上げにされ、それにふれるものは統一と団結を乱すものとして白眼視されるようになった。運動の論理よりも組織を優先する目的と手段の混同に失望した私は、関係団体から離れ、不信と孤立感を深めていた(注2)。

・統一と団結という言葉はしばしば組織防衛の言葉として用いられているようである。異なった考え方の運動を統一するためには、運動の論理がタナ上げされ、個々人の意識や下からの創造性はきりすてられ、個人原理が生かされない。(中略統一でなく相互交流を、非難でなく相互に主張の明確化を、そのなかで発展的な契機をつかみたい(注3)。

これらのことから貞子は、内なる誠を支柱とした判断によって、世情に流されず、多角的な観点でもって客観的に思考していたことが窺える。戦後、言論、信条の自由が得られ、自分の信念を思うがまま、発言し、行動することが、可能な状況になった。その一方で、運動に参加するも運動が組織化され、上からの命令が下されると自由発意、自由合意は打ち消され、自分の理念と乖離することが生じ、運動から退いていくことになった。貞子は、個人の意見が尊重されない画一的な統一でなく、かつ、上からの目線で裁く非難でなく、各々が主張する意見を述べ議論を重ねることによって、自身の理念の明確化を求めてやまなかった。その結果、貞子の心意は、組織や運動に受け入れられず、身を引くことになった。

次に、「原水爆禁止広島母の会」からの離脱である。母の会の当初について、次のような記述があるので引用する。

第五回原水爆禁止世界大会に参加した広島的女性たちに呼びかけ、その年の秋、平和記念館の屋上に集まって話あった時からだった。(中略)十数名が集まった。それが後に原水禁広島母の会となる最初の集まりだった(注4)。

更に、次の引用から、発起人であるがゆえ創立時は、貞子が理想とした会であったことも明らかである。

思想や立場にちがいはあっても、原爆によって象徴される徹底した非人間性こそすべての悪の根源であり、人間性を大切にすることが平和と愛の始めであるという点でしっかりと一致しているので、ここでは如何なる種類の権威や権力に対しても盲従なく自由に話あって活動をすすめている(注5)。

広島の被爆した母たちは、被爆死せず生かされていることの意味を「反戦・反核・平和」へと反映、拡大し、平和な世界をつくる目的のため、その表現の手立てとして機関誌『ひろしまの河』を創刊した。その一方で、「原水爆禁止広島母の会」において、ソ連の核実験再開問題は話題にしないよう申し合わせられていた。「原水爆禁止広島母の会」がソ連の核実験に対し、暗黙のうちに容認する方向性を示したことについて貞子は、組織と意見を異にする事から、身を引くことになる。それゆえ『ひろしまの河』の五号まで、編集人として関わっているが、その後の号には名がない。このことについて、貞子は、「統一と団結の名の下に組織を温存しようとするものにとつて、矛盾や傷口を明らかにするものは組織の敵なのであろう」(注6)と当時の状況を述べている。「原水爆禁止広島母の会」において、敵視されたことを指摘してのことと窺える。このことは他の会員による次の言及からも明らかである。

ソ連の核実験により、原水禁運動は分裂いたしました。その前夜、母の会では、ソ連の核実験に支持するような人たちとは共同行動をすることは出来ぬと会を脱会した方がありました(注7)。

脱会については、自己決定であり、自分が選択した行動ではあったが、この言及は、感性豊かな繊細で弱い詩人としての貞子の心を傷つけ、傷口を広げ、さらなる内的沈潜へと向かわせた。貞子の著書において、「孤立と心痛」の中で書いとされている著書が四冊もあることは先に述べた。このことから、更なる微視的観点による綿密な考察の積み重ねが不可欠であると考える。貞子の如上の観点を手掛かりとして探ってみる。まず、貞子の自著の記述を時系列的に次に記していく。

『詩集 私は広島を証言する』(一九六七、七)における記述を引用する。

運動の上昇期のなかに輝いていたものはみな輝きを失い、さむぎむとした空虚のむなしさだった。(中略)ほとんど皮をはぎとられたような苦痛だった。(中略)「私には果しない海がある」と自分の内部の絶えざるものを信じる以外にはなかった。(中略)この状態から立ち直るまでに可成りの長い時間がかかった(注8)。

『ヒロシマというとき』(一九七六、三)における記述を引用する。

この集は原水禁運動の分裂と安保反対運動の挫折のなかで、ひたすら孤独の淵のなかに沈潜して書いた。(中略)「犯された街」「からす」「渚にて」など(中略)「私は干されても死にはしない」と自己の内部の絶えざるものを信じる以外になかった。(中略)この期の作品は「空洞」「夜」「その絵」「不幸な主役たち」など(後略)(注9)。

『詩集 未来はここから始まる』(一九七九、四)における記述を引用する。

「渚にて」「異形」「空洞」「犯された街」は、第四部から抜いた。原水禁運動分裂当時の孤立と傷心の中で書いた(注10)。

『詩と画で語りつく 反核詩集画 ヒロシマ』(一九八五、三)における記述を引用する。

第九回世界大会で原水禁と原水協にわかれるまで組織の内外で矛盾と疎外が続き苦悩の連続であった。そうした状況のなかで人間不信の孤独に沈潜して書いたこの時期の作品は、眼にうつるもの、イメージするものすべてが暗く輝きを失い救いがなかった(注11)。

貞子は前述した著書の中で「原水禁運動の分裂と安保反対運動の挫折のなかで、ひたすら孤独の淵のなかに沈潜して書いた」、「第九回世界大会で原水禁と原水協にわかれるまで組織の内外で矛盾と疎外が続き苦悩の連続であった」と述べている。このことから精神的に落ち込み、心痛は、深化拡大した期間であったと解せる。また、詩作の年からしてその期間は、一九六〇年から一九六五年の五年間と窺える。

そしてこの期間における前述の詩を時系列的に整理すると次のようになる。

「不幸な主役たち」(一九六〇、九、一九、『ヒロシマというとき』三一書房一九七六年三月日刊)、「夜」(一九六二、二、二八、『詩首 私に広島を証言する』一九六七年七月刊)、「その絵」(一九六二、十一、詩誌『ぶれるうど』一九六二年十一月号)、「からす」(一九六二、十一、三〇、詩誌『ぶれるうど』一九六三年八月号)、「異形」(詩誌『ぶれるうど』一九六三年八月刊)、「空洞」(『広島県詩集4』一九六四年二月刊)、「犯された街」(詩誌『ぶれるうど』一九六三年六月号)、「渚にて」(一九六五、六、一五、詩誌『ぶれるうど』一九六五年六月号)。

「不幸な主役たち」の詩作は六〇年であるが、発表されたのは十六年も経てからである。ここに注目したいのは「空洞」である。この詩は『広島県詩集4』が初出である。この詩を公の詩集に投稿したことは、貞子の内奥、深意を公言したことになる。すなわち内面世

界を開示したと言える。「その絵」、「からす」、「異形」、「犯された街」、「渚にて」は、詩誌『ふれるうど』が初出である。詩誌『ふれるうど』の発行者は、大原三八雄氏である。大原氏は、貞子の詩「生まれめんかな」を最初に英訳した人物であり、貞子の独身時代の親友林子の兄である。そのような間柄ゆえに、貞子の窮地に救いの手を差し伸べたと窺える。

第二節 「孤立と傷心」からの脱却、そして未来へ

次に「孤立と傷心」の環境から脱却に至った契機について述べる。

『詩集 私に広島を証言する』における文を引用する。

私は死の前年の秋、暗い夜の平和公園を篠枝さんと二人でさまよい歩き、三吉の碑や慰霊碑、原爆死者の納骨堂のある（中略）供養塔などに詣った。私は今でも、その時、篠枝さんと一緒にあの世をさまよい歩いた思いがするのである（注12）。

『ヒロシマというとき』における文を引用する。

六五年以後母の死を始め、かけがえのない人を幾人も引き続いて失った。（中略）愛する人の死を通して、「死は生の完結であっても、愛の完結ではない、連続した親しい世界だ」と感じるようになった（中略）私は親しい人達の死に会って、おごつた心が清められたような気分になり傷ついた心で拒絶していた人々に対しても和らいだ心をもつようになって、自然とひたひたとしみ入るように、親しい人たちの死のなかで回復しはじめていた（注13）。

貞子が述べる「おごつた心」と述べる根拠はどこにあるのだろうか。一九五五年から一九六七年の十二年間は夫唯一が県会議員の職に就いていた。貞子は県会議員夫人としておごり、高ぶりがあつたのであろう。自分本位であつたことに気が付いたことは、ある意味で人間成長を遂げたといえるであろう。それ故か、自分自身が県会議員夫人であつたことについての貞子の記述はない。

正田篠枝の死の前年は、貞子が孤独の中をさまよっていた頃である。篠枝と二人暗い平和公園を歩いたことで、原爆と言う共通項が安堵感へといざなつた。亡くなった懐かしい人の碑を巡ることで、この世にいながら、あの世にいるような錯覚をした。懐かしい人々との邂逅であつただけに心なごますものだったと考えられる。貞子にとって篠枝の存在は大きく、かけがえのない親友であり、癒される友であつたことが解せる。また、二人が精神的近親関係にあり、貞子の一番の理解者であつたことが、次の篠枝の短歌によって確認できる。

貞子氏は悪口言われながらも平和運動に熱心なりき頭が下がる

知らぬひと栗原貞子を悪く言ふわれは黙して良きを書かなむ

心から実行力のある人は栗原貞子頭が下がるわれ(注14)。

貞子は、母や篠枝の死に直面し、複雑な「現世」の人間関係の中で「死」という単純で純粹な状況へと導かれることで、清浄化された死者との関わりを想起した。貞子は死者たちの愛を感じ、死は完結でなく連続した親しい世界であることを意識した。死という厳粛なものを前にして、自分の苦しみがいかに小さいものであるのか、死を前にしてすべてが無意味であり、死には何も勝てない。人間不信となった原因は、自己のおごりや独善性にあったと自覚し、自分の苦しみはいかに小さいかを悟り、その結果、心を閉ざして頑なであった貞子の心を溶解させ回復へと向かわせたのである。貞子は、長期間孤立の渦中であつたことによつて、人間関係に拘泥する一方で、人間的にさらに成長した。更に、現状を冷静に見据えることで自己再生に至つたと考えられる。

また、次の記述からは再出発への覚悟が読み取れる。

・ 私たちは生きて言うことが出来るし、生きて言うことの出来る自由を守らねばならぬ
い。平和運動の分裂を免罪符として、何もせず傍観しているとしたら、それは戦争政策の共犯である(注15)。

・ 「生きたかりけり」「生きたかりけり」と涙をためたまま、低くくちづさんだ正田篠枝さんの顔がいつまでも離れがたく思っておこされてならない(注16)。

貞子は究極の苦悩の中、死者たちとの別の時空を有することによつて、篠枝の顔の思い出している。自分は生きて言うことが出来るが、篠枝だけでなく、原爆によつて不条理に殺された人たちは言いたくとも言えない。叫びたくても叫ぶことができない。死んだ人の分まで、自分の意志を貫き通さねばと決意したことが、契機となつて孤立の中から抜け出したと窺える。だが、現状は厳しい。原水爆禁止世界大会は第九回後、原水禁と原水協に分裂している。この政治的争いの渦中に巻き込まれてはいけない。さりとて「傍観者」になつていては、今まで我が身を振り返らず「反戦・反核・平和」を希求し、傾注してきたことが無になるどころか逆行し、戦争の推進者たちの共犯者となつてしまうと、我が身を鼓舞させ超克できたと窺える。ここに繊細な孤高の詩人から強い活動家と変えられたといえるであろう。それ故、詩風も批判、警告する詩に変わったといふことがいえる。

貞子は、「おごつた心」を心に留め、死の直前まで意識していたのか娘の眞理子氏は「九四年、八一歳で事故にあい、九九年脳梗塞のため半身不随になりましたが、誰を恨むでもなくそのまま受け止めりハビリをし闘病生活を送りました。(中略) ヘルパーさんや看護婦さんも「こんなに優しい我慢強い人には会つたことがない」と今でも言つてくださいます」

(注17)と記述されているように、人間的にも成長したことが明らかであり、死に至るまで優しい愛の人であったことが確認できる。

第三節 「未来はここから始まる」への土壌

貞子は孤立の中から抜け出したことによって、時代の状況を深く捉えるようになった。その頃、ベトナム戦争反対運動が発足し、貞子は参加している。『ベ平運動ニュース』の二〇号(一九六七年五月号)に「殺すな！ベトナム戦争をやめよ！日本国民と広島市民からの訴え」と題して投稿している(注18)。それに関して次のような記述があるので引用する。なお、引用文の清水徹雄さんは、ベ平連の協力により救出されている。

生後五ヶ月で被爆した広島出身の日本人米兵、清水徹雄さんがベトナムから広島に帰休し米軍離脱の表明をしたことについて、同じように広島で被爆した韓国の女性、孫貴達(三八)が、原爆の治療したさに韓国人三人とともに、九月三十日釜山から小舟に乗って出港し、山口県の阿武町の沿岸につき、一夜を明かした翌日二日午後、密航者として逮捕されたと言うニュースに接した(注19)。

貞子は、このニュースに接することによって被爆者は、日本人だけでなく韓国人の存在もあつたことを知る。このことが契機となり、韓国人を意識することが、民族・部落・被爆者差別を知得するに至る。このことが次の記述から読み取れる。

運動の進展によって、原爆の恐るべき破壊力とともに、被爆者が被爆によって健康を破壊され、身体的な弱点や、貧困をとまなうことが一般に知られるようになり、結婚や就職の際の差別が表面化したのは一九六〇年の後半のことであった。その頃、ベトナム反戦運動がたかまり、ベ平連などの「被害者であることによる加害者である」という日本人の戦争における二重の存在が反省されるようになり、これまで無視され続けてきた被爆朝鮮人の問題とともに、部落の被爆者の問題がとりあげられるようになった(注20)。

このことから、ベトナム反戦運動、差別問題が同時代に持ち上がったことが確認できる。その形象化としての詩「未来はここから始まる」が詠まれたといえる。

第四節 「未来はここから始まる」を読み解く

貞子がこの詩に託した心意があるので引用する。

「未来はここから始まる」は部落・朝鮮人・被爆者など、差別されたものが、差別を恐れることなく自らを明らかにし、加害原点に抵抗して生きること力をよく表現した作品である（注21）。

『栗原貞子全詩編』の「未来はここから始まる」の付記に「この詩は、「七七年三月、広島で開催された部落解放同盟全国婦人集会のために書いたもので、その（へしおり）に掲載された」（注22）と記述されている。貞子が、差別について普遍性、確実性、透明性の希望をもって詠んでいることがわかる。これを踏まえて長い詩であるが全文を引用する。

「未来はここから始まる」（一九七七、二一、二七）

突然／青い閃光がひらめき／火焰あらしが　　ごうごうと／渦巻く空の下／ウラニウム
の黒い雨が降り／もえあがる炎のなかで／としよりも　　こどもも焼きこころされた。／
生き残ったひとは／こわれた心とこわれた体を／原爆自閉症の暗い穴ぼこの／なか
にいれ／悪魔の平等さえ夢見た。／「世界じゆうにピカが／ドカン、ドカン落ちりや
ええ／そしたら、ピカのくるしみが／わかってもらえるだろう」／ピカは街を焼き
つくし／ビルを嘖きとばし／七つの川を死体でうずめ／生き残った人の魂まで灼いた。
／それでも　差別はこわれなかった。／拒まれた部落の被爆者と／行き場のない朝鮮
人被爆者は／残存放射能の燃える／川のほとりの／被差別部落に／焼けトタンのバラ
ックをつくり／差別の刺に血を流して生きて来た。／「被爆者は血がとまらない」／
「遺伝する」／「嫁にもやれん　嫁にもとれん」／「またもや隠微な　ささやきが／交
わされて／呪縛の網はいく重にも重なった。／ピカはなぜ落されたのか。／被爆者
は　原爆自閉症の／穴ぼこから這いあがり／世界に向かって／再び被爆者をつくるな
と／被爆者宣言をしよう。／朝鮮人がなぜピカに会ったのか。／母たちのウリマル（母
国語）をすて／ウエナム（日本人）をよそおうのをやめ／朝鮮民族を宣言しよう。／
部落はなぜつくられたのか。／かくれキンタンのように／自分を隠して生きるのを
やめ／高らかに部落民宣言をしよう。／人間を奪われたものが／たちあがり／加害原
点を糾弾しよう。／未来はここから始まるのだ。／練兵場のいちめんの瓦礫のなか
に／陸軍病院の鉄製のベッドが／赫く焼けて残っていた。／ベッドの上には／魚のよ
うに焼かれた／白い骨だけの人体がならんでいた。／広島はアウシュビッツととも
に／世界でもっとも暗い深淵だ。／人間を奪われたものが／うすい影のように生きる
／酷薄な街だ。／影にされた人間がたちあがり／人間を嘲笑するきこ雲の／時代を
終らせよう。／／きこ雲の下の地獄は／皮膚の色はちがっても／黄も黒も白も同じ
だ。／火焰あらしが　　ごうごうと／渦巻く空の下／ベロツと剥がれた皮膚を／紐のよ
うに引きずり／幽霊のように手をたらし　　どこへともなく／のろのろ動く群列。／内
臓まで焼かれて黒く燻され／膨張した裸身の死屍るいるい。／地球が焼けただれ／花
も咲かず鳥も啼かず／ウラニウムの雲が／あつくたれこめ／ヘリウムの雨がそば

降る／無人の星になる前に／奪われた人間をとりもどそう。／ピカは人間が落とさねば落ちません。／人間がつくったものが／人間の手でやめさせられないものはない。

この詩は唐突に「突然／青い閃光がひらめき」の語で始まる。原爆投下時貞子は、「一人で御台所の片づけをしていました。すると裏の畑にピカッと青い光が走りました」（注21）と述べていることから貞子の実体験を詠んだのであろう。この詩は、原爆の惨状をそのまま、感じるまま、極めて率直簡明に平明な文体で詠まれている。詩と言うよりも散文とも言える。一連での「ピカ」という語は原爆のことである。被爆当時、何か分からず、投下時にピカッと光ってドンという破裂音が衝撃に起きたことから「ピカドン」と呼ばれていた。気になるのは「悪魔の平等さえ夢見た。」という描写である。これを如何に解釈すべきであろうか。悲惨な状況に遭遇したということは同じでもその直接的被害には、重傷者、軽傷者、無傷という違いがあり、決して平等とは言えない。「悪魔」とは、重傷者が無傷の人や軽傷者を見て自分と同じような重傷者であってほしいと願うほど、人間の極限まで追いつめられてのことであろう。ゆえに次の「世界じゆうにピカが／ドカン、ドカンおちりやええ／そしたら、ピカのくるしみが／わかってもらえらるであろう」と詠まれたと考えられる。貞子は原爆の惨状を体験しただけにその被害は、私たちだけで終わらせようとする慈悲の心でもって、二度とあつてはならない念願している。しかし、ピカに会った者しか分からない、苦しみが解ってもらえないのなら、世界中の人がピカに会えばいいと思う心は、悪魔の平等な心なのであると詠んでいる。

二連に行くとも町は崩壊し、「生き残った魂まで灼いた。／それでも 差別はこわれなかった」更に、「呪縛の網はいく重にも重なった。」と詠み、差別の根深さを表現している。「拒まれた部落の被爆者と／行き場のない朝鮮人被爆者は／残存放射能の燃える／川のほとりの／被差別部落に」の描写とは、被爆後「福島町のものはそこを動かぬ、という指令がいくこともなく来て、軍隊が出勤して高張提灯をたててね、番してた。ですから放射能がいっぱいあるなかで、福島町の人たちは逃げるのができなかった」（注23）の実態を詠んだものである。なお、引用文の福島町は被差別部落である。詩に広島弁を使用したことによつて、より一層差別された者の苦しみが吐露され、共感をもたらし、平明な日常語の効果を巧みに利用している。

三連においては「ピカはなぜ落とされたのか。」「朝鮮人がなぜピカに会ったのか。」「部落はなぜつくられたのか。」と二度も問いかけている。「朝鮮人がなぜピカに会ったのか。」この詩句は、「二九七〇年十二月、原爆症を治療するため佐賀県串浦港に入港し、密入国の容疑で逮捕された被爆朝鮮人孫辰斗さんは、「なぜ私が広島で被爆したのか」（注24）と言った言葉を引用したのであろう。朝鮮語を使用することによつて、被爆朝鮮人の存在を示し、更に、朝鮮人の苦悶を詠んでいる。苦悶の底から這いあがり、「なぜ」と二度も問い、根源を追究し、立ち上がり、糾弾するならば、そこから「未来はここか始まるのだ」と断言している。「被爆者は 原爆自閉症の」の語句において貞子は「被爆者たちは、重い口を

開いて、体験について語り始めたのであった。しかし体験について語ろうとしても、言葉をこえた悪魔的世界について語る事ができないで、「体験したものでないとわからない」と口をつぐみ、原爆自閉症の世界へ再びとじこもってしまった。」(注25)との記述から自閉症を引用したのであろう。

四連に行くともう一度原爆の惨状を詠んでいる。この光景は、「私は、広島に原爆が投下されまして、数日後、爆心地から〇・五^キの紙屋町の西部第二部隊の跡を歩きました。一面の瓦礫の中に、無数の鉄兜が赤く焼けて転がっていました。また、陸軍病院の鉄製の骨だけになったベッドの上には、まるで魚でも焼いたように、白骨だけの人体がのっかっていました」(注26)と貞子の記述があることから実体験である。「人間をうばわれたものが／うすい影のように生きる」の語は差別された人たちの実状である。影のようにされた人たちが立ち上がり、終止符を打たせようと推奨している。いわゆる影であってはならない、光とならなければとの提言である。

五連において、または原爆の惨事を詠み、「奪われた人間をとりもどそう。」とここにおいても更に推奨している。二度推奨していることは、相当な堅固な意志が必要であるとの意味が示されている。「無人の星になる前に」の詩句は地球最後の日になる前にと最後通告を突きつけている。そして続く語は「奪われた人間をとりもどそう。／ピカは人間が落とさねば落ちません。／人間がつくったものが／人間の手でやめさせられないものはない。」と結んでいる。この詩において四度、原爆の惨事が詠まれていることは、原爆の惨状を何度表現しても表現尽くせないことの表れなのであるか。また、原爆の惨状が原点であると指示しているように窺える。また、核兵器が炸裂したあの日の広島の様子がより現実のものとして再現される危険性が、高まっていることを示すための効果を挙げているとも考えられる。差別されたものを「人間を奪われたもの」とこの語句が二度詠まれていることからこの詩の「主眼」になっていることが窺える。具体的には、部落・朝鮮人・被爆者たちであり、差別を直視し、それぞれの人々に「宣言しよう」と奨励している。差別が如何に根強いかを表現しているが、差別も原爆も人間が作ったものであるから、止めさせることが出来るとの希望を断言している。この詩においては、差別された者が差別する者たちに対峙し、糾弾することで「未来」となることを示しているのである。平易な詩だけに貞子の感情の襞が織りなされているものといえる。

差別に関して結論づけた貞子の文章があるので引用する。

差別されると言うことは、人間が人間として生かされないことであり、差別者にとつて被差別者は人間でないから、ついには人種差別によるナチの如き大量虐殺となり、広島・長崎の原爆投下、ベトナムのみなごろし戦争となるのである。「戦争と差別なき世界」をつくるためには、私たちは日常身のすべての差別にたいして、鈍感であってはならない(注27)。

貞子は差別と戦争は無関係ではないと見ている。戦争の根源は差別によるもので、人の尊厳を認めず、人間ではないと思うから虐待、虐殺することができると言及している。また、貞子は、戦時下において思想ゆえに差別されていたことから、差別について敏感であったと窺える。ゆえに、差別する者への鋭い洞察力と批判精神をもったといえよう。

この詩は、人間が尊重されるべき未来を問い、差別されるものが、力強く生きる未来像を描いている作品だと解せる。人間尊重が根源にあれば、どのような状況にあっても人間は、未来を見据えて行けると述べているのである。前述した孫氏が述べた言葉が貞子に影響を与えた記述があるので引用する。

被爆朝鮮人孫辰斗さんの「なぜ私が広島で被爆したのか。」と言う問い返しは、私た

ち一人ひとりに過去の日本の侵略と差別の歴史へ目を向けさせ、歴史のなかでの私たち一人ひとりの生き方を問うものである」(注28)。

差別は歴史の中で問うものとしている。それだけ、差別は、何世代にもわたってなされたものである。人間には、優越感と劣等感があり差別がどうしても起こりうる根源がある。人間のどうしようもない部分を乗り越えて行くことについて「未来」を見据えその問題を次世代に引き継ぐようとしていると解せる。

第五節 『詩集 未来はここから始まる』における「未来」、「ここ」について

詩「未来はここから始まる」は、部落解放同盟全国婦人集会のために書かれたものであるため差別と言うことを前提にしなければならぬ。それ故、四節では、「差別と戦争は無関係では無い」との貞子の指摘から「未来」は核廃絶と差別がなくなることである。「ここ」においては差別に対峙し、立ち上がり、糾弾する時と捉えた。この節の題を『詩集 未来はここから始まる』としたことから他の詩においてどう詠まれているか思考しなければならないと考える。『詩集 未来はここから始まる』に収められている詩が数点あるが、ここでは「未来への入り口」について考察する。

まず、この詩の時代背景である。貞子が詩「未来への入り口」を詩作した時点の「現在」は、東海原子力発電は稼動しており、日本経済優先のため核を平和利用と称して福井県美浜発電所一号機、福島発電所一号機と運転開始され日本は原子力発電が本格化した時期であった。当時のマスコミなどは、原子力エネルギーは、バラ色の「未来」のエネルギーであると世論を先導していた。その実状といえば常に「核」の脅威にさらさられているが、このことを認識しようとしないう現実社会を危惧して詠んだ詩が「未来への入り口」であると考えられる。

「未来への入り口」(一九七五、一、一六)を引用する。

ここは未来への入り口だ／地上三米、コンクリートの屋根が／流れるように弧を描く
人類の墓場だ。／前方に最初の悲劇の資料館があり／その下のアーケードを通して／
噴水が水銀灯のように／白く輝いている。／死者たちは 今も灼けつく渴きに／人気が
のない時 石棺を抜け出し／したたる水をのみに行くだろう／ここは未来への入り
口だ／世界中の人たちは／写真機を胸にぶらさげて／さりげなくやって来るが／ほん
とうは自分たちの終末を／みとどけるためにやってくるのだ／恋人たちは資料館の熔
けた人骨の／飴のように流れくついた／金属やガラスの食器の前に／青ざめて立ち
つくし／母親たちは 抱いている子どもを／焼き殺されまいと／しっかり抱きしめる
／／ここは未来への入り口だ／世界はここを通り抜け／炭化した人間の廃墟を／よみ
がえらせることが出来るだろうか。／ほのぐらい展示室に／まぎれこんだ鳩が一羽／
窓枠にとまって首をかしげている

「未来への入り口」は如何なることを意味するものであろうか。この詩を読み続けると、
「原爆慰霊碑」であることがわかる。「死者たちは 今も灼けつく渴きに／人気がない時
石棺を抜け出し／したたる水をのみに行くだろう」との描写から、死者の喉の渴きは現在
も続いているとし、「のみに行くだろう」とは、現在時という一点の中に過去と未来が見通
せるような時間構造が内包されていると窺える。ここに原爆は過去のものでなく、現在も
未来へも継続されると詠み、立ちもどらねばとのメッセージである。「未来への入り口」と
いう語句は三度繰り返されていることから、このフレーズが詩の焦点であることがわかる。
二連に行くと同爆資料館への来館者の反応である。「母親たちは 抱いている子どもを／焼
き殺されまいと／しっかり抱きしめる」と詠んでいる。あたかも過去が現実のものとなっ
た時を想起して、我が子を抱きしめている。この詩句に「未来への入り口」の表現化と捉
えることができ、ここに「未来」の恐怖がある。三連は、「ここは未来への入り口だ／世界
はここを通り抜け」の語については、二連で詠んだ遺品の展示から、原爆の過去の過ちを
常に見据え立ち帰り、入口を通らなければと示している。「炭化した人間の廃墟を／よみが
えらせることが出来るのだろうか。」の描写の「炭化した人間の廃墟」とは文字通り死者の
廃墟である。次に続く「よみがえらせることが出来るのだろうか。」との語句は、疑問詞で
あるが、このままでは、人間に未来はないと世界の人へ「核廃絶」の呼びかけであると推
測する。「世界はここを通り抜け」とは、世界の未来への入り口の通過点として「原爆慰霊
碑」と受け止める。過去の惨状が現実となることを予見し、核廃絶を訴え、核廃絶をしな
いなら、同じことが起こるといふ警鐘を鳴らしていると窺える。平和の使者である鳩は、
これで良いのかと不思議に思い首をかしげると詠んでいる。

この詩において「未来」は「原爆慰霊碑」であり、「ここ」も、「原爆慰霊碑」であろう。
核兵器反対の坐り込みは、必ず原爆慰霊碑の前において行われる。このことは、多くの
人が、原爆慰霊碑が核の原点とし、核廃絶への将来に向けての希望であると捉えられてい
る。しかし、象徴である「原爆慰霊碑」と断言していいのであろうか。貞子は「未来」に

ついでどのように述べているか彼女の記述から考察していく。

「未来」について貞子の記述を引用する。

・ヒロシマ、ナガサキは決して過去の出来ごとではなく、核時代の行く手にたちはだかつている未来風景であり、被爆以来絶えることなく続いている痛みであって、核時代が終焉し、核の脅威が完全になくならない限り過去のものにならないことを意味しています（注29）。

・なぜ未来なのか。ヒロシマは過去の事件や問題ではなく、現在の、そしてより多くは人類未来の存亡にかゝわる問題だからです（注30）。

貞子はヒロシマ、ナガサキは過去の出来事ではなく核の脅威がある限り、ヒロシマ・ナガサキに起きた惨事が未来に起り、人類の滅亡に繋がるものと捉えている。だからこそ、人類生存のため人間的実感をもって核時代の未来を予兆し、警告をならしている。そして、核時代が終焉して初めてヒロシマ・ナガサキは過去のものになるので提言している。このことから「未来」は平和が実現されていく世界であり、「ここ」は過去を見据え、問いかえし、声をあげる地点であると結論づける。

第六節 「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」について

この詩は『詩集 未来はここから始まる』の扉に記載されており、その後の貞子の詩の中に何度も引用されていることから重要な詩であると考え考察していく。ここで、留意しなければならぬのは、序詞において「死者たちを忘れまい」であるが、その後、初めて詩「死んだ少女のこえ」（一九七八、九、一五）にこの「フレーズ」を詠んでいるが、「死者たちを忘れまい」ではなく「死者たちへの誓いを忘れまい」となっておりその後この「フレーズ」が用いられている。なぜ「誓い」の語が挿入したのか貞子は、何も語っていないが、「誓い」の語が入ることにより、当然ながら死者たちへの誓約となり、更に「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ」が強調されるためとも考えられる。これらのことから、戦争の悲惨さ、原爆で人間の尊厳もなく死んで行った人たちの死を無駄にしないとの強烈な思いが窺える。

この「フレーズ」に関して貞子自身が、心意を述べた文章があるので次に引用する。

・「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちの誓いを忘れまい」前大戦で、人間の尊厳をコナゴナに碎かれ、むごたらしく死んで行った死者たちの死を無意味にしないため、こどもの未来を確かなものにするため（後略）（注31）。

・一度目は過ちでも、二度目は裏切りだと言うこと。「過ちは繰り返しません」と誓ったのですよね。初めいわゆる聖戦だと思いい込んで参加したかもしれないけれど、戦後に

なつて、それは過ちだったということのみならず、みんなが知ったわけですよね。その過ちをもういつべん繰り返したら、それはもう裏切りだということになる。過ちだったということは、既に加害者であったということを知らなければならないわけなんです（注32）。

・私はかつて「未来はここから始まる」という詩集の扉に「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちの誓いを忘れまい」という序詩をのせました（中略）原爆は人間に対して何をもたらしたのか、人間は原爆に対して何をなすべきかを、しっかりと構成の下で過去、現在、未来を貫通する証言として語ることを要求したものと
思います（注33）。

貞子の心意として、未来を担う子どもたちのためにも十五年戦争での死者たちの死を無駄にしないことである。戦争に突入したことは過去の過ちであるが、日本だけではなく世界の国々が次に戦争へと向かえば戦死者、被爆死者たちに対しての裏切りである。この「フリーズ」は、死者たちの死を無意味にせずその教訓とするためのものである。「フリーズ」を理解しようとするならば原爆は、一瞬のうちに多くの人の命を奪い、生き残った者は、放射能によって身体も精神も冒され、広島、長崎の街は破壊され廃墟となったことを認識しなければならぬ。原爆は、極めて危険であることを認識したならば、行動として、二度と絶対に使用してはならないし、声を挙げなければならぬ。重ねて言えば、原爆の惨劇は過去のものではなく現在から未来へと一貫して原爆の事実を語り伝えなければならないものなのである。

「フリーズ」は、原爆犠牲者慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい／過ちは／繰返しませぬから」を想起させ、この碑文から引用したものと考えられる。この碑文に付いて「過ちは繰り返しません」というのは誰か」と言う発言をめぐって碑文論争が始まった。一九七〇年「八月三日、当時の山田市長は、「慰霊碑の碑文は変えない」、「碑文の主語は世界人類であり、人類全体の戒めである。偏狭に解釈してはならない」と決断を下し、以後碑文解釈は定着し今日に至っている（注34）」との記述がある。碑文の主語は人類全体であり、人類への戒めである。このことに関して、貞子なりに解釈した文章があるので引用する。

原爆で死んだ愛するものたちの死の意味と、生きのこった者の意味を問わずにはおられなかった。そして、共通の答として得たのが、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しません」と言うことであり、「死者たちは平和のいしずえとなり、生きのこったものは平和の不死鳥となってよみがえったのだ」と言う確信だった（注35）。

被爆死した人たちは、突然命を絶たれた。それも一片の人間の尊厳もなく焼かれた。原爆から生き残った者として何ができるかを問うた時にこの碑文に到達したのであろう。それゆえ、詩の構想、表現からも存在感が窺える。死者たちは、戦争を望んで死んで行った

のではない。平和を望んで死んだのである。その事実が根底にあるからこそ、生き残った者は、死者たちの平和への思いを継承し、恒久平和を目指し、厳守しなければならないのである。原爆を乗り越えて永久平和を希求する精神が貞子に宿っているゆえの悲痛なまでの切実感といえる。だからこそ貞子の詩の中に何度も繰り返されているのだろう。この「フリーズ」を的確に取り込んだ詩があるので次に引用する。

「何のために戦ったのか」（一九九一、一〇、五）

何のために戦ったのか／誰のために戦ったのか／夫も息子も帰らなかった／教え子たちも帰らなかった／広島は二十万が焼き殺され／呉は一八三一人が爆死した／何のために殺したのか／誰のために殺されたのか／白地に赤い旗の下／くりひろげられた悪夢のかずかず／虐殺されたアジアの民衆二〇〇万／内外同胞三〇〇万／あやまちはくり返しませんと／誓った私たち／戦争放棄の第九条／けれども掃海艇は／軍艦旗をはためかし／日の丸の波に送られて出港した／一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／くりかえすまい軍都広島／くりかえすまい軍港呉／再びアジアに銃を向けまい

この詩は、「フリーズ」の初出から十二年も経っている。一連では、何のため、誰のために戦ったのかを問い、その結果がもたらしたものととして広島、呉の死者数を挙げている。二連に行くと何のため、誰のために殺したのか、戦争の本質を問い、日の丸の下で行われたアジアにおいて虐殺された民衆、虐殺されたアジアの民衆の死者をそれぞれ具体的に数字に表記し、戦争は、人命の大量消費であると負のイメージを詠んでいる。三連において一連と二連を踏まえて、日本は戦後、戦争放棄の憲法九条を掲げた。しかし、掃海艇は、軍艦旗をはためかせ、出港を見送る側も旗を振って送り出している。この情景は戦時下の戦争賛美の再現としか見えない。平和を願う日本国民の国家的裏切りである。軍事力によらない規範は、憲法九条であったはずである。憲法九条を確実に実践する責任がある。かつての十五年戦争は、東南アジア平和のために大義名分として行われた。現在は、日米安全保障条約体制の下、国際協力、国際貢献という名でアメリカへの協力を強制されている。しかし、そのような大義名分に惑わされて再び銃を取ってはならないとの戒めである。そして「くりかえすまい軍都広島／くりかえすまい軍港呉／再びアジアに銃を向けまい」と結んでいる。

人間は、ともすれば過ちを犯すかも分からない危険性をもっている。人間の尊厳を固守していくためには痛みを立ち返り、過去に立ち返らなければ踏み間違えてしまう。痛みゆえに「フリーズ」は原爆の惨事に立ち帰らなければならないと指し示しているのだろうか。

原爆の惨事を証言した著書『証言は消えない』の中において原爆で死んだ幸子さんのことを述べた後、「あの日のことが心の底にこびりついていて、いまでも忘れられない。こんな残酷なことがこの世にあってよいものだろうか。二度と繰り返はならないと思った」（注

36)との記述があり、「フレーズ」の原点である。

おわりに

本章において、貞子の「孤立と傷心」に陥った因果関係を述べ、そこからの脱却の契機を明らかにした。貞子が、孤立の数年間を経験したことによって、自分のおこり、高ぶり、自分本位であったことに気がつき人間的に成長し、繊細な詩人から強い活動家と変えられたと述べた。

詩「未来はここから始まる」は、部落解放同盟全国婦人大会の(しおり)に掲載されていることから、差別と戦争は無関係ではなく、差別と核がなくなった時を「未来」とし、「ここ」は差別も核も無そうと立ち上がったまさにその時であるとした。また、「未来への入り口」において「未来」は、平和が実現されていく世界であり、「ここ」は過去を見据え、問いかえし、声をあげる地点であると結論づけた。

『詩集 未来はここから始まる』の扉には「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」が記載されていることに注目し、このフレーズが後の貞子の詩に幾度も繰り返されることから、これは原爆で生き残った者の責務として、二度と戦争へ突き進まないための戒めであり、必然をもった絶対的真理として掲示されているものである。それゆえ、貞子は何度も「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちの誓いを忘れまい」と悲愴な思いで現在、生かされている者が核による戦争へと方向付けられようとしていることを危惧し、繰り返し警告を鳴らして詠んでいる。貞子は、原爆の惨状を体験し、核の脅威を知得したがゆえに二度と繰り返されてはならないと「理性」と「洞察力」を持つて核兵器廃絶を訴えているのである。

貞子の核体制はやがて起こり得る恐怖の「未来」を黙示録的な死滅の危機に直面していると予見している。今はまだ間に合う。貞子の悲痛な叫びが窺える。

また、「フレーズ」を結論づけるならば平和への信念、原爆で生き残った者の責務として、二度と戦争へと突き進まないための戒めであり、メッセージであり、必然性、確実性、絶対的真理としてのものであると結論づける。

注

1 栗原貞子 『詩集 未来はここから始まる』 詩集刊行の会 一九七九年四月 一三三頁。

2 栗原貞子 『ヒロシマの原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月 二五〇～二五一頁。

3 注2に同じ。一四一頁。

4 栗原貞子 「ヒロシマに生きた女たち」 『季刊長崎の証言』第四号 長崎の証言の

- 会 汐文社 一九七九年五月 六二頁。
- 5 「あとがき」 『ひろしまの河』一九六一年第一号 原水爆禁止広島母の会事務局 一九六一年六月 八頁。
- 6 栗原貞子 『どきゆめんと ヒロシマ24年 現代の救済』 社会新報 一九七〇年四月 四八頁。
- 7 「あとがき」 『ひろしまの河』一九六六年第一五号 原水爆禁止広島母の会事務局 一九六六年八月 一六二頁。
- 8 栗原貞子 『詩集 私に広島を証言する』 詩集刊行の会 一九六七年七月 三六頁。
- 9 栗原貞子 『ヒロシマというとき』 三一書房 一九七六年三月 五三頁。
- 10 注1に同じ。 同頁。
- 11 詩 栗原貞子 画 吉野誠 『詩と画で語りつぐ 反核詩集画 ヒロシマ』 詩集刊行の会 一九八五年 二二頁。
- 12 注8に同じ。 六〇頁。
- 13 注9に同じ。 六七頁。
- 14 伊藤眞理子 「栗原貞子の詩と思想」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 五七頁。一九九一年広島中央図書館に於いて「正田篠枝文学資料展」が開催される際に、伊藤氏が篠枝の未発表の短歌を見つけ、栗原貞子研究に役立つ物として、貞子に宛てた書簡に記述したものを、『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』に記載した短歌である。なお、五首記載されているが、ここでは三首に留めている。
- 15 注8に同じ。 六六頁。
- 16 注6に同じ。 二七八頁。
- 17 栗原眞理子 「思い出すまま」 注14に同じ。 九五〜九六頁。
- 18 『ベ平連ニュース縮刷版』 「ベ平連ニュース縮刷版」 刊行委員会 一九七四年六月 五三頁。
- 19 注6に同じ。 六七〜六八頁。
- 20 栗原貞子 「文献を通して見る部落の被爆者の二重苦」 『解放教育』一九八〇年第一二三号 明治図書 一九八〇年七月 一三三頁。
- 21 『栗原貞子全詩編』 土曜美術社 二〇〇五年七月 二五八頁。
- 22 栗原貞子 『核時代に生きる』 三一書房 一九八二年八月 一六六頁。
- 23 『原爆から原発まで―核セミナーの記録(上)』 「ヒロシマ・ナガサキから 討論」 編者原爆を伝える会 柏心社 一九七五年七月 一三〇頁。
- 24 注2に同じ。 一六二〜一六三頁。
- 25 注2に同じ。 一九二頁。
- 26 栗原貞子 「報告！憲法をとりでに平和創造を」 『月刊社会党』一九八一年五月号 第二九八号 一九八一年 一二頁。

- 27 栗原貞子 **解放の思想** 18 「国家悪を逆照射する被差別者たち―栗原貞子」 ≪部落・朝鮮人・被爆者・公害患者を軸に≫ 『解放教育』一九七三年四月号第二十二号 明治図書出版 一九七三年四月 一一六頁。
- 28 注2に同じ。 一六四頁。
- 29 栗原貞子 『ヒロシマ 未来風景』 詩集刊行の会 一九七四年三月 一頁。
- 30 栗原貞子 「ヒロシマについての未来について」 『旭川市民文芸』第二二号 旭川図書館 一九七九年一月 五四頁。
- 31 栗原貞子 「耐えられるのか」 『子どもたちに平和な地球を残したい』 日本子どもを守る会 一九八二年四月 五三頁。
- 32 栗原貞子 **著者と語る** 「被爆体験を伝えるということ 「生ましめんかな」「ヒロシマというとき」の周辺」 『国語通信』一九八三年七月・八月号第二五七号 筑摩書房 一九八三年八月 三一頁。
- 33 栗原貞子 「ヒロシマの文学の回想と今日 ―広島文学館構想に際して―」 『詩と思想』一九八七年第三八号 土曜美術社 一九八七年八月 一三九頁。
- 34 栗原貞子 「黒い折鶴の心」 『月刊社会党』一九八八年一月号第三八四号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八八年一月 一二二頁。
- 35 注6に同じ。 二十九頁。 初出は『ひろしまの河』創刊号 一九五六年六月。
- 36 栗原貞子 『証言は消えない―広島の記事2』 中国新聞社 一九六六年六月 一六六頁。

第五章

詩人・運動家としての栗原貞子

―反戦・反核・平和を訴え続けて―

はじめに

栗原貞子は、行動する詩人といわれている。貞子の詩には、運動の中から生まれた詩も多くある。詩人であることが運動に結びつくことによって、詩はその時代の様相が反映されたものである。それゆえ、貞子を研究するならば、詩人だけでなく運動家として如何に歩んできたについても考察の根底に据えなければ充分とは言えないと考えられる。まさしく詩人、運動家は貞子の詩作の車の両輪で、どちらが欠けてもバランスが取れないのである。このことは、次の文章からも確認できる。

私はどんなに告発しても告発しきれない憤りを感じ、書くことだけでなく、すべての人々と力を合わせて原水爆禁止のため可能な一切をかねねばならないと思つてささやかな努力をしてまいりました。(中略) 私たちは平和行進に自らの意志として参加することによつてこそ、村々や町々の人々の平和へのあつい思いをじかに知ることが出来る、汗やほこりにまみれてこそ、汗やほこりにまみれて生きる人の生活を知ることが出来るのではないでしょうか(注1)。

この文章は、一九五九年に既に書かれていることから自らの立場を詩人だけに据えることなく運動家へと至らせたことがわかる。また、原水爆禁止への告発を文学に限定した意志表示の限界を感じ、自ずと行動へと向かったといえる。多くの人と運動を共にすることによつて、人々の平和への反応、あつい思いを感覚として捉えることになったといえよう。

この引用から貞子が「告発」する憤を書くことだけでは不十分であると自覚し、運動に参加し、手ごたえを感じたことが読みとれる。では、何時頃から貞子は、運動に関わったか、それは、どのような運動であったか、海外、国内においての活動は、どのようなであったかについて貞子が述べたエッセイや資料から、微細的に考察していく。

第一節 議員夫人としての奔走

夫の唯一は、一九五一年四月に安佐郡(現・安佐南区)祇園町議会議員に初当選し、一九五四年に町議会議長の要職に就いた。一九五五年四月広島県議会に社会党から当選し、一九六六年まで三期務める。その間、地域のさまざまな紛争に奔走した。夫婦が共に闘った経験は、後の貞子の運動家として、運動とは何か、どのように闘っていくかの方法を学習したと共に、政治的な側面でもって視点を捉え、地域住民の意見を傾聴することから社会性

が自ずと備わったと言える。貞子は、「文学は政治に従属するものではなく政治に先行するものであり、政治的征服者たちに対していつの時代でも自由な文学は反対の立場に立っている」(注2) また、「政治への無知と無関心こそ、平和への敵と言えるでしょう」(注3)とも述べている。

夫の唯一の葬儀において、衆議院議員大原亨氏は、生前の唯一の有り様について「その間あなたは、長束小学校の統合移転、今田校長問題、太田川漁民の権利斗争から、日常の世話活動まで、その反権力の理想、民衆の論理を貫き通し、節を曲げず毀誉褒貶を度外視して信念を貫いて来られました」(注4)と述べ、また、日本社会党広島県本部執行委員長森井忠良氏は、「一九六七年四月任期満了で勇退されるまでの間、決算特別委員会副委員長、総務常任委員会副委員長の要職を歴任され、また一九六五年十一月には自治功労者として全国議長会から表彰をうけられるなど永年にわたり地域住民のための明るい豊かな地方自治をめざして奮争されると共に、日本社会党の政策普及のために多大の貢献をなされました」(注5)と述べている。次に記述する『栗原貞子全詩編』(二〇〇五、七)の年譜からも確認できる。

一九五七年三月地元の長束小学校統合問題が起こり、賛否をめぐって地域が二つに分断し、激しい闘争となる。自宅を闘争本部として「長束小学校存置期成同盟」をつくって反対運動をする。(中略)一九五八年九月、反対運動にあけくれしてようやく長束小学校存置をかちとる。一九五九年三月、長束小学校統合反対の報復人事として校長の格下げ行われる。現地闘争本部を自宅に置き、広島日教組と共闘(十年後、最高裁で勝訴。その間、裁判闘争など苦闘する)。

貞子は、地域の闘争の都度、自宅を解放して問題解決に奔走し、裁判に持ち込まれた場合は、十年にもわたって苦闘している。このような経験は、運動家としての貞子のアイデンティティーを確立したと捉えることができる。

第二節 平和運動への展開

貞子が平和運動にいつから関わったかは未詳であるが、「昭和二十七年ごろ、私は平和運動のなかであの時の赤ん坊のお母さんだった平野美貴子さんを知り」(注6)とあり、また、一九五二(昭和二十七年)年広島市の本川小学校において世界連邦アジア会議が開かれた時、「十七団体を纏め、一切の兵器の廃止特に原子兵器の即時廃棄、原爆、水爆による威嚇的戦争宣伝の禁止、原爆に関する言論、出版、表現の自由に対する弾圧反対」というメッセージを掲げ広島市の諸団体が糾合し、宣言するよう求めた」(注7)との記述がある。

夫の唯一が祇園町議会議員に当選したことは、有権者から支持を得たということである。広島市と隣接する祇園町の多くの有権者は、原爆と何らかの関わりがあったことを念頭に

置かなければならない。貞子は、町議会議員夫人として自ずと平和運動の初期から運動に参加し、更なる活動を目指して、世界連邦アジア会議において、まとめ役として奔走したのでろう。以上の事実を照らしてみると、この頃から貞子には、運動家としての度量と素養があったと理解する。

第三節 原水爆禁止世界大会への関わり

一九五四年、アメリカのビキニ水爆実験に被爆した第五福竜丸の乗組員だった久保山愛吉さんが亡くなった。この事件は、それまで、アメリカの占領下にあつて原爆の被害を告げできずにいた日本国民は、一人一人の感情を一挙に湧出、爆発させ、一斉に水爆禁止署名運動へと向かった。署名は、全国でその年の十二月まで約二千万筆が集まった。翌年、第一回原水爆禁止世界大会が広島で開催され、原水爆禁止運動へと発展した。署名活動が原水爆禁止運動への突破口になったのである。被爆した一般市民が手を揚げ、第一回原水爆禁止世界大会は広島で、第二回は長崎で開催された。しかし、その後原水爆禁止大会は、政治的な路線と対立を起こし、多くの被爆者は反発し、運動から離れて行った。

貞子は、「私が原水禁運動に参加したのは、体制側からの攻撃が始まった第四回の中からであった」(注8)と述べている。第五回において安保関係の事案で意見は、対立したことから運動はピークとなった。一九五九年、広島県議会は安保改訂を盾にして「原水爆禁止大会は政治運動」へと規定し、大会準備補助金の打ち切りを決めたのである。この出来事をきっかけに、翌一九六〇年にかけて政治的対立が深まり、原水禁運動の流れは「たまたかう世界大会」(六〇年)へと動いた。東西冷戦の厳しき、安保改訂反対闘争の激化で国民運動の内部にも亀裂や対立が生じ始めていた(注9)との記述がある。また、自民党本部「原水爆禁止運動は不純な偽装平和運動で世界大会が安保改訂を論じるのは政治介入だ」との見解を表明した。これらの一部始終のことが次の文から確認できる

第五回の世界大会は安保条約改訂に反対する議案を大会議案にしたことから、右翼暴力団は平和行進の行列にトラックで突っこんだり、トラックの上から行進団の頭上へバケツで糊をぶっかけたりした。広島県自民党はヘリコプターをチャーターして空から大会攻撃のチラシをまいたりした(注10)。

当時安保条約改訂に対しての是非を巡り、様々な実力行動があつたことが窺える。安保改訂を前にして広島の世界大会へ向かう平和行進は最大の盛り上がりとなり沖繩コース、新潟東京コース、県北コースなど、まるで「日本を流れる炎の河」のように勢いを増していた。貞子は、この現状を詩「日本を流れる炎の河」を詠んでいる。長い詩であるが全文を引用する。

「日本を流れる炎の河―一九五九年第五回世界大会―」(一九五九、八、二〇)

灼けつく太陽／熱気とほこりの舞いあがる五十米道路。／核武装反対、原水爆禁止の
／白い横幕を高くかかげる／日に灼けた若ものたち。／ひるがえる赤、みどりの旗、
／炎の河が流れるように／延々とつづく平和行進。／先頭を行く宣伝カーのスピーカー
の声。／「あの日も今日のように暑い日でした／広島はいちめんの焼野原となり／わ
たしたちの親や兄弟は／古綿を焼いたように／黒こげになって死んで行きました／：
…」／日赤医療班の救急車が／徐行しながら随行する。／冷たい麦茶を接待する婦
人会の人たち／道路の両側をうずめた／歓迎の市民たち。／男も 女も としよりも
子供も／緑の小旗を振り／手をたたき／あふれる涙を拭く。／ビルの窓から投げか
けられた／五色のテープ／にぎりあったテープを通して／みんな ひとつにとけあつ
たのだ。／汗と涙でぐしょ ぐしょになり／拭いても 拭いてもあふれる涙。／「：
私たちが今歩いている／道路の上にも／あなた方が立っている舗道の上にも／あの日
焼き殺された肉親が／折り重なっていた。／真昼間の烈しい太陽に／照りつけられて
：」／宣伝カーのスピーカーは追憶する。／「：そして十四年たった今でも／放射能に
犯されて／原爆症で／死んで行くのです：」／死んだ兄弟や 友人の写真を／胸に
吊るした人。／行進が相生橋まで来た時／見える 見える 本川橋をわたる／東京
新潟の大打進。／すすむ すすむ 赤、緑の旗、旗、旗、／東海の／裏日本の／町々
や村々の人々を呼びさまし／兄弟たちに迎えられ／手をとりあい／大会をひらき／新
しい参加者と一緒に／峠まで孫の手を引いて歩いた／おばあさん。／玩具の指輪をこ
とづけた女の子。／かつて赤旗など一度も／通ったこともない／静かな山村の人々を
／はげしくゆすり／時に裏日本原水爆禁止大会では／補助金を削った広島県自由党県
議団に／はげしい怒りをこめて／抗議を決議した。／出発以来五十六日／一千五百軒、
日本を流れる炎の河のように／炎天下を歩き／雨とあらしの中を歩き／石ころ道を歩
き／足の裏に無数の豆をつくり／皮膚が破れて血を吹いて／ああ今たどりついた／広
島の爆心地。／わきあがる大合唱。／拍手のあらし／ようこそ ようこそ 兄弟たち。
／その時又／西のコースが入場した。／六月十六日／沖繩の世論島を出発し／延千三
百軒 五十日歩き／つづけた沖繩代表を先頭に／炎の河のように渦巻き／流れる民
族のねがい。／三方からゆるく蛇行しながら／ここ慰霊碑前に合流する。／ああ一千
万の日本の兄弟たちの／ねがいをあつめ／ここ爆心地につどう／第五回原水爆禁止世
界大会。／世論島出発の時／引き裂かれた沖繩の同胞は／海をへだてた沖繩辺戸の
岬に／のろしをあげ／世論島からものろしをあげて／平和行進の成功を祈りあつたと
言う。／全島米軍の基地となり／畑を耕すのにも／鉄条網の中を行き／検問され推何
される／囚われた同胞のことが忘れ得ようか。／新死刑法を撤回させよう。／安保改
訂を粉碎しよう。／原爆被害国が加害国にされようとしている時／死者たちの骨々も
鳴る／ここ爆心地慰霊碑前の／第五回原水爆禁止世界大会の前夜祭。／高く奏でるブ
ラスバンド／舞台の上で抱きあう／アメリカの／ソビエットの両代表。／交錯する

テレビライト／一瞬世界の中心は広島にうつり／時間が白熱する。／いく百、いく千の放たれた白い鳩。／爆心地の空をいつまでも／低く舞いながら／やがて夕空に消えてゆく。(傍線論者。以下同様。)

この詩を俯瞰してみると、一連において核武装反対、原水爆禁止のデモであると銘打っている。二、三連はデモの様子である。四連は、デモの様相に加え、沖繩の現状をアピールし、平和行進とゴールにおいての様子である。五連は、世界平和大会のフィナーレである。この詩は、運動の有り様をあたかも解説を交えニュース実況中継されるが如く、また、移動カメラで捉えた如く、映像に具象性があり、詩と言うよりも散文を思わせる。そして、技巧もない安易な言葉でもって直叙的に詠まれおり、容易に透視できることから、リアルであり、写実的であり、臨場感に満ちた感動がある。それゆえ、一層心の高鳴り、熱気が伝わってくる。運動は、熱気とほてりが反映し高揚であったことがわかる。

注目すべきは「舞台の上で抱きあう／アメリカの／ソビエットの両代表。」のフレーズである。アメリカとソ連は、これまで冷戦時期であったが、この一ヶ月後の九月、両国は、首脳会談を開催し、全ての国際問題を交渉による平和手段で解決することを宣言した。いわゆるキャンプ・デービッド会談による「雪解け」であるが、既に民間の中に予兆があったと解せる。「一瞬世界の中心は広島にうつり」とは、世界のトップニュースである事実が広島においてなされたと表現している。そして、平和への第一歩の現実を詠み、平和の象徴の鳩が「低く舞いながら／やがて夕空に消えてゆく」と詠んでいる。この光景には、昼間の騒音、興奮から一日の終わりとも言わなければならない。高揚した一日は夕日と共に冷める。しかし、一日の終わりではなく明日への希望に続く余韻が込められている。すなわち明日への希望へと続く余韻とは、平和を意味している。このフレーズを詩の最終部に置いていることは、貞子の感情を象徴しており明日へと続く平和の在り方が形象化されていると読みとれる。貞子にとってこの詩は、この時だけに終わらず、次の大会まで影響を及ぼしたことが次の引用からわかる。

翌一九六〇年七月、私は「日本を流れる炎の河」と言うリーフレットをつくり非売品として第六回世界大会で配布した。第六回の平和行進は大会開催地の東京で集結し、沖繩を出発したコースが広島を六月八日に通過した。私は居住地の祇園町から芸北コースに参加し広島の十日市で行進団と合流した(注11)。

貞子は、翌年の大会においてこの詩のリーフレットを手作り配布するだけでなく自ら、平和行進に参加したことは、感動の余韻が一年経ってもまだ残っていたことがわかる。

第四節 ベトナム反戦運動への関わり

一九六一年アメリカがベトナム戦争に介入し、マスコミは、日を追うごと増加するベトナム一般市民の犠牲や惨劇を報じた。ベトナム犠牲者の増加と惨劇に懸念、危惧し、同じ視座に立つ小説家小田実、開高健、哲学者鶴見俊輔などをはじめ多くの有識者達が、参集して「ベトナムに平和を！市民連合」の略ベトナム反戦運動を發起し、街頭デモ、反戦広告、支援カンパなどの運動をした。そして、機関紙『ベ平連ニュース』（一九六五年〜一九七四年）を毎月発行した。貞子は、『ベ平連ニュース』に二〇号、二二号、二二二号、二六号、二七号、三七号、四〇号、四一号、四二号、四四号に投稿している。その中でも「清水徹雄さんを守る会」に関して、三七号（六八、一〇、一）、四〇号（六九、一、一）、四一号（六九、二、一）に投稿がある（注12）。「清水徹雄さんを守る会」とは如何なる会なのか、貞子が如何に関わったかについて次のことから明らかにする。

観光ビザで渡米中の広島市の青年が、選抜徴兵制度で米軍に徴兵され、ベトナム戦争に従軍していたことが明らかになったのは四十三年のことである。「もうベトナムには帰りたくない」——一時帰休で広島に帰っていたその青年が、突然、助けを求めて貞子に電話してきた。すぐ東京のベ平連と相談、長い経過を経て何とか解決にこぎつけた（注13）。

清水氏を救出する中で、アメリカの政治姿勢が分かり、詩「アメリカへは行くな」を詠み『ベ平連ニュース』（一九六八年一〇月）に掲載され、「ヒロシマ・未来風景」（一九七四年三月三〇日刊）に収められている。当時、アメリカへ行くと十八歳以上二十六歳までの若者は、六ヶ月滞在するとアメリカの国内法で、選抜徴兵制が適用され、ベトナムに行かされる現状があった。貞子は、他国籍の若者まで兵士として、戦地へ送り込み、人間としてのあるべき実体を根底から覆す、アメリカという大国の傲慢さ、それに抗した被爆者の青年の救出に奔走し、全力で闘ったと解せる。

ベ平連のデモに関して貞子の見識が示された文章があるので次に引用する。

最初のうち定例デモは、個人原理による運動の新鮮さにかなり多くの人が集まったが、後には学生だけの少数のデモとなり、（中略）自己満足のデモと懐疑もあった。しかし、日本人米兵清水徹男君の米軍脱走の時には、少数派が大きな運動をつくりだし、東京のベ平連と呼応して米軍離脱の目的を達成したことは少数派の運動の有効性を確信させた。しかし昂揚の後には下降現象はさげられず、私も次第に遠のいていった（注14）。

この記述からも分かるように運動の初期の定例デモは、多くの人が賛同し、集ったが、次第に衰退し、学生だけのものとなった。清水氏の脱出には、「運動において数は力なり」という中で少数が関わり、成功させた意義は大きく手応えを感じたが、貞子自身も、清水

氏の救出後、活動から離れている。そのため、四四号を最後に『ベ平連ニュース』に投稿していない。

第五節 日本YWCA「ひろしまを考える旅」への関わり

日本YWCA「ひろしまを考える旅」の発足に関しての経緯を記述した文章があるので記述する。

「ヒロシマというとき」を私が書いたきっかけは、こうです。吉村さんという人がアメリカの国際YMCAの会議に行つて、韓国の人たちやら東南アジアの人たちから（中略）「いまでも、日本にもう一度原爆が落ちればいいんだ、経済侵略の次は軍事戦略だ」と。（中略）吉村さんという人は、東京生まれで原爆のことを何も知らないでいた。それで帰つてから早速YMCAの総会でそのことを問題提起して「広島を考える旅」というのを、七〇年以来十何年もやっています（注15）。

広島女学院大学に開設されている「栗原貞子記念平和文庫」でのファイル五〇によると第三回は「私の履歴書を書く」と題として講演をし、第六回は、「栗原貞子にきく「広島」証言としての作品を通して」と題して講演し、第七回は、「栗原貞子氏（詩人）にきく―作品を通して―「旗」を講演している。第九回は、特別なのか『核時代に生きる』の中で「第九回の旅でフィールドワークの文学グループといっしょに大田洋子の被爆文学地図を歩いたことも忘れがたく残っている」（注16）との記述がある。以上のことから、短期間ではあるが、熱心に関わつたと窺える。

現在でも「ひろしまを考える旅」は、続けられ、全国の中学、高校、大学、大学院生、日本で学んでいる留学生などが参加している。

貞子自身「書くことから語ることへ行動を拡げた始まりは、日本YWCA（日本キリスト教女子青年会）の第一回（七一年七月）「ヒロシマを考える旅」からである」（注17）と述べている。このことを大前提としたことが、次のことから確認できる。当時の世情を詠んだ詩「同心円―71・イワクニ、ヒロシマ―」である。この詩について「岩国基地に核が存在し、深夜ひそかにトレーラーバスで運び出されたことが確認され、原水禁国民会議や被団協などが現地に抗議団を派遣した際、私も抗議団に同行し、行動をともした時の作品である」（注18）と付記されていることから、岩国に核の存在が判明し、貞子が希求している「平和」から世情は乖離し、政府への不信と疑念を抱き、危機感を意識し、行動へと方向づけたと考えられる。この詩は、時代背景を射程に入れ詩作された情景を踏まえて詠んで行かなければならない。そのため長い詩であるが貞子の心意が表現されているので、全文を引用する。

「同心円―71・イワクニ、ヒロシマ―」（一九七一、十一、二三）

いちめん／枯草の穂がそよぐ 草原地帯／屋根型にもりあがった／六基の貯蔵庫だ。
／ニューメキシコ州／ロスアラモスではない。／ヒロシマから四十軒／八月六日 死
の同心円の／外側だった岩国。／ベトナム撤退でふくれあがった／極東の戦略基地イ
ワクニだ。／毒ガス BC兵器の作戦部隊が／駐留する／原爆搭載機スカイホークが
／離着陸する／厚さ何十米のコンクリートの／壁のなかに／紡錘型のアレは貯蔵され
ているのだ／アレは内部に／世界の終りの 風景を収めて／起爆される日を夢見てい
るのだ／日本人オフ・リミットの／草原地帯に／ひろがる死の風景のなかを／黒い凶
鳥が 早くも／死屍を求めて舞っている／…突然 抗議団の頭上を／ファントムが／
晩秋の空を裂開して旋回する／イワクニ、沖繩、ベトナムを／結ぶ死の定期便だ／
防衛庁の出先は／うすら笑いを浮かべて／「ノーコメント」という／基地司令は／「大
統領の権限だから／ノーコメント」と言う。／岩国市長は／「自治体には調査権がな
いから／ノーコメント」と言う。／国会では数の暴力が／強行採決で 国民を張り飛
ばした／かつてナチの同盟国だった日本。／今、原爆帝国主義の同盟国日本／／年老
いた被爆者たちは／ゲートの前に／貧血の体を張って座り込み／冷たい風にさらされ
ている／あれから ずっと叫びつづけて来たのに／あれから ずっと呼びかけて来た
のに／死の同心円の中に／すっぽり入れられてしまった／イワクニ ヒロシマ／けれ
ども／原爆の呪いは とかねばならぬ／死の同心円は／平和の同心円に かねねばな
らぬ／あの時、焼き殺された死者たちを／見殺しにして／助かった私たちだから／生
きとし生けるもの／ねがいなのだから

一連において「いちめん／枯草の穂がそよぐ 草原地帯」と詠みそれに続く語は「六基
の貯蔵庫だ。」とある。この語彙だけでは何のことか分からないが、読み進めていくうちに
「アレ」と代名詞で詠まれているが、これは「核兵器」であることが窺われる。のどかな
平和の草原に戦争と直結する「核兵器」である。「平和」と「戦争」と相反する二項を詠ん
でいることは、異常であることを明示している。岩国の現状を詠み、イワクニ、沖繩、ベ
トナムは死によって結ぶ定期便と断定している。二連に行くと防衛庁、アメリカ基地司令、
岩国市長、国会における対応、「うすら笑いを浮かべて／「ノーコメント」という」これ
は権力に対して、貞子の激憤である。そして「原爆帝国主義の同盟国日本」と断定し、皮
肉っている。被爆国日本であるのに反省を伴わない国に対し、風刺が究極的に強められて
いる。三連において「年老いた被爆者たちは／ゲートの前に／貧血の体を張って座り込み
／冷たい風にさらされている／あれから ずっと叫びつづけて来たのに／あれから ずっ
と呼びかけて来たのに」と政府の対応と被爆者との格差の対比を詠んでいる。「あれから
ずっと叫びつづけて来たのに／あれから ずっと呼びかけて来たのに」に二度も詠んでい
る。その努力は徒労に終わろうとしている。この危機に対し、核兵器の脅威を体験し、被
爆から生き残った者の責務として「自戒と世界平和」への願望を貞子は、詩に託している。

この詩は「ヒロシマというとき」の下地になっていると考えられる。

第六節 署名活動と座り込みの実践

先ず、署名活動について貞子は、ヒロシマ行動実行委員会の原水禁や原水協、生協の人たちと広島市の繁華街で軍縮署名とカンパ活動を行っていることが次の記述から確認できる。

私は二月一三日、三・二一ヒロシマ行動実行委員会の原水禁や原水協、生協の人たちと広島市の繁華街で軍縮署名とカンパ活動を行った。一時間あまりの短時間であったが、私は三七名の署名と二七名のカンパをいただいた。その中には病気でふるえる手で署名した老人もあった。子連れの母親は子どものためといい、平和教育を受けたいという若者も署名した。しかし中年男性は「急いでいるから」とか、「署名しても無駄だ」という人が多かった。経済社会の中堅世代の核兵器への無関心と無気力を意味しているようである。しかし核兵器の恐怖を真に知ったとき、無関心、無気力で済ませることが出来るだろうか(注19)。

一時間余りの署名、カンパ活動をし、署名活動の手ごたえはあるものの、日本の経済を支えている中年男性は、軍縮よりも経済優先なのか無関心を嘆いている。このことは署名活動をしたことにより、世情を把握できたと言える。また、「政府は、広島原爆を投下したアメリカのルメイ大尉に航空自衛隊育成の功労章として勳章を送った。(中略)私たちは街頭にでて署名運動をした。十二月の吹きさらす寒風の中で」(後略)(注20)というこの記述にあるように広島原爆投下を指揮したルメイ大尉に叙勲をしたことは、被爆者を無視し、逆なでした行為であり、政府への怒り、抗議を寒風にさらされながらも署名活動したと窺える。貞子は、高所から眺望するだけでなく、運動の渦中に身を置いてこそその時代の断層や隠された裏を探ることに重点を置いた。

次に、座り込みについて貞子は、「広島原爆被爆者、市民、労働者は原水禁とともに、一九七三年七月二〇日のフランスのムルロア環礁の核実験以来(中略)一二年間三〇〇回の座り込みを行って抗議しました。私が来る前日も三〇五回目抗議の座り込みをしました」(注21)「トマホーク反対の全国運動の途中、広島市の平和公園の原爆慰霊碑の前で、(中略)広島原水禁や市民団体被爆者団体の人々と共に私も座りこんだ」(注22)とも述べている。貞子は、座り込みに対しての姿勢を次のように描いている。

「何の役にも立たない」と言う人もあり、参加者の中にも時として無力感がないこともない。しかし即効的な期待はのぞめなくとも抗議を持続することで国際世論を盛りあげ禁止させねばならない(注23)。

なんの役にも立たないからと言って「傍観者」であっては、そこから何も生まれない。意志表示すること、すなわち、抗議することによって世論を盛り上げ、核実験禁止へと建設的に繋げようとしている。ここに、状況を常に前向きに転化させ内なる誠と情熱を支柱とした判断として積極的、肯定的に捉えようとする貞子の姿勢がある。貞子は『問われるヒロシマ』の中で「座りこむとは何か。幼児がひとつのことを要求してそれが入れられるまで座って動かないような断じて動じぬ抵抗の姿勢である」(注24)と原水禁の森滝市郎代表委員がよく言う言葉を引用している。

次に座り込みを詠んだ詩を挙げる。「雨中交霊」は、一九七三年七月二十日フランス核実験座り込みの日に「死者たちよ／私たちもまた三十年を耐えて生き／今も怒りに耐えて坐りこんでいるのだ。」「昏い夏」(『広島通信』(一九七四年八月号)に発表)は、「碑の前に坐った一団は／残酷な太陽に照りつけられながら／悪感のような寒さにふるえ／冷たい汗を流している。」「人間の証」は、「私は実験のたびに／原爆慰霊碑の前に坐りこんだ」と詠まれ「七五年五月に行われたインドの核実験以来、七五年十一月二十六日までに三十五回の坐りこみが行われた」と書いた(注25)と『栗原貞子全詩編』に掲載されている。前述の三篇の詩から、貞子は各国の核実験があるたびに、炎天下の日も、体が凍りつくような寒い日も活力と意力でもって体を張って抗議するため坐り込んでいる。以上のことから貞子の「核廃絶」への熱意、執念がよみ取れる。

第七節 海外での活動と国内での活動

先ず、海外での活動を考察する。

貞子は、『反核詩画集 青い光が閃くその前に』の「あとがき」に次のように当時の見解を述べている。

私にとって、八十年五月ホノルルのカイルワで開かれた非核太平洋国際会議に原水禁国文会議から出席したこと、又八二年五月に西独ケルン市で開催された⁸²国際文学者平和会議に日本の反核文学者の人々とともに参加したことは、その後の私のもの見方、考え方に深く影響し、それまで見えなかったもの、実感できなかったものが少しづつ見えるようになり、実感できるようになりました。太平洋の被爆島民や飢えたアフリカの第三世界の人々、そしてヨーロッパの人たちとの交流を通じ相互理解を深めることができました(注26)。

貞子が海外において多種多様な人々と交流したことで、グローバルな視座をもって原水爆禁止運動を多角的に捉えることになったと考えられる。なお、ケルンでの会議では発展途上国から「核の問題より飢えの問題が先決」との意見が出され、アジアからの参加者が少ないことから「戦後三八年目、新たな戦争の危機的状況の下で、核戦争の危機を訴える

日本の文学者のグループが、アジア太平洋地域の文学者に呼びかけ、「核、抑圧、貧困からの解放」をテーマに、七月二十七日から三〇日の四日間ヒロシマでアジア文学者会議を開催する(注27)と述べていることから、貞子は一人でも多くの文学者に「核」だけでなく「抑圧」、「貧困」からの解放を呼びかけ他者への連携を希求する心情が窺える。

この時期の作品としてベルリンの壁解放直後に詠まれた「壁が崩れるとき」(一九八九、十二、五)やアウシュビッツ展を見て詠んだ「ヒロシマ、アウシュビッツを忘れまい」(一九八九、十二、八)がある。

次に、国内での活動を考察する。

貞子は、次のように国内の会議に参加し、報告している記述があるので引用する。

八三年七月に広島市で行われた「核も抑圧もないアジア太平洋ヒロシマ会議」、八四年五月の「核も基地もない太平洋国際会議ヨコスカ」、更に昨年八五年十月東京で行われた「女性による反核・軍縮・非核地帯設置のため国際フォーラム」などに参加して、私のヒロシマ原体験や原爆文学などについて報告する機会をあたえられた(注28)。

更に、年譜によると次のことが挙げられる。

一九八二年「十月、「大阪城公園反核四十万人集会」の、三会場で詩の朗読。十一月「世界教員組合」主催の軍縮教育国際シンポジウムに国内委員として出席、意見発表」(中略)一九八三年二月、大阪文学学校「詩の講座」で講演。三月、「反核文学者の会」の朗読会(東京一ツ橋教育会館)で「石のこえ」の詩朗読。(中略)九月水俣市の反核反戦公害の海の母子像の除幕式に参加し、(中略)文化会館で、「水俣とヒロシマ」について挨拶(注29)。

これらのことに加えて、貞子にとって究極とも言うべき活動であるPKOに関して『朝日ジャーナル』において掲載があるので引用する。

今年四月、政府は「平和への国際貢献のため」という名目で、機雷掃海作業のために海上自衛隊の掃海艇部隊をペルシャ湾へ派遣した。その部隊の帰港に際し、海部首相(当時)や中山外相(当時)らが出席した歓迎式典が行われた。戦前から一貫して反戦・反核を訴え続けてきた栗原さんは「自衛隊の海外派遣は憲法違反」として、「掃海艇の歓迎・戦勝パレードを許さない」デモの呼びかけ人となり、集会や新聞紙上で訴え続けてきた。これが、脅迫の標的となる直接の原因となったようだ(注30)。

このことは、一九九一年十月三十日広島県呉港においてのPKO反対の抗議集会を開催した時、自宅に帰り着くよりも早く脅迫電話、脅迫状が届き自宅に投石されることになっ

たことから『朝日ジャーナル』がそのことを記事として掲載している。

私はとりわけ湾岸戦争以後、急ピッチをあげて「海外派兵反対」「護憲」で夜も昼も「集会だ」「デモダ」「講演だ」と走りつづけた。昨年十二月暮、過労のため体調を崩し、精密検査の結果、自律神経失調症と診断されて、徹底的にリラククス^マをするように言われ静養しながらぼつぼつ書いているが、状況はリラククス出来るような状況ではない。そのような状態で、私は今年の三月八十才を迎えた。(注31)。

これらのことから貞子は、請われるままにありとあらゆる集会、講演会に出席していることが解明できる。また、八十歳という年齢を押しして我が身を省みず反戦運動に没頭し、体調を崩したことは、「平和」に対する信念と執念としか言いようがないと解せる。

反PKOを詠んだ詩が「都市風景」(一九九二、五、二四)、「始めに言葉ありき」(一九九二、五、一八)、「許すな 戦争への道」(一九九二、六、二七)、「夾竹桃」(一九九二、七、七)の四編がある。このことは貞子にとって最大の関心事であり、政府への「怒り」と読者への「共有」を希求していることが考えられる。その中の一編「許すな 戦争への道」(一九九二、六、二七)を引用する。

何のために戦ったのか。／誰のために戦ったのか。／夫も息子も恋人も帰らなかった。
／教え子たちもかえらなかつた。／ヒロシマ・ナガサキでは／三十万人が灼き殺され
／全国の街々は空襲で焦土となつた。／／今も戦死した息子の写真に／毎朝 ご飯と
お茶を供えている／ととつたお母さん。／動員で被爆死した娘の写真に／花と線香
をあげて泣いている／生き残つたお母さん。／／天皇の軍隊に二千万人が殺りくされ
た／アジアの人々は／国連のブルーの帽子をかぶつた／自衛隊は見たくもないと／日
本大使館へデモをしている。／シンガポールでは／日本軍国主義の再来だと／防空壕
をつくり防空演習を始めた。／自衛隊員のなかには／戦争がしたくて入隊したのでは
ない／「海外派兵は契約違反だ」と／ポケットに退職届をしのばせて／いるものもい
る。／PKOの次は国民皆兵の徴兵制度だ。／赤い紙の召集令状一枚で／あなたの息
子や恋人が／戦場に送られる。／／あやまちはくり返しませんと／誓つた憲法第九条
／「日本の九条は世界の宝だ」と／アメリカでもヨーロッパでも／第九条を世界のす
べての国の／原則にしようという運動が起きている。／政府の行為によって再び戦争
の／惨禍がくり返されようとしている時／それを阻止するのは／主権者である私たち
国民だ。／私たちの力を総結集し／海外派兵を阻止しよう。／再びアジアへ侵略の銃
を向けまい。／許すなPKO 戦争への道／／一度目は あやまちでも／二度目は
裏切りだ／死者たちへの誓いを忘れまい。

この詩は、詩の構成に着目すると、起承転結となっている。一連では戦争での惨事を読

み、二連では戦争で亡くした遺族の思いを詠み、三連ではPKOが実施された時の具体性を詠み、四連では一連、二連、三連を踏まえて如何にすべきかそれは「許すなPKO 戦争への道」であると結論付けている。五連でさらに「二度目は 裏切りだ／死者たちへの誓いを忘れまい。」と括っている。この詩は、あやまちはくり返しませんと誓った憲法九条を賛美し、欧米でも採用としての運動が起きていると高く評価している。貞子は、鋭い洞察力と批判精神を持って詠んでいる。かつて戦争という時局の権勢に苦慮した経験を讀者に切実に感じて欲しいと希求する内容であると共に、貞子の十五年戦争での痛み、苦しみの「魂の告白」である。

第八節 核の問題への関わり

核の問題について原発は、核の平和利用として日常のエネルギー源として核にとりかまされて生きている。それに関して貞子は、核の危険性を次のように述べている。

- ・私たちは核を避けるのではなく、核がどのようにに根底的に人間を破壊するかということを知り、そして人間として核をなくするために立ち向かわなければならないと思います（注32）。
- ・原発それ自体の危険とともに原発によってつくられるプルトニウムが核兵器に転用されることに目をつむり、核兵器だけの廃絶をとなえることは、底ぬけた半面運動でしかありません（注33）。
- ・CO2削減に有利だとしているが、気は確かと疑いたくなる。「原発と原爆一字のちがい、いづれにしても地獄行き」（中略）原爆と原発は同じ放射能の一体にして双頭の怪物である（注34）。

貞子は、被爆者として「核」が根底的に人間を破壊することの脅威を体験しているがゆえ核廃絶に立ち向かわなければならぬと言及し、共感を求めていることが理解できる。また、核体制の世界戦略下での危機的な状況にやがて起こり得る恐怖を先駆的に指示したと言える。貞子は、ヒロシマの人間の悲惨、人間全体の恢復と言う公理を成立させる方向にこそすべての核兵器への秩序を立てている。更に、「核」の放射能性の脅威の実態を明言している。

核実験再開についての抗議として詠んだ詩があるので次に記述する。

「ネバタについて」、「セミ。パラチンスクについて」『ひろしまの河』第三号（一九六一年十月一日号）の十頁に掲載（注35）されている詩「ネバタについて」の四連だけを引用する。

ネバタよ／あなたがつくった広島の／廃墟のなかから／すすり泣く声はきこえぬか

／うめきの声はきこえぬか／祈りの声はきこえぬか／百千のひろしまを／その手の
なかにおさめたあなたは／その手が恐しくはないのか／百千のひろしまがいちどき
に／燃えあがる時／あなたも世界も／終ってしまうものに

「セミパラチンスクについて」詩の四連のみを引用する。

中央アジア／セミパラチンスクは／火を吐く鎌首／亡びのエネルギーを爆発させな
がら／新しい爆発をよびおこし／世界の終りを招くもの

「ネバタについて」、「セミパラチンスクについて」の二編はアメリカとソ連の核実験再
開への抗議として詠まれているものである。二編とも世界の終わりを詠んでいる。核の脅
威を体験している者だからこそ直截な主観の表白を詠んでいることがわかる。

「燃るヒロシマ・ナガサキ・ハリスバーグ」（注36）この詩の付記に「米国ペンシルベニ
ア州ハリスバーグ市のサスケハンナ川にあるスリーマイル島の1原子力発電所で重大な事
故が起きた。アメリカの被爆者とともにアメリカの政府を告発し、核廃絶を迫ることを書
いた作品とある」と記述している。

「燃るヒロシマ・ナガサキ・ハリスバーグ」を引用する。

その始めにウラニューム地獄ありき。／その始めにプルトニューム地獄ありき。（中略）
戦争が終わってヒロシマは／薔薇色に包装され／核時代の神話となって／都市に送電
された。／むらさき露草が／突然変異する原発海岸。／排気筒から吐き出される微量
放射能。／海へたれ流される／温排水の微量放射能。／百万キロワットの原子炉は／
千のヒロシマを内蔵し／瞬間の大爆発を夢見ている。（中略）／戦争が終わって／核権
力と死の商人は／ヒロシマを平和のカプセルに入れ／紙幣と棍棒で強制した。／ヒロ
シマ・ナガサキ・ハリスバーグは／核姉妹都市。

貞子はウラニューム、プルトニュームの影響を既にこの時期に知得しており、被爆の実
状は、放射能の影響が人体だけでなく植物にまでも影響を与え、世界の終わりを招き地獄
となると核の脅威を警告し、告発している。この詩は、原爆の人間の悲惨、人間全体の恢
復と言う公理を成立させる方向にこそ、すべての核からの解放があること秩序立てた詩で
ある。

おわりに

貞子は行動詩人と言われており、詩人と運動は貞子にとって車の両輪である。どちらを
欠いてもバランスが取れないのであることは前に述べた。運動家としては、初期の平和運

動から朝鮮戦争、自衛隊の増強、ベトナム戦争、日米安保条約の強化、自衛隊の海外派遣へと事態の進展に鋭く対応し、先制的に批判を展開したことを確認した。「反戦・反核・平和」のため、平和運動、原水爆禁止運動と関わり、集会、デモ署名活動、座り込みに積極的に参加し、身を持って抗議をした。乞われれば、ありとあらゆる所に講演に行き、ついには体調をくずしてしまうほどであった。「傍観者」としてではなく、抗議の渦中へ精神だけでなく肉体までも投じたその運動家としての姿勢は、詩人としての作風にも結びついていることを明らかにした。貞子がアナキストであった栗原唯一と結婚したことで、思想、信念を核にした表現、活動の数々をなお一層思索的な生き方を具現化したと言える。そして、貞子の活動の原点、形象の背景は自ら被爆したことである。原爆投下の阿鼻叫喚の惨状を体験し、その後の放射能汚染で肉体ばかりでなく、精神までも灼かれ、親しい人を失った嘆きは、貞子の中で湧出し、それが戦争への憎悪となり「反戦・反核・平和」を希求する原動力となった。

詩人としては、人間の内面の深層に照明をあて、率直に戦争の無意味、被爆の実相、世情を批判、風刺した作品を多く書きとめた。詩人であることと運動は常に結びついていたのである。そのことは、次の貞子の記述からも確認できる。

・どうか原爆反対に立ち上ってください。私は戦後ずっとそんな思いで、詩を書き、原水禁止運動などに参加してまいりました(注37)。

・私は平和の論理はつらぬかれねばならないと信じているが、セクトにはあまり拘泥しない。だから参加出来る場があれば参加し、そこから学び平和のひびきを少しでも大きくして行きたいと思っている。極端に言えば、マイナスの中からさえ学んでいくために参加の精神は持続して行きたいと思っている(注38)。

このことから、貞子は「原爆に反対」、「平和の倫理」を悲痛なまでの叫び、祈りでもって希求している、貞子の「根源の声」であることがわかる。娘の眞理子氏は母貞子のことを「ただ、反戦・平和にかんしては最後まで強い思いを持っていました」と述べている(注39)。生活を共にした娘からの証言は揺るがない事実である。また、マイナスからでも学ぼうとする姿勢は学ぶことに関していかに食欲であったかということが窺える。その証明として、広島女学院大学において開設されている「栗原貞子平和記念文庫」に「原水禁ニュース」(原水爆禁止日本国民会議発行)が、ファイル一六と一七の一九六九年五月一日号から二〇〇一年七月一日号まで間では抜けている号もあるがほとんど存在している。貞子は、一九九九年六月右脳梗塞のため左半身不随となっているが、その後、二年購読をしていることからわかる。この学ぼうとする姿勢と熱意が、先駆的な平和運動へと展開して行ったといえる。

本章における論点に基づいて整理すれば、まず、貞子における精神の最深部、思想的根幹には「革命的ヒューマニストの立場」として揺るぎない人間の尊厳に依拠する確固たる

ものがあり、同時に原爆を原体験したことにある。

貞子は、問題を表層的からだけでなく深層的視点から、多角的視野からも問い、詩人としての鋭い感性と感覚でもって媒介し、咀嚼することによって貞子は「傍観者」としてではなく、抗議の渦中へ精神だけでなく肉体までも投じた。その姿勢は、戦争、原爆の悲惨さを体験し、二度とあってはならないと「反戦・反核・平和」へと身体の動く限り、詩人として、活動家として一線を駆け抜けた。それは、貞子の生き方そのものであった。その原動力は貞子の根底に「平和への信念」と「強靱な執念」があったからこそである。徹頭徹尾「革命的ヒューマニストの立場」である心情と反核の精神は死に至るまで失われなかった。

貞子は、「反戦・反核・平和」のための講演、集会、デモ、署名運動、座りこみに逡巡することなく積極的に参加して可能な限り身をもって抗議し、一生貫いた不屈の思想の持ち主だった。それゆえ、周囲との摩擦も生じたが、セクトには関わらず、自由に参加し学び、単発的に、多種多様に関わって「反戦・反核・平和」に真剣に対峙し、運動においても詩作においても訴え続けたと結論づける。

注

- 1 栗原貞子 『どきゆめんと ヒロシマ24年 現代の救済』 二四〇～二六頁。 初出『中国新聞』 一九五九年八月二一日。
- 2 注1に同じ。 二二一頁。
- 3 栗原貞子 『ヒロシマの原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月 二七頁。
- 4 大原亨 「式辞」 『栗原唯一追悼 平和憲法の光をかかげて』 詩集刊行の会 一九八〇年十一月 一六頁。
- 5 森井忠良 「式辞」 注4に同じ。 一七頁。
- 6 注1に同じ。 一〇頁。
- 7 安藤欣賢 「ヒロシマ 表現の軌跡 第一部栗原貞子の周辺」 『中国新聞』 一九八七年七月二一日。
- 8 注3に同じ。 二五〇頁。
- 9 大牟田稔 「被爆者援護法と森滝市郎」 『軍縮問題資料』第一六二号 宇都宮軍縮研究室 一九九四年五月 六六頁。
- 10 詩 栗原貞子 画 吉野誠 『詩と画で語りつく 反核詩画集 ヒロシマ』 詩集刊行の会 一九八五年三月 一五頁。
- 11 栗原貞子 『詩集 私は広島を証言する』 詩集刊行の会 一九六七年七月 二四頁。
- 12 『ベ平連ニュース縮刷版』 「ベ平連ニュース縮刷版」 刊行委員会 一九七四年六月 五三頁～二二四頁。
- 13 注7に同じ。 一九八七年七月二九日。

- 14 注3に同じ。 二五二頁。
- 15 栗原貞子 「被爆体験を伝えること」 『国語通信』一九八三年七月・八月号第二五七号 筑摩書房 一九八三年八月 三二二頁。
- 16 栗原貞子 『核時代に生きる』 三一書房 一九八二年八月 一八七頁。
注16に同じ。 一七四頁。
- 17 『栗原貞子全詩編』 二〇〇五年七月 土曜美術社 三一三頁。
- 18 栗原貞子 「軍縮にかけるわが思い」 『月刊社会党』一九八二年四月号第三〇九号
日本社会党中央本部機関紙局 一九八二年四月 一〇四頁。
注1に同じ。 九九頁。
- 19 栗原貞子 「ヒロシマの原体験を通して」 『社会党』第三五七号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八五年二月 五六頁。
- 20 栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月 一八頁。
注16に同じ。 二二〇頁。
- 21 注22に同じ。 一九頁。
- 22 注18に同じ。 三四八頁。
- 23 栗原貞子 吉野誠 『反核詩画集 青い光が閃くその前に』 詩集刊行の会 一九八六年四月 九三頁。
- 24 栗原貞子 「文学者の戦争責任 —アジア文学者ヒロシマ会議を前に」 『月刊社会党』一九八三年八月号第三二七号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八三年八月 一六四頁。
- 25 注26に同じ。 七一頁。
- 26 注18に同じ。 五八四頁〜五八五頁。
- 27 ジャーナリスト・土井敏那 「脅迫にさらされる原爆詩人「ここで黙れば責任とれぬ」」 『朝日ジャーナル』 朝日新聞社 一九九一年一月二二日号 八六頁。
- 28 栗原貞子 「中山士郎髓筆集「原爆亭折ふし」を読んで—私的感想—」 『人類が滅びぬ前に 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月 四五頁。
- 29 栗原貞子 「ヒロシマ・ナガサキから 被爆者のこころ —正田篠枝さんと私—」 『原爆から原発まで —核セミナーの記録(上)—』 編者 原爆体験を伝える会 粕心社 一九七五年七月 七二頁。
- 30 栗原貞子 「ヒロシマについての未来について」 『旭川市民文芸』第二二号 旭川市立図書館 一九七九年一月 五六頁。
- 31 栗原貞子 『反核詩集 核なき明日への祈りをこめて』 詩集刊行の会 一九九〇年七月 四三頁。
- 32 注18に同じ。 二二六頁。「この作品と「セミパラチンスクについて」は、米国とソ連の核実験再開への抗議として「ひろしまの河」No.3(一九六一年十月一日号)に同

- 時に掲載され（後略）」。
- 36 注18に同じ。 二七五頁。「一九七九年三月に米国ペンシルベニア州ハリスバーグ市サスケンハンナ川にあるスリーマイル島の原子発電所で重大な事故が起きた。この詩の執筆年月日は不明だが、内容から見て、その直後書かれたものと思われる」
- 37 栗原貞子 「…広島で考える…」 『月刊ヒューマンライツ』 一九九二年五月号第五〇号 部落解放研究所 一九九二年五月 六二頁。
- 38 注3に同じ。 七七頁。
- 39 栗原眞理子 「思い出すまま」 『栗原貞子を語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 九六頁。

終章

本稿において栗原貞子は、行動する詩人と知られているが、なぜ詩人と平和運動とを両立させたのか疑問を持ち、それを明らかにすることを目的とした。そのためには、詩人としての側面を理解するには、社会性、思想性を理解しておくべきであると考え追究した。それゆえ、詩の解釈に当って貞子が何を言わんとしているのか、そこに隠された社会性、思想性を探りながら考察してきた。ここで一章から五章までを振り返り終章として結論を導きたい。

序章において、貞子はトイレに隠れて読むほどの読書家であったことが、詩人へと方向づけられ、アナキストである栗原唯一と結婚したことにより社会的、思想的にも目がむけられるようになったことを明らかにした。

第一章において、詩歌集『黒い卵』の数点の作品がアメリカの占領下時代検閲により削除され、自らも削除して貞子は発刊した。占領時代のことを研究している袖井林二郎氏が、メリーランド大学マツケルデン図書館に収められた膨大な量の検閲押収文書の中から『黒い卵』のゲラ刷りを発見し、八二年に堀場清子氏が、そのコピーを取り同年十月に貞子に渡した。貞子は、『黒い卵』の原型を三十六年ぶりに目にし、検閲で削除された作品についても自ら削除した短歌を加え一九八三年七月に完全版として人文書院から刊行したことを述べた。

貞子は「詩歌集『黒い卵』の冒頭の詩「黒い卵」や、「季節はずれ」「手紙」「日向ぼっこをしながら」などの詩は、私の反戦思想の基になっている思想的立場を意味する作品である」と自著の中に述べていることから詩の中にどのような表現化されているかを考察し、更に、戦時下という背景の中で詠まれた「黒い卵」については、権力に屈しない個性があり、自らどう生きるか、政治に翻弄されない自己決定があることを指摘し、抑圧と圧制の辛苦の中で、「未来」を模索し、強靱な思想としなやかな表現が生みだされた詩であると結論づけた。

また、先行研究において貞子はアナキストと評されているが貞子自身明言していないことから、アナキズムの信条である「全ての権力を否定し、自由発意、自由合意」を根底に据え、それに加え、切実な願いである愛への希求があることを詩歌集から読み解き提言した。

第二章においては、自らも被爆を体験したことにより、原爆を直叙的に詠んだ作品「生ましめんかな」、「原爆で死んだ幸子さん」はともに実在の「明暗両面」のものである」との貞子の記述から「明暗両面」の観点から二作品を考察し、「生ましめんかな」においては暗い地下室、しかも夜という「暗」としか表現できない状況から「赤子の誕生」は将来に向けての限らない希望であるとし、「明」が呈示されているとした。「原爆で死んだ幸子さん」において「死」は、「暗」であると断定する以外ないが、母が遺体に真新しい白い花柄の浴衣かけ泣き崩れた行為が「愛」であり、「明」であるとした。ここに「暗」の中にも「明」

があることを明らかにした。また、貞子は「生ましめんかな」、「原爆で死んだ幸子さん」、「私は広島を証言する」の三作品は原爆を詠む詩人の原点であると述べていることから、仮説を立てて「私は広島を証言する」においても、「明暗両面」が表現されていないかを考察した。その結果、「ゲンバクのゲの字」すら口外出来ない検閲の状況は「暗」であるが、そのような状況の中で広島証言者として自己を宣言したことは「明」であると結論づけた。

貞子は、限りなく「暗」の状態であっても微細な光を求めて「明」を見出そうとしている向日性があると提言した。これは、戦時中、反戦思想ゆえ苛酷な生活を余儀なくされた体験から培われた姿勢であり、原爆の悲惨、惨状の目撃体験が作品において、「暗」の中にも「明」を見出そうと姿勢へと繋がったと結論づけた。

第三章においては、詩「ヒロシマというとき」が詩作された背景には、何より貞子がベトナム反戦運動に参加することによって平和の意識をより強くした事実があったことを確認した。更に、「ヒロシマというとき」の詩作の直接の契機は、YWCAの吉村氏から、アメリカでの国際会議においてアジアの代表から、旧日本軍がいかに第二次世界大戦中アジアの人々を虐待したかについて聞かされるなど、アジアの人々の辛辣な反応があったことに着眼した故であるとした。また、山口県の岩国米軍基地に核兵器が貯蔵され、核部隊が存在していることが判明し、貞子の日本政府への不信感、危機感が原動力であったことであるとされた。更には、日本が、終戦当初は掲げていた「反戦・反核・平和」から、時代と共に少しずつ乖離していることから、改めて「反戦・反核・平和」の原点に立ち戻らなければならぬとの強靱な思いがあつて詩作されたものとしても位置付けた。貞子は詩を通して十五年戦争の恥部を多層的、輻輳的に捉え「原爆被爆者」でもあるが「加害」でもあるという実態を見据え、自己の人間性を率直に対峙させることによって十五年戦争への、糾弾と謝罪を投げかけ共感を求め、この状態から抜け出さなければならぬと訴えたのである。

以上のことから「ヒロシマというとき」は旧日本軍が侵略加害をしたことへの反省に立ち、日本が世界にできることとして戦争放棄の憲法の実行、核廃絶や軍備の完全撤廃を挙げ、そこから真の平和実現に向かわなければならぬとの主張が詠まれている作品であることを明らかにした。この詩は日本の現状を批判し、一石を投じたことに重要な役割を果たしたと述べているが、同時に貞子の魂の告白として同時代の人類の課題をうたいあげている。その点から見るとこの詩は貞子自身の個人史であり、昭和史への強烈な反省と現状と未来への行動提起と解されるのである。

第四章において貞子の「孤独と傷心」に陥った因果関係を述べ、そこからの脱却の契機について明らかにした。更に、貞子が、孤独の数年間を経験したことにより、自分のおこり、高ぶり、いかに自分本位であったかということに気づき反省し、人間性を成長させることができた。つまり、繊細な詩人であったが、強い活動家と変えられたといえよう。

貞子は、孤立からの脱却後、被爆韓国人の存在を知り、差別を意識するようになり、詩

「未来はここから始まる」は部落解放同盟全国婦人集会のために詠んだ。それ故、「未来」は差別と核廃絶であるとし、「ここ」においては差別に対峙し、立ち上がり、糾弾する時と捉えた。また、詩「未来への入り口」の「未来」は、平和が実現されていく世界であり、「ここ」は過去を見据え、問いかえし、声をあげる地点であると結論づけた。

更に、『詩集 未来はここから始まる』の扉に「二度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」が記載され、この「フリーズ」は後の貞子の詩に何度か繰り返されていることから「フリーズ」は平和への信念、原爆で生き残った者の責務として、二度と戦争へと突き進まないための戒めであり、メッセージであり、必然性をもった絶対的真理としてのものであると結論づけた。

第五章において、貞子は行動詩人といわれており、詩人と運動は貞子にとって車の両輪である。どちらを欠いてもバランスが取れないのであることは前に述べた。運動家としては、初期の平和運動から朝鮮戦争、自衛隊の増強、ベトナム戦争、日米安保条約の強化、自衛隊の海外派遣へと事態の進展に鋭く対応し、先制的に批判を展開したことを確認した。「反戦・反核・平和」のため、平和運動、原水爆禁止運動と関わり、集会、デモ署名活動、座り込みに参加し、身を持って抗議をした。乞われれば、ありとあらゆる所に講演に行き、ついには体調をくずしてしまっただけであった。「傍観者」としてではなく、抗議の渦中へ精神だけでなく肉体までも投じたその運動家としての姿勢は、詩人としての作風にも結びついていることを明らかにした。貞子がアナキストであった栗原唯一と結婚したことで、思想、信念を核にした表現、活動の数々をなお一層思索的な生き方を具現化したと言える。そして、貞子の活動の原点、形象の背景は自ら被爆したことである。原爆投下の阿鼻叫喚の惨状を体験し、その後の放射能汚染で肉体ばかりでなく、精神までも灼かれ、親しい人を失った嘆きは、貞子の中で湧出し、それが戦争への憎悪となり「反戦・反核・平和」を希求する原動力となった。

貞子は二〇〇一年八月発行の『月刊クレーヨン』において次のような記述がある。

力でもって他人を強制することなく、自由発意と自由合意によって生きていくことが、「平和」の原則だと思います(注1)。

この時の年齢は、八八歳である。この記述から、貞子は、自分の人生を振り返り自由発意、自由合意、平和は、貞子が生涯求めてやまなかつたものであったことが確認できる。貞子にとって「黒い卵」が詩人としての出発点であり、その背景には戦争中の思想的営為の原像が込められているからである。重ねて言うが「自由発意、自由合意、平和」は貞子の原点であり、生涯強靱な思想を維持し続けたと言える。

貞子は、戦後の日本や世界に対する不安や批判をテーマとして、日本の政治に視点を置けばかりでなく世界の政治に対しても鋭く言葉を発信した。戦前は反戦の歌を詠み、戦後は被爆から部落や朝鮮人や被爆者への差別、水俣公害問題、沖縄問題、朝鮮戦争、ベトナム

ム戦争への批判、中国の天安門事件、チェルノブイリ、セミパラチンスク、スリーマイル、ビキニ等の汚染問題、ベラウへの核廃棄投棄の問題、阪神大震災の被災者、多くの人々を悼む詩がある。次に、貞子の人間性を更に、理解するため貞子の語録を次に紹介する。

・近代思想は、人間を人間として生かさないう圧制と搾取、貧困と差別からの解放の思想である(注2)。

・核兵器の存在が、人間を脅かし続けている核時代の今日、核兵器が、人間の肉体と精神にもたらせるものを具体的に形象化した原爆文学は、世界の共通のテーマであります。世界の文学者がそれぞれの想像力によって、文明を偽装した核の野蛮の根源に迫り、一日も早く核時代を終わらせねばならないと思います(注3)。

・言葉によって人間を戦争に駆り立てることが可能なら、言葉によって生命の尊厳と人権平和の思いを深め拡げて平和を創造する人間を創ることも可能でなければならぬ。(中略) 文学や詩は決していつも無力であるわけではない。言葉は民衆の胸奥に火を点じ、時いたりなば世界を変えるのだ(注4)。

これらの記述から近代思想にまで言及し、核兵器の存在を危惧し、言葉の力と言葉を介して人と人が繋がることの大切さを説き続けたことが確認できる。

栗原貞子論ということにおいて貞子が念願する「反戦・反核・平和」を論じてきた。このように述べる事ができるのは、貞子が核兵器の破壊力を体験したからである。貞子は、広島証言者として自己を宣言し、後の世代に戦争の実相を伝え得る事を使命とした。それゆえ、その問題意識を原動力とすることによって、詩人の感性と批評家の理性を兼ね備え、更に拡大するため運動へと邁進させ、行動する詩人と評されるようになったと結論づける。

注

- 1 栗原貞子 『月刊クレーヨン』 二〇〇一年八月号 クレヨンハウス 二〇〇一年八月九四頁。
- 2 栗原貞子 「国家悪を逆照射する被爆者たち」栗原貞子 ≪部落・朝鮮人・被爆者・公害患者を軸に≫ 『解放教育No.22』 明治図書出版 一九七三年四月 一〇九頁。
- 3 栗原貞子 「被爆体験と文学について」 『核 貧困 抑圧』 ほるぷ社 一九八四年二月 二〇八頁。
- 4 『反核詩集 核なき明日への祈りをこめて』 詩集刊行の会 一九九〇年七月 五三頁。

*詩の引用は『栗原貞子全詩編』(土曜美術社)に拠るものとする。なお、漢字は適宜旧漢

字を新漢字に改めた。

参考文献目録

〈テキスト〉

栗原貞子 『詩集 私は広島を証言する』 詩集刊行の会 一九六七年八月
栗原貞子 『どきゅめんと ヒロシマ24年 現代の救済』 社会新報 一九七〇年四月

栗原貞子 『ヒロシマ 未来風景』 詩集刊行の会 一九七四三月

栗原貞子 『ヒロシマの原風景を抱いて』 未来社 一九七五年七月

栗原貞子 『ヒロシマというとき』 三一書房 一九七五年三月

栗原貞子 『核・天皇・被爆者』 三一書房 一九七八年七月

栗原貞子 『詩集 未来はここから始まる』 詩集刊行の会 一九七九年四月

栗原貞子 『詩集 核時代の童話』 詩集刊行の会 一九八二年三月

栗原貞子 『核時代に生きる』 三一書房 一九八二年八月

栗原貞子 『黒い卵(完全版)』 人文書院 一九八三年七月

栗原貞子 『詩と画で語りつぐ 反核詩画集 ヒロシマ』 詩集刊行の会 一九八五年

三月

栗原貞子 『反核詩画集 青い光が閃くその前に』 詩集刊行の会 一九八六年四月

栗原貞子 『反核詩集 核なき明日への祈りをこめて』 詩集刊行の会 一九九〇年七

月

栗原貞子 『問われるヒロシマ』 三一書房 一九九二年六月

栗原貞子 『反核詩集 忘れじのヒロシマわが悼みうた』 詩集刊行の会 一九九七年

六月

伊藤成彦編『栗原貞子全詩編』 土曜美術出版社 二〇〇五年七月

〈参考文献一覧〉

単行本

大原林子 『聖手に委ねて』 大原三八雄 一九四三年三月

浜井信三 『原爆市長』 朝日新聞社 一九四七年十二月

ジョン・ハーシー著 谷本清・石川欣一訳 『ヒロシマ』 法政大学出版局 一九四九

年四月

中国新聞社編『炎の日から20年―広島の記録2』 未来社 一九六六年六月

中国新聞社編『証言は消えない―広島の記事』 未来社 一九六六年七月

広島県議会事務局調査課編『四年のあゆみ』 広島県議会事務局 一九六七年四月

ヒロシマ編集委員会編『詩集ヒロシマ戦後25年アンソロジー』 広島市国泰寺町浅野図

書館内 一九六九年四月

増岡敏和 『八月の詩人』 東邦出版社 一九七〇年八月

- 毎日新聞社編『この炎は消えず広島文学ノート』 毎日新聞社 一九七一年二月
- 三好行雄 『はなわ新書⁰⁴³ 日本の近代文学』 塙書房 一九七二年七月
- 平岡敬 『偏見と差別』 未来社 一九七二年八月
- 永井隆 『長崎の鐘』 中央出版 一九七六年二月
- 芥川龍之介『芥川龍之介全集第七卷』 岩波書店 一九七八年二月
- 大原亨 『式辞』 『栗原唯一追悼 平和憲法の光をかかげて』 詩集刊行の会 一九八〇年十一月
- 森井忠良 『式辞』 『栗原唯一追悼 平和憲法の光をかかげて』 詩集刊行の会 一九八〇年十一月
- WCOTP・日教組報告書編集委員会『世界の平和・軍縮教育―一九八二年国際シンポジウム報告―』 勁草書房 一九八三年七月
- モニカ・ブラン『検閲一九四五―一九四九―禁じられた原爆報道』 時事通信社 一九八八年二月
- 岩崎健二 『風のように炎のように 峠三吉』 汐文社 一九九三年六月
- 黒古一夫 『原爆文学―核時代と想像力―』 彩流社 一九九三年七月
- 中国新聞社編『広島県文化百選⑥作品と風土編』 中国新聞社 一九八八年三月
- 三好行雄 『近代の抒情』 塙書房 一九九〇年九月
- 永井隆 『序文』 『日本の原爆記録 ②』 日本図書センター 一九九一年五月
- 堀場清子 『禁じられた原爆体験』 岩波書店 一九九五年六月
- 西田勝・平和研究室編『世界の平和博物館』 日本図書センター 一九九五年八月
- 古田元夫 『増補新装版 ベトナムの世界史 ―中華世界から東南アジア世界へ』 東京大学出版会 一九九五年九月
- 坂根俊英 『萩原朔太郎 ―詩の光芒―』 一九九七年二月
- 木坂涼／水内喜久雄編『いま中学生とよみたい一〇一の詩』 民衆社 一九九九年四月
- 吉澤南 『ベトナム戦争 ―民衆にとつての戦場―』 吉川弘文館 一九九九年五月
- 田口武雄編『20世紀 どんな時代がったのか 戦争編』 「大戦後の日本と世界」 読売新聞社 一九九九年六月
- 広島県詩人協会編『アンソロジー―広島現代詩』 広島県詩人協会 二〇〇〇年四月
- 水内喜久雄編『こどもといっしょに読みたい詩一〇〇』 たんぽぽ出版 二〇〇二年四月
- 高文研編集部編『中・高校生と読みたい若い日の詩』 高文研 二〇〇三年四月
- 安斎育郎 『ビジュアルブック語り伝えるヒロシマ・ナガサキ(三巻)原爆はなぜ落とされたのか?』 新日本出版社 二〇〇四年十一月
- ジョン・W・トリート『グラント・ゼロを書く―日本文学と原爆』 法政大学出版局 二〇〇七年七月
- 足立直子 『芥川龍之介 異文化との遭遇』 双文社 二〇一三年二月

高雄きくえ編『被爆70年ジェンダー・フォーラム』広島「全記録」 ひろしま女性学研
究所 二〇一六年一月

日本平和学会編『植民地化のための平和学』平和研究第四七号 早稲田大学出版部 二
〇一六年一月

川口隆行編『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社 二〇一七年九月

〈単行本所収論文〉

栗原貞子 「八・六の意味するもの5 —大田洋子とG・アンデルスを軸に」 『ヒロ

シマの意味』 小黒薫編 日本評論社 一九七三年六月

〈ベトナムに平和を！〉市民連合（ベ平連）編『ベ平連ニュース縮小版』 「ベ平連ニ

ュース縮小版」刊行委員会 一九七四年六月

栗原貞子 「ヒロシマ・ナガサキから 被爆者のこころ —正田篠枝さんと私—」 『原

爆から原発まで 「核セミナー」の記録（上）』 原爆体験を伝える会編 ア

グネ 一九七五年七月

片岡弥吉 「序文」 『長崎の鐘』 中央出版社 一九七六年二月

原民喜 『定本原民喜全集』 青土社 一九七八年一月

栗原貞子 「ヒロシマについての未来について」 『旭川市民文芸』二二号 旭川図書

館 一九七九年一月

栗原貞子 「ヒロシマからの苦言」 『あえて言う—中国とソ連への直言』 すすさわ

書店 一九八〇年三月

栗原貞子 「被爆体験と文学について」 『核 貧困 抑圧』 ほるぷ社 一九八四年

二月

吉田欣一 「栗原貞子の詩行動について」 『日本現代詩文庫 17 栗原貞子詩集』 土

曜美術社 一九八四年七月

石川逸子 「栗原貞子の軌跡」 『女がヒロシマを語る』 インパクト出版会 一九八

八年二月

堀場清子 『原爆表現と検閲 日本人はどう対応したのか』 朝日新聞社 一九九五年

八月

栗原貞子 「戦争の過去と現在と未来」 『現代の差別を考える3』 全国同和教育研

究協議会事務局 一九九七年五月

高橋順子 『現代日本女性詩人85』 新書館 二〇〇五年三月

黒古一夫 『21世紀の若者たちへ4 原爆は文学にどう描かれてきたか』 八朔者 二

〇〇五年八月

福岡良明 『「反戦」のメディア史—戦後日本における世論の拮抗—』 世界思想社 二〇

〇六年五月

水島裕康 「栗原貞子論〈原民喜との比較を中心として〉」 『栗原貞子は語る 一度目

- はあやまちでも』 広島に文学学館を！市民の会 二〇〇六年七月
- 安藤欣賢 「べ平運動から加害性に気付く」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月
- 伊藤真理子 「栗原貞子の詩と思想」 『栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月
- 栗原真理子 「思い出すまま」 『栗原貞子を語る 一度目はあやまちでも』 広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月
- 繁沢敦子 『原爆と検閲』 中央公論新社 二〇一〇年六月
- 川口隆行 『原爆文学という問題領域』 創言社 二〇一一年五月
- 広島市文化協会文芸部会編 『占領期の出版メディアと検閲 戦後広島の文芸活動』 勉誠出版 二〇一三年一〇月
- 栗原貞子 「中山士郎髓筆集「原爆亭折ふし」を読んで―私的感想―」 『人類が滅びぬ前に』 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月
- 伊藤成彦 「栗原貞子の世界 ―栗原書簡の背景」 『人類が滅びぬ前に』 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月
- 水島裕康 「栗原貞子論―原民喜との比較を中心として―」 『人類が滅びぬ前に』 栗原貞子生誕百年記念』 広島文学資料保全の会 二〇一四年一月
- 〈雑誌掲載論文〉
- 栗原貞子 「死んだ娘は浮かべられるか」 『会報』第四号 原爆文学を読む会 一九六〇年七月
- 栗原貞子編『ひろしまの河』第一号 原水爆禁止広島母の会事務局 一九六一年六月
- 栗原貞子 「光あるうち」 『世界』一九六四年八月号第二二四号 岩波書店 一九六四年八月
- 栗原貞子 「広島の中の私」 『ぶれるうど』第二五号 大原三八雄 一九六五年七月
- 原水爆禁止広島母の会編「あとがき」『ひろしまの河』第一五号 原水爆禁止広島母の会事務局 一九六六年八月
- 日高六郎 「サルトルとの対談 ―知識人・核問題について」 『広島印象』『世界』一九六六年第二五三号二月号 岩波書店 一九六六年二月
- 栗原貞子 「回想 ―敗戦・中国文化・短歌―」 『火幻』第一〇巻二七号 火幻の会 一九六七年十月
- 栗原貞子 「わたしの見た ヒロシマ」 『輪』第二五号 輪の会 一九六八年五月
- 栗原貞子 「帛紗」「生命賛歌」「三つの珠」によせて」 『真樹』第四〇巻第一号 真樹社 一九六九年一月

- 栗原貞子 「わが戦後終焉の書」 『会報』第六号 原爆文学を読む会 一九七〇年四月
- 栗原貞子 「被爆者青年同盟の軌跡」 『現代の眼』 現代評論社 一九七一年一二月
- 栗原貞子 解放の思想第十八 「国家悪を逆照射する被差別者たちⅡ栗原貞子」 ≧部落・朝鮮人・被爆者・公害患者を軸に≧ 『解放教育』一九七三年第二二号 明治図書出版 一九七三年四月
- 栗原貞子 「栗原貞子の眼」 『文学』 週刊金曜日第一七七号 一九七四年七月四日
- 栗原貞子 「栗原貞子の眼」 『文学』 週刊金曜日第一七八号 一九七四年七月一日
- 栗原貞子 「栗原貞子の眼」 『文学』 週刊金曜日第一七九号 一九七四年七月一日
- 栗原貞子 「栗原貞子の眼」 『文学』 週刊金曜日第一八〇号 一九七四年七月二五日
- 亀山太一 「広島夏の夏は百日花の花でいろどられる」 『月刊経済春秋』 広島春秋社 一九七六年一月
- 栗原貞子 「ヒロシマに生きた女たち」 『季刊長崎の証言』第四号 長崎の証言の会 汐文社 一九七九年五月
- 栗原貞子 「ヒロシマについての未来について」 『旭川市民文芸』第二二号 旭川市立図書館 一九七九年一月
- 栗原貞子 「ヒロシマからの苦言」 『あえて言うー中国とソ連への直言』 すすさわ書店 一九八〇年三月
- 栗原貞子 「原爆登校日の私のお話」 『季刊長崎の証言』 長崎の証言の会 汐文社 一九八〇年十一月
- 小松弘愛 「栗原貞子 生ましめんかな —原子爆弾秘話—」 『高知学芸高等学校研究報告』 第三〇号別冊 一九八一年三月
- 栗原貞子 「報告！ 憲法をとりでに平和創造を」 『月刊社会党』一九八一年五月号 第二九八号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八一年五月
- 吉田欣一 「栗原貞子論」 『コスモス』第三六号 コスモス社 一九八二年一月
- 栗原貞子 「耐えられるのか」 『子どもたちに平和な地球を残したい』 日本子どもを守る会 一九八二年四月
- 栗原貞子 「軍縮にかけるわが思い」 『月刊社会党』一九八二年四月号第三〇九号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八二年四月
- 栗原貞子 「反核詩集より」 『新しい家庭の科学』八月号 ウイ書房 一九八二年七月
- 堀場清子 「占領下の検閲をみる —栗原貞子詩歌集『黒い卵』をテキストとして—」 『未来 九』一九八二年第一九二号 一九八二年九月

- 栗原貞子 「他者と私を結ぶ詩を」 『詩と絵画 随想集』 詩通信社 一九八二年一月 二頁 三八頁。
- 栗原貞子 「著者は語る 原爆体験を伝えること 「生ましめんかな」「ヒロシマというとき」の周辺」 『国語通信』一九八三年七月・八月号第二五七号 筑摩書房 一九八三年八月
- 栗原貞子 「文学者の戦争責任 ―アジアの文学者ヒロシマ会議を前に」 『月刊社会党』一九八三年八月号第三二七号 一九八三年八月
- 栗原貞子 「歴史に学ばない日本人」 『月刊社会党』一九八五年九月号第三五四号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八五年九月
- 栗原貞子 「ヒロシマの原体験を通して」 『月刊社会党』一九八五年十二月号第三五七号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八五年十二月
- 細川正 「人物風土記―社会主義者の群像広島―平和と社会主義をひたすら求めつづけて」 『月刊社会党』一九八六年四月号第三六二号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八六年四月
- 栗原貞子 「平和・被爆者・女性」 『部落解放ひろしま』第四号 部落解放同盟 広島県連合会 一九八六年六月
- 栗原貞子 「ヒロシマの文学の回想と今日 ―広島文学館構想に際して―」 『詩と思想』第三八号 土曜美術社 一九八七年八月
- 『女性自身』光文社 一九八八年八月十四日号
- 栗原貞子 「黒い折鶴の心」 『月刊社会党』一九八八年一月号第三八四号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八八年一月
- 栗原貞子 「二つの文集」 『月刊社会党』一九八八年二月号 日本社会党中央本部機関紙局 一九八八年二月
- 栗原貞子 「地下室の誕生」 『軍縮問題資料』第一二二号 宇都宮軍縮研究室 一九九〇年一月
- ジャーナリスト・土井敏那 「脅迫にさらされる原爆詩人「ここで黙れば責任とれぬ」
- 『朝日ジャーナル』一九九一年一月二二号 朝日新聞社 一九九一年一月
- 栗原貞子 「…広島で考える…」 『月刊ヒューマンライフ』一九九二年五月号 部落解放研究所 一九九二年五月
- 大牟田稔 「被爆者援護法と森滝市郎」 『軍縮問題資料』第一二二号 宇都宮軍縮研究室 一九九四年五月
- 栗原貞子 『月刊クローン』二〇〇一年八月号 クレヨンハウス 二〇〇一年八月
- 栗原貞子全詩編の刊行を勧める会『暮らしの手帳』第十八号 「生ましめんかな」 二〇〇五年一〇・一一月号
- 高橋夏雄 「反核60年栗原貞子追悼」 『文芸日女道』十一月号 姫路文学人会議 二

〇〇五年一月

高山正行 「差別が生んだ悩める犯罪者」 『日本人が勇気と自信をもつ本朝日新聞の

報道を正せば明るくなる』 株式会社テームス 二〇〇七年四月

川口隆行 「“あやまちはくり返しません”と誓ったわたしたち」 『日本文学』

55 (11) 68—76 二〇〇七年一月

〈雑誌特集号〉

栗原貞子編『中国文化』（原子爆弾特集号） 栗原唯一 一九四六年三月

栗原貞子編『中国文化』発刊並に原子爆弾特輯について 『中国文化』原子爆弾特

集号復刻並に抜き刷り（二号〜一八号） 栗原貞子 一九八一年五月

〈新聞掲載記事〉

『原水禁ニュース』第五一号 一九六九年五月一日

「岩国に核貯蔵！」「本土の沖繩化」 『原水禁ニュース』第八〇号 一九七一年一二

一日

安藤欣賢 「ヒロシマ表現の軌跡 第一部栗原貞子の周辺 1」 『中国新聞』 一九

八七年七月七日

安藤欣賢 「ヒロシマ 表現の軌跡 第一部栗原貞子の周辺 1」 『中国新聞』 一

九八七年七月二一日

『中国新聞』「助産婦のヒロシマ」 一九八八年八月二日

『赤とんぼ』 「広島からふたつのメッセージ」 小石玲子 一九九二年五月

堀場清子 「戦後70念志の軌跡 番外編 憲法が揺らぐ時代に ①」 『中国新聞』 二

〇一五年五月八日

森田裕美 「戦後70年志の軌跡 第5部栗原貞子①」 『中国新聞』 二〇一五年一二

月一六日

〈ファイル資料〉

「反核・平和・文化を考える―栗原貞子氏の講演から― 82・5・7 第2回芸文セミナ

ーにおいて 「芦屋市立潮見中二年との交流関連文献」 栗原貞子平和記念文庫 ファ

イル四五

広島女学院大学「栗原貞子平和記念文庫」所蔵。ファイル一六

右同じ。 ファイル一七